

# 修士学位論文

## 「もの」としてのケータイ

—東京におけるエスノグラフィーを通じたメディア論—

平成21年度

文化・人間情報学コース

086224

**MINERVA TERRADES**

指導教員 水越 伸 教授

## はじめに

はじめて来日したのは 2000 年だった。その時、よく日本に住んでいる人々を観察していた。大勢がケータイを手に持って、じっとケータイを見ながら、キーボードをいじっていた。「ケータイで何をしているのか」、「なぜ長時間ケータイを見つめているのか」という疑問を持ち始めた。日本に暮らしていたその頃の私は、白黒のプリペード式ケータイを持っていた。

2006 年、また日本にやってきた。その時、カラー画面のカメラ付ケータイを持ち始めた。東京の人々の日常を観察してみると、「電話をしている」からケータイを使っているのではなく、電車の中で寝ていても手にケータイを持っている人、友人と一緒にいても話さないでケータイをいじっている人、独特な格好でケータイで写真を撮っている人など興味深い。これらの現象を観察し、なぜケータイがそこまで人間を動かせるのか、人間を捉えるのかという問いが頭から離れなくなった。人がケータイというモノに対して感じる必要性はどこから来たのか、そしてそれはどんな必要性なのか、明らかにしたいと感じた。

そこで、本論では、今までのケータイ研究の中心であったケータイの利用方法や若者におけるコミュニケーション、職場でのケータイの役割よりも、ケータイがどのようにして自分の一部になるのかという点について考察したい。勿論、ケータイの利用の仕方、コンテキスト、人間関係も全てふまえた上での問いであるが、その問いに答えるには、人間を中心に利用の形態を分析するだけでは不十分な気がする。そのため、人間ではなく、ケータイを中心に分析を試みたい。言い換えれば、ケータイが自分自身の一部になるような行動について考察する際、「ケータイというモノが何なのか」、そして「それがなぜ重要なのか」という点を明らかにする必要がある、その問いに答えるためには、「ケータイ」というモノそのものを分析しなければならない、ということである。

バルセロナにいる時の私は、ケータイで電話をし、時々メールもする。それに対し、日本にいる時の私は常にケータイを持ち、絵文字、写真、インターネットなど、ケータイを多様に利用し、ケータイに対する必要性を肌を感じる。本論では、私自身が体験したような、ケータイが自分の一部になるプロセスを、東京に住んでいる人々を対象にしたフィールドワークに基づいて詳細に語りたい。

# 目次

はじめに	1
図表一覧	4
1. 序論	6
1.1 問題関心：「モノ」という存在	6
1.2 先行研究	8
1.3 研究対象	12
1.4 研究方法	14
1.5 本論の構成	16
2. ケータイにおける人間関係の形成と形態	17
2.1 フォルダー化された人間	19
2.2 ストラップされた人間関係	23
2.3 通話コミュニケーション	26
3. 社会を潤滑にする愉快性	30
3.1 ケータイメール	30
3.1.1 【調整メール：ケータイはわれわれの日常を組織する】	33
3.1.2 【延長メール：ケータイがわれわれの関係を継続させる】	41
3.1.3 【交感メール：感情の穴】	43
3.2 絵文字に捕らえられる人間	51
3.3 ケータイメールにおける愉快性	58
4. ケータイ化された空間	62
4.1 プライベートとパブリックの境界線	62
4.2 ケータイへの規制と公共空間	65
4.3 三つの空間とケータイの関係性	66
4.4 ケータイの置かれる場所	72
4.5 ケータイという空間	75
5.ケータイ画像における四角形の記憶・不滅の瞬間	77

5.1 実用画像	77
5.2 感情画像	81
5.3 画像を撮る身体	90
<b>6 ケータイと身体</b>	<b>94</b>
6.1 ケータイをめぐる身体の動作	94
6.2 ケータイによってアフォードされる表情	96
6.3 ケータイの中の身体	98
6.4 ケータイと身体の融合という行為	99
<b>7. 結論</b>	<b>104</b>
7.1 人間のユニットを壊すケータイ	104
7.2 ケータイにおけるシンプルなコミュニケーション	107
7.3 ケータイと人間が感じ合う	108
7.4 OBJECT と SUBJECT の分類の無化	108
<b>おわりに</b>	<b>110</b>
<b>参考文献（筆者名 ABC 順）</b>	<b>112</b>



## 図表一覧

表 1	調査対象者	14
表 2	表情絵文字	53
表 3	表情絵文字	53
表 4	雰囲気絵文字	54
表 5	モノ絵文字	55
表 6	身体絵文字	55
表 7	絵文字	56
表 8	自分絵文字	57
表 9	マリさんの一日ケータイ利用（社会人）	70
表 10	かなこさんの一日ケータイ利用（OL）	70
表 11	あゆみさんの一日ケータイ利用（大学生）	71
図 1	ケータイコミュニケーションの枠組	19
図 2	人のフォルダー（左から順に A.B.C.D.）	21
図 3	人のフォルダー（左から順に A.B.）	22
図 4	人のフォルダー（左から順に A.B.C.D.）	22
図 5	ケータイストラップ	23
図 6	ケータイストラップ	24
図 7	買い物メモ	38
図 8	お誕生日メール	45
図 9	お誕生日メール	46
図 10	合格おめでとうメール	46
図 11	お誕生日メール	47
図 12	絵文字の元	57
図 13	絵文字の元	58
図 14	公共空間における規制（左から順に A.B.C.）	65
図 15	公共空間・ケータイ置き場所（左から順に A.B.C.D.E.F.G.H.I.J.）	73
図 16	半公共空間・ケータイ置き場所（左から順に A.B.C.D.E.F.）	74
図 17	個人空間・ケータイ置き場所（左から順に A.B.C.D.E.）	75
図 18	実用画像（左から順に A.B.C.D.）	78
図 19	実用画像（左から順に A.B.）	79
図 20	伝統的な画像（左から順に A.B.C.D.）	82
図 21	瞬間画像（左から順に A.B.C.D.）	83
図 22	瞬間画像	84

図 23	お気に入り画像・ペット（左から順に A.B.C.）	86
図 24	犬のお誕生日メール（左から順に A.B.）	87
図 25	お気に入り画像・動物（左から順に A.B.C.）	87
図 26	お気に入り画像・食べ物（左から順に A.B.C.）	88
図 27	お気に入り画像・景色（左から順に A.B.C.D.E.）	88
図 28	思い出画像（左から順に A.B.）	89
図 29	できた！画像（左から順に A.B.C.D.）	90
図 30	ケータイと身体	97
図 31	頭を動かせるメール	100
事例 1	家族同士（まりこ・かなこ）	34
事例 2	家族同士（古澤・かおり）	34
事例 3	恋人同士（マリ・松本）	35
事例 4	友達同士（梅村・片岡）	36
事例 5	家族同士（さおり・あゆみ）	36
事例 6	家族同士（あゆみ・さおり）	38
事例 7	家族同士（古澤・かおり）	39
事例 8	家族同士（まりこ・かなよ）	39
事例 9	恋人同士（鳥海・あつこ）	40
事例 10	恋人同士（松本・マリ）	41
事例 11	友達同士（佐藤・やすじろ）	42
事例 12	家族同士（あゆみ・さおり）	47
事例 13	恋人同士（マリ・松本）	47
事例 14	恋人同士（松本・マリ）	49
事例 15	恋人同士（松本・マリ）	49
事例 16	恋人同士（あつこ・鳥海）	50
事例 17	恋人同士（あつこ・鳥海）	51
事例 18	家族同士（あゆみ・さおり）	79
事例 19	恋人同士（松本・マリ）	84

# 1. 序論

## 1.1 問題関心：「モノ」という存在

「モノとは何か」と考える時、なぜか簡単な答えが出ない。「モノ」の特徴といえば、生きていないことである。「モノ」はとてもシンプルな言葉だが、辞書で検索してみると、非常に興味深い定義が出てくる。大辞泉によると、「モノ」とは「空間のある部分を含め、人間の感覚でとらえることのできる形をもつ対象」であり、また、「人間が考えることのできる形のない対象」が最初の定義になる。英語で検索してみると、Oxford Dictionary of English では、「モノ」(thing) は「具体的な名前を付けたくない、付けることができない、また、付ける必要がない対象<sup>1</sup>」、または「感じる生き物とは異なる、無生命の物質的な対象<sup>2</sup>」として定義されている。カタロニア語でのカタロニア研究会 (IEC) 辞書を見てみると、「モノ」(cosa) は「肉体的、精神的、具体的、抽象的に区別できる実体として存在している対象<sup>3</sup>」、「具体的、具象的な対象<sup>4</sup>」または「無生命の対象<sup>5</sup>」として定義されている。

私が「モノ」の意味を見て感動する理由を、特に 2 つ挙げたい。1 つは、「無生命」という特徴である。カタロニア人としては、「モノ」は無生命であるという感覚を持っている（ただし日本語の辞書ではこの感覚がないようである）が、「なぜ無生命なのか」と考える時、「生き物と比較しているから」としか答えようがない。ただ、「モノ」にも生命があり、経験があり、生き物と同様に空間に存在する。「モノ」は、人間のように考えることはできないし、人間的に感じることもできないが、「生命」がないとは思えない。「モノ」は、存在している限り、生命があるのではないだろうか。また、2 つ目の理由は、「モノ」という言葉が含意する現実である。われわれは言葉を使うことで現実をシンプルにしてしまう。例えば、「ペン」という言葉には、そのペンの色、特徴、持ち方、そのペンがわれわれにもたらす経験などに関する情報は、まったくない。「ペン」という一語には、複雑な現実が反映されないのである。それでも、現実を言葉でシンプルに表現しないと、コミュニケーションがとれなくなる。「モノ」という言葉を頻繁に使う理由は、現実の複雑性を言葉にできないからともいえる。すなわち、現実を語れないからこそ、「モノ」としか言えない場合が多い。だが一方で、「モノ」という表現は、上記のようなわれわれの言葉の限界を超えることもできる。つまり、言葉で説明するには複雑すぎる現実を、単に「モノ」と名付けることによって、言葉で現実を制限することなく表現し、理解することが可能になる。だからこそ、われわれは「モノ」という語に魅力を感じるのであろう。

---

<sup>1</sup> An object that one need not, cannot, or does not wish to give a specific name to.

<sup>2</sup> An inanimate material object as distinct from a living sentient being.

<sup>3</sup> Tot allò que existeix o és concebut d' existir com una entitat separada, sia corpòria o espiritual, real o abstracta.

<sup>4</sup> Allò que és real, concret.

<sup>5</sup> Objecte inanimat.

われわれの社会では、人間を思考の中心に置く考え方が強い。社会学の研究の中でも、人間が第一義的な位置に立っている。ただ、社会は人間のみで構成されているわけではない。また、人間も、「モノ」、空間、状況に合わせて構成される。「モノ」の場合、人間に適応した「モノ」もあるが、人間が「モノ」に適応することも多い。人間と「モノ」における相互作用では、人間も「モノ」も互いに構成されている。例えば、受胎を例に考えてみたい。New Orleans（アメリカ）と Maasdriel（ホーランド）は、共通の経験がある：停電のベビーブームである。Maasdriel の場合、停電の9ヶ月後出生率が44%増えた<sup>6</sup>。われわれのごく普通の日常生活は、会社から家に帰り、テレビを見る、またはパソコンをするといったものであろう。ただ、電気がないと、普段の生活ができなくなり、代わりに性交するようになるらしい。このような状況は初めてではなく、珍しくもない。地球各地で起こったことである。つまり、子供を生むには電気が重要なアクターの1つである。

ここで、興味深いアプローチを紹介したい。2005年に出版された“Reassembling the social: Actor, Network, Theory”の中で、LatourはActor-Network Theoryというアプローチを整理している。この理論は、4つの基本的な点から構成されている。（1）構成された社会現象よりは、構成自体の方が重要である。構成の営みこそを分析すべきであり、その構成に関する議論は極めて刺激的である。例えば、「学校とは何か」ではなく、「どのように学校という組織が構成されてきたのか」という問いこそが重要なのである。（2）行動は多様なアクターが媒介する「結び目」（node）といえる。例えば、「学校へ行く」という行動には、様々なアクターが作用している（親、鞆、バスなど）。様々なアクターが結びつきあって、1つの社会現象となる。（3）行動に作用しているアクターは、人間に限らず、モノや物質も作用している。われわれの日常生活にはモノも作用しているのだ。（4）どんな出来事も、文化的・物質的な関係性や作用の複雑な営みによって構成されている(Latour, 2005; Tirado, 2005)。

われわれの関係性の構成には、多様なアクターが作用していることを指摘し、そのアクターが人間だけではなく、「モノ」も含んでいるという点が本論の1つの重要な視点である。例として、二つの興味深い論文を通じて、アクターとしての「モノ」という観点を例証したい。1つ目は、Lucy Suchman (2005)の論文である。PARC (Xerox Corporation's Palo Alto Research Center)という技術研究の会社におけるコピー機が対象として取り上げられ、そのコピー機がいかにPARC研究者のアイデンティティを構成しているのかが分析されている。彼女が指摘するように、モノには多様な可能性があり、日常を組織している。環境的な観点から見ると、モノは必ず場所と強く関連している。人間はいつもある特定の場所に位置し、モノと場所は互いに影響を与えあうという。論文のタイトルである「affiliative objects」(提携するモノ)は、この論文において、「モノ」と人間をそれぞれ特徴づけるような、両者の連結(あるいは分離)の関係性

---

<sup>6</sup> [www.cnn.com](http://www.cnn.com)と[www.smh.com.au](http://www.smh.com.au)のニュースから(2009年3月10日参照)。

のダイナミクスを説明するために、比喩的に用いられている語句である。「モノ」は、無意味などではなく、多様な関係性を具体化するという点において、重要な意味を持つと指摘されている。2 つ目の論文は、Knorr-Cetina の論文であり、特に「object-centered sociality」という概念に着目したい。生物の研究を行なっている研究者と生物との関係性を研究対象として、Knorr-Cetina は彼女が提唱する「モノ中心の社会」(object-centred sociality)という理論を展開する。彼女によると、「モノ」は社会性の概念の中に含まれるべきである。人間と「モノ」は絡み合い、両者の間には親密な関係があり、共有する主体性を持っている。人間は「モノ」に束縛され、「モノ」と一体となって考える。「モノ」は主体を維持し、位置づけるという(1997:9)。つまり、ここで紹介した2つの論文では、「モノ」が社会関係にとって極めて重要であり、人間と密接に関係していることが示されている。

本研究では「モノ」の重要性をふまえて議論したい。「携帯電話<sup>7</sup>」という「モノ」を取り上げ、それをアクターとして位置づけた上で、ケータイにおける社会的な関係性を分析することを目的としている。これまでのケータイ研究では、特にケータイの利用方法が中心的に分析されてきた。しかし、ケータイの利用方法やケータイにおける人間関係だけではなく、人とケータイという「モノ」との関係性、また、空間との関係性を語ることも大切なのではないだろうか。そして、ケータイについて概括的に分析を行うというよりは、詳細なフィールドワークを通して、ある人々の関係性とそのコンテキストとの絡み合いを分析し、ケータイが人間と一体になるプロセスを検証したい。

## 1.2 先行研究

学問は文化によって異なる。「ケータイ研究」をしている西洋人は、いくつかのアプローチを用いている。アプローチはきちんと区別できない場合が多く、明確な説明はしにくい、基本的には2つのアプローチがある。第一に、アプローチである。このアプローチは社会には真実があるという確信に基づき、仮説を立て、しばしば量的な研究を行なって、立てた仮説が事実かどうかを確認するやり方である。第二に、社会構築主義的なアプローチである。このアプローチによると、社会には普遍的な現実や絶対的な真実があるのではなく、社会現象は社会的に構築されている。すなわち、人間によって作り上げられたものであるという観点から、研究がなされる。社会構築主義の場合、量的な研究よりは質的な研究が基本になり、仮説を立てない場合が多い。メディア研究における社会構築主義の場合は、3つの代表的なアプローチがある。1つ目は、順応論(domestication theory)である。順応論によると、新しいテクノロジーが利用者の日常生活に適応する一方で、利用者とコンテキストもテクノロジーに順応する。そして、その利用者からの反応は、テクノロジーへのフィードバックになるため、次に作るテクノロジーを改良できるとい

---

<sup>7</sup> 以下ケータイと略す。

う理論である。2 つ目は SCOT(Social Construction of Technology)の観点である。SCOT は技術決定論（社会が技術に影響するのではなく、技術が社会に影響を与えるというアプローチ）への反応として出てきたアプローチである。SCOT によると、テクノロジーが人間の行動を決定するのではなく、人間がテクノロジーの形態を構築しているのであり、テクノロジーは社会状況との関連の上で分析すべきである。3 つ目は ANT(Actor Network Theory)という観点である。ANT の視点では、社会現象のアクターは人間だけではなく、「モノ」でもある。ANT はアプローチのみならず、方法論でもある。

日本では、序論として上述したアプローチに触れる場合は多いが、こういったアプローチに基づいてなされた研究は少ない。むしろ、メディアを歴史的に考えるというアプローチが一般的であるように思う。メディアを、突然新しくできあがるものではなく、過去の流れからつくられるものとして取り上げ、現在の社会現象を分析する際にも、歴史的なアプローチを用いることが多い。そして、メディアに関わる研究は「メディア論」という分野に分類されるようである。

問題意識で述べたように、本論では ANT(Actor Network Theory)というアプローチを用いる。「モノ」としてのケータイに焦点を合わせ、社会現象を分析する際に、人間だけではなく、ケータイという「モノ」もアクターとして位置づける。

さて、ここまではメディア研究に関するおおまかなレビューだったが、ここからはケータイ研究に関する先行研究を紹介する。

ケータイの研究は盛んに行われている。いくつかの研究は、ケータイとその他のメディアの比較を行なっている。例えば、Immar de Vries (2005)は、ケータイを、その前にあった電信、固定電話、ラジオやテレビといったメディアと比較し、「理想的なコミュニケーション」という概念を提唱した。Immar de Vries によると、「理想的なコミュニケーション」とは、永続的なコンタクトをとる中で、相手と包み隠さず考えを伝え合えるような、誤解のないコミュニケーションである。今までのメディアの中では、ケータイでのコミュニケーションが一番「理想的なコミュニケーション」に近いとしつつも、「理想的なコミュニケーション」はあくまでも理想であるため、現実にはならないと指摘している (Hamill & Lasen 編 2005 所収)。

Lasen (2005) も、固定電話と携帯電話を比較した結果、ケータイの方がより有効的なメディアであるとし、一方で、固定電話もケータイも社会的な恐怖感を生じさせると指摘した。どちらのメディアも、健康に対する恐怖、依存の恐怖、伝統的な相互作用の衰え、社会活動に対する無関心の増加と思いやりのないふるまいをもたらすという。さらに、ケータイに関しては、公共空間の個人化、個人空間における仕事の押しつけと、監視社会の問題が指摘されている (Hamill & Lasen 編 2005 所収)。

Reid and Reid(2005)も比較的な研究を行なったが、メディア間の比較ではなく、ケータイで話す人 (talker) とケータイでメッセージを送る人(texter)を比べた。主に量的な調査に基づき、ケータイメッセージは心理的な距離を生み出し、さらに、相手に返事をするときに時間的な余裕

があるため、自己表現をじっくり形にすることができるということを示した。そして、ケータイメッセージを送るという行動は二次的なものではなく、電話ができる時でもメッセージを送ると指摘した (Hamill & Lasen 編 2005 所収)。

Richard Tee (2005) は日本とヨーロッパのケータイにおけるインターネット利用の比較を行ない、なぜ日本ではケータイインターネットがそこまで成功したのかという疑問を検証した (Hamill & Lasen 編 2005 所収)。

ケータイについての比較研究の他には、若者のケータイ利用を中心とした研究も非常に多い。

Harper & Hamill (2005) は、少年達にとってのケータイの役割を分析した。少年がどのようにコミュニケーションの礼儀を構成しているのかについて分析した結果、ケータイにおいて、誰が、誰に、いつ、何を言うのか、というふるまいのパターンが洗練されているということが明らかになった (Hamill & Lasen 編 2005 所収)。

Green (2003) は、少年を中心にインタビューを行なった結果、少年達にとって、ケータイの経済的な意味と文化的な意味は多様であると示した上で、少年のケータイ利用者を、熱狂的、実用的、批判的という3つのカテゴリーに分類した (Katz 編 2003 所収)。

Taylor & Harper (2002) は、Marcel Mauss の理論に基づき、少年のケータイ利用における贈与行動の分析をし、さらに、将来のケータイのデザインを提案した。

Grinter & Eldridge (2001) は、イギリスの少年を中心に量的・質的な方法を用いて、ケータイメッセージの研究を行なった。その結果、少年達がケータイメッセージを使う理由として、早い、便利、安い、社会的な格差を越えられる、直接的である、気楽にコミュニケーションがとれる、また、公共空間でも使えるといった点を挙げた。ケータイメッセージの弱点としては、使われている省略形の言語やメッセージの意図の分かりにくさを挙げた。

Ling (2001) はケータイの登場初期と、ケータイがすでに普及した後に、少年と彼らの親へのインタビュー調査を行なった結果、ケータイをファッションアイテムとして位置づけた。そのファッションにおいて、言語が自己顕示の手段として利用されていることも指摘した。

Ling & Yttri (2002) はノルウェーの少年と若者へのグループインタビューを通じて、ケータイの利用を、micro-coordination という待ち合わせ調整としての利用と、hyper-coordination という表現的な利用の2つのカテゴリーに分けた。

日本でのケータイ研究は多様であるが、少年のケータイ利用に関する研究も少なくない。例えば、Ito (2003) は、少年がコミュニケーションの礼儀に従って行動する際、空間とどのような関係性を結んでいるのかについて論じた。

Miyaki (2005) は、小学校、中学校、高校における男子と女子のケータイ利用について調査をした。その結果、男子の方が、ケータイに対して批判的であり、料金を意識しているのに対し、女子はケータイ利用に対して非常に積極的であり、ケータイを持つことで安心すると多くの調査対象者が述べたという。

Ito & Okabe (2005) は、若者のケータイ利用について、時間と空間という視点から研究を行った。家、教室、公共空間と公共交通機関という空間でのケータイメールの分析をした結果、親のコントロールによってメールが送信されていることが明らかになった。また、ケータイコミュニケーションには様々な社会的な規則があることも指摘されている。

McVeigh (2003) は日本の大学生を対象に、ケータイメールを中心に分析を行った。その結果、ケータイは、自己表現と自己顕示の目的で利用されていると指摘した (Gottlieb & McLelland 編 2003 所収)。

若者のケータイ利用の他にも、様々なケータイ研究が行われている。例えば、Ito & Okabe (2005) はインタビューと観察を通して、公共交通機関におけるケータイ利用の分析をし、そこにおける「適切なケータイ利用」とは何かを明らかにした (Ito, Okabe & Matsuda 編 2005 所収)。

Miyata, Boase, Wellman & Ikeda (2005) は、山梨県における成人のケータイ利用に関して量的な研究を行ない、ケータイとパソコンにおけるインターネットの利用を比較した。その結果、メディア知識の少ない人ほど、ケータイのインターネットのみを利用することが明らかになった (Ito, Okabe & Matsuda 編 2005 所収)。

Matsuda (2005) は、ケータイを使うと、他者との関係を選択するようになると指摘した。電話をかけてきた人を確認してから答えることができるため、友人や知り合いの選択が可能になる。そして、若者の場合、複数の人とのみ頻りに連絡をとるという利用パターンがあり、Matsuda はそれをフルタイム・インティメイト・コミュニティと名付けた。

羽瀧はケータイにおける「出会い系」文化を分析した。彼女は、テレ・コクーンという概念を提唱した。テレ・コクーンとは、「維持されている既存の人間関係をベースとして、地理的・時間的制約を離れ、人が絶え間なくメンテナンスを行ない続ける親密圏」(2005:124)として定義されている (松田美佐・岡部大介・伊藤瑞子 2005 所収)。

富田は、インティメイト・ストレンジャーという概念を生み出した。インティメイト・ストレンジャーとは、「匿名性の上に成立する親密性」(2009:189)、つまり、「『匿名』であるから『親密』」(2009:1)になれるという人間関係のことを示す。富田の著書では、特に NTT の「ダイヤル Q」、すなわち電話による情報料代理徴収サービスの利用について分析している。

Tamaru & Ueno(2005)は、エスノグラフィーを用いて、エンジニアの職場におけるケータイの利用を分析した。ケータイの利用は、具体的な実践とコンテクストにつながっているという点を強調している (Ito, Okabe & Matsuda 編 2005 所収)。

是永 (2007) も職場におけるケータイの利用について論じた。是永はエスノメソドロジーを用いて、配管工事現場におけるケータイ利用の実態を分析した。

岡部・伊藤 (2008) は、「モバイルキット」、すなわち、人々が日常的に持ち歩くポータブルデバイスの分析をし、次のように指摘している。「人々はモバイルキットを用いて都市空間をパ



ーソナライズ化している（中略）。匿名的な都市空間において自分にとって価値のある情報を収集したり、自身の消費行動履歴を蓄積、観覧することを通じて個別の都市空間を形成する実践としてとらえることもできる」（2008：35）。

日本におけるケータイ研究の代表的な仕事は、岡田・松田（2002）が編集した『ケータイ学入門』である。歴史的なアプローチを用いて、空間とケータイの関係、ケータイにおけるコミュニケーション、アイデンティティ、ジェンダーなどの大きな枠組からケータイを分析した本である。

そして、水越（2007、2005）は、社会学の伝統的なアプローチではなく、ケータイを利用したワークショップなどを通して、多様なケータイの可能性を試みる実践的な研究を行なっている。

ここでは、勿論ケータイの研究のすべてを述べてはないが、本論に関わるもっとも重要な研究をいくつか紹介した。ケータイの利用の仕方は、場やコンテキストによって非常に異なるが、ここまで紹介した研究をまとめてみると、次のことが分かる。（1）ケータイをめぐるふるまいは技術決定論的に構成されているのではない。すなわち、社会より技術の影響の方が重要なのではなく、ケータイにおける新しいふるまいは、社会に既存するふるまいと融合しつつ構成されている。（2）時間や空間に関わらず、ケータイはケータイ利用者に他者との接続性を感じさせる。

（3）ケータイでの相互作用は、新しい人間関係を作るよりも、むしろ既存の関係性を強化する。特に若者の場合、ケータイにおけるコミュニケーションは少数の限定された人々と繰り返し連絡をとるパターンが多い。（4）多くの研究では、ケータイがプライベート、個人的、パーソナルなメディアとして取り上げられているが、実際には、ケータイの利用の仕方や意味は、コンテキストによって異なる。例えば、Tamaru & Ueno（Ito, Okabe & Matsuda 編 2005 所収）が指摘しているように、14 才の中学生にとっては、ケータイは個人化されたメディアであるが、エンジニア職場においては、労働者間のコーディネートツールになる。

### 1.3 研究対象

本研究の対象は2つある。1つはケータイその「モノ」だ。もう1つは、ケータイにおける人間関係である。すでに指摘したように、これまでのケータイ研究の中では、少年や若者を中心に論じた研究が多かった。しかし、本論ではケータイのあり方の多様性を明らかにするため、幅広い年齢の利用者からデータを収集した。具体的には、17 歳から 61 歳までの協力者からデータを集めた。

今までのケータイ研究は、例えば「東京の大学生」のように、ある属性のグループを調査する形が多かった。しかし、本論では、個々に対象者を集めるよりは、関係性を決めて分析した方が、ケータイの利用と、人々とのつながりやコンテキストとの関係が分かりやすくなると考え、家族同士、恋人同士、友達同士という三つの関係性の人々を調査することにした。男性と女性のバランスをできるだけ考慮し、男性は6名、女性は9名とした。

家族同士、恋人同士、友達同士というような関係性を分析することによって、その関係性だからこそそのケータイ利用の意味やパターンが見えてくるのではないだろうか。親密な関係であるからこそ、頻繁にケータイでのやりとりが行われていることが予想され、そこに、ケータイと自分の融合というプロセスが見えてくるのではないかと考える。

以下、調査対象者を表に示した。

表 1 調査対象者

組類	名前 <sup>8</sup>	年齢	性別	関係性	職業	ケータイ会社
家族同士	かおりさん	53	女性	妻	専業主婦	NTT ドコモ
	古澤さん	61	男性	夫	会社員	NTT ドコモ
	さおりさん	23	女性	姉	大学院生	NTT ドコモ
	あゆみさん	20	女性	妹	大学生	NTT ドコモ
	まりこさん	27	女性	妹	アルバイト	SOFTBANK
	かなこさん	31	女性	姉	OL	SOFTBANK
	かなよさん	60	女性	母	専業主婦 アルバイト	SOFTBANK
恋人同士	マリさん	24	女性	彼女	会社員	KDDI
	松本さん	20	男性	彼氏	大学生 アルバイト	KDDI SOFTBANK
	あつこさん	27	女性	彼女	会社員	SOFTBANK
	鳥海さん	33	男性	彼氏	会社員	NTT ドコモ
友達同士	佐藤さん (サトマン)	34	女性	偶然友達 <sup>9</sup>	会社員	KDDI
	やすじろさん (ジロ)	39	男性	偶然友達	アルバイト ギタリスト	KDDI
	片岡さん	17	男性	小学校から 友達	夜間高校	WILLCOM
	梅村さん	17	男性	小学校から 友達	アルバイト 通信センター	NTT ドコモ

## 1.4 研究方法

本研究で取り上げる方法論は、virtual ethnography である。Virtual ethnography は、かなり新しい方法論といえる。電子メディアが進化してから登場した方法論であり、デジタルメディ

<sup>8</sup>調査対象者の個人情報を守るため、本論文では仮名を使う。

<sup>9</sup>偶然友達とは、場所の関係で知り合った友達ではなく、偶然に知り合い、友達になったという形の友達である。友達は普通「学校の友達」、「近所の友達」などが多いが、彼らの場合は小説で語られるような出会いであった。15年前、原宿のホコ天（歩行者天国）で毎週日曜日いろいろなコンサートがあったそうだ。やすじろさんは、若いころ、ポップのバンドでよく原宿のホコ天（歩行者天国）で演奏していて、佐藤さんはそこでたこ焼きを売るアルバイトをしていた。やすじろさんがよくそのたこ焼きを買いに行っていたため、佐藤さんと知り合ったという。

アと関連する文化やコミュニティを分析するための方法論・アプローチである。Virtual ethnography とは、ある状況、人間関係、具体的な場所などを直に観察する、伝統的なフィールドベース・エスノグラフィーの延長上に位置づけられる。Virtual ethnography は対面的に文化などを観察するのではなく、特定の場所に限定されないオンライン、デジタルワールドに構成されている文化、コミュニティ、人間関係などを観察し、分析する方法である。この方法論の代表として、Christine Hine (2000) や Miller & Slater (2000) の研究が挙げられるだろう。

これまでの質的なケータイ研究の中では、インタビューや観察が多かったが、本論で明らかにするように、ケータイは身体的なメディアであるため、インタビューだけでは見えてこない情報がたくさんある。本論では、言葉にできない情報を把握するために、複数の方法論を用いた。前述したように、本研究は、家族同士、友達同士、恋人同士という3つの人間関係を分析する。家族同士3組、恋人同士2組、友達同士2組の計7組を調査した。

調査の流れは以下の通りで、下記 1) から 5) までで1セッションとなる。1セッションは最短で3週間から4週間かかった。

1. 協力者1組ごとに、最初のインタビューを行なう。日常生活、ケータイの使い方、ケータイを持ち始めた頃の使い方との比較、ケータイのデコレーション、ケータイのデータ管理など、幅広いことについて聞き取りをする。インタビューを終えた後、前日のケータイ利用についての表を簡単に書いてもらう。最初のインタビューは1時間から2時間程度行った。
2. 最初のインタビューの時に渡した、ケータイに関するコミュニケーションや人間関係についての質問用紙を、できるだけ1週間で回答してもらう。人によって、印刷した質問用紙にペンで記入をする人もいれば、パソコンで答えていた人、また、ケータイで答えていた人もいた。
3. 対象者の間で過去2週間の間に交わされたメールのやり取りを、調査者のケータイに転送してもらった。メールの記録のため、「何時」、「どこで」、「どうして」そのメールを送ったのかを表に記入してもらった。
4. 調査対象者の日常生活を明らかにするため、シャドウイング（調査対象者と一緒に時間を過ごす）を各組3回行なった。各組の対象者が一緒にいるときと、別々にいるときで、それぞれ観察を行った。観察時間は調査対象者が置かれたコンテキストによって異なる。大学の2時間弱の授業もあれば、ヨット上での1日がかりの結婚記念撮影、午前中のフラメンコレッスンやギターライブ、恋人同士の金曜の夕食と、その後のゲームセンターでの UFO キャッチャーなど、多様な観察を行なった。

5. 取得したデータを分析した後、より詳細な情報（メールのやり取りについて、通話についてなど）やデータの確認のため、最後のインタビューを行なった。最後のインタビューも1時間から2時間程度行った。

上記で説明したデータの収集とは別に、ケータイに応じる身体の観察をするために、渋谷のいくつかの戸外の場所でビデオ撮影をした。このデータをもとに、第6章では都市空間におけるケータイをめぐる身体所作や自己表現について分析した。また、ケータイの利用の仕方や、身体的なふるまいに関して、東京のケータイ利用者の観察を行ない、フィールドノートに書き込んだ。

本論では、研究方法を批判的に再考するというよりも、データを収集する目的から、上記で説明した研究方法を取り入れた。

## 1.5 本論の構成

ここまでは、本研究の位置づけ、対象と方法を述べてきたが、実際にどのような構成でケータイの分析をしていくのかについて、おおまかな流れを述べておきたい。

第2章と第3章では、詳細なフィールドワークのデータに基づき、ケータイにおける人間関係について多様な観点から論じる。特に、ケータイにおけるフォルダー分け、ケータイストラップ、通話コミュニケーション、メールコミュニケーションとそこにおける絵文字の利用について述べていく。

第4章ではケータイと空間の関係性を中心に、プライベートとパブリックの境界線について論じてから、公共空間における規制を再考察し、さらに、空間を3つに分類して、それぞれの空間におけるケータイ利用について論じる。また、ケータイが置かれる場を紹介し、最後にケータイそのものを空間として取り上げる。

第5章では、空間との関係性という視点からも議論した、ケータイ付カメラの利用についてであるが、ここでは、空間の観点から分析をするのではなく、画像を撮る行動を身体的な行動として分析する。

第6章は、身体とケータイの関係性に関する章である。身体の動作、ケータイがアフォードする表情、また、身体とケータイのサイボーグ的な融合について論じる。

最後に、結論では、詳細なデータに基づく議論をまとめ、ケータイと自分が一体になるというプロセスについて述べる。

## 2. ケータイにおける人間関係の形成と形態

人が人とコミュニケーションをとる時、同時にたくさんのメディアを使う：例えば、表情、声、身体、言葉（「生得型メディア」）、電話、パソコン、ケータイ（「付属型メディア」）などである。生得型メディアとは、生まれたときから自分に備わったコミュニケーションツールである。例えば、表情、声、身体、言葉などである。生得型メディアは文化によって異なり、その表現方法は生まれてから習得される。それに対し、付属型メディアとは人間に備わったメディアではなく、外付けメディアであり、全てモノである。付属型メディアも習得するメディアであり、生得型メディアと同様に、文化的な影響を受ける。それに対し、付属型メディアとは人間に備わったメディアではなく、外付けメディアであり、全てモノである。付属メディアも習得するメディアであるが、必ずしも文化的なメディアではない。例えば、あるズボンが様々な国で売られている場合、ズボン自体は同じモノであっても、文化によって、使い方や身体との合わせ方などは異なる。付属型メディアの中には、デジタルメディアとデジタルではないメディアが含まれている。

生得型メディアと付属型メディアは、両方とも社会化の過程で身体化され、自分とに一体となって、ユニットとしてコミュニケーションをとる。表情、声、身体、言葉などは社会的に構成されている。人間は、もともと自分にあるメディアを使った表現をどんどんマスターしていく。これらのメディアは、「自分」と強く結びついている。人間は、生まれ落ちた特定の文化の中で、少しずつ生得型メディアを習得し、表情をつくったり、気持ちを表現したりするようになる。その習得はある程度無意識だが、「自然的」というより、「文化的・社会的」と考えられる。

私が日本に住みはじめた時に最初に気づいたのは、人の表情と身体言語のちがいであった。私は生まれてこの方、人の表情、たとえば驚きの表情というのはごく自然なもので、生き物としての人間がもともと持っている行動様式だと信じていた。しかしそれがちがっていることに気づいたのである。私達の顔にいくつの筋肉があるのかは知らないし、どのように筋肉を動かして、気持ち、言葉、表現に合わせて顔を動かすのか学習しているのかも分からないが、言葉や表情を含め、すべての生得型メディアは、付属型メディアと同じように、習得されなければならない。

メルローポンティ（1945）が指摘するように、気持ちに対する行動や身体の動きも、所与のものではなく、構築されているものである。

「ところが実は、怒りあるいは愛の仕種は日本人と西欧人とにあって、決して同じではない。もっと正確に言えば仕種の違いは情緒そのものの違いと一致するのである。身体的組織に対して具然的なのは、単に身振りだけではなくて、状況を迎えそれを生きる仕方そのものも、である。日本人は怒ると微笑する。西欧人は赤くなり、足で床を踏みならしたり、あるいは青くなり、叱咤しながらしゃべる。二人の意識主体が同じ器官と同じ神経系をもっているというだけでは、同じ情緒が両者において同じしるしをもつのに十分ではない。

肝心なことは、彼らが自分たちの身体を使う使い方であり、情緒における身体と世界とへの同時的な形態付与である。精神-生理学的な装備がどうであろうとも、無数の可能性が開かれていることに変わりはなく、本能の領域におけると等しく、ここでも決定的な仕方と与えられた人間の本性なるものは存在しない。人間が自分の身体を使用する仕方は、単に生物学的存在としてのこの身体に対しては超越的である。怒る際に叫んだり、愛する際に抱いたりすることは、テーブルをテーブルと呼ぶこと以上に自然なことではないし、より僅かに約束的だ、ということでもない。感情と情念的な態度は語と同じように発明される（1945：313）」。

「生得型メディア」が熟達すると同時に（熟達といっても常に変化するメディアであるため、例えば、年をとれば声も老人の声になる。また、感情も、色々な状況により感じたり感じなかったりする。身体が変わって行くと共に表情も変化する。しかも、それらのメディアの完全なコントロールは、生きているからこそ誰もできない。）、「付属型メディア」と統合し、双方の習得と共に身体化されていく。多様なメディアが重なり、自分と一緒にユニットとなって、他の人や他のモノ、他の空間とコミュニケーションをとる。普段、人、モノ、空間と自分は、同時に相まってコミュニケーションを行なう。靴を使うからこそ、足の形、皮膚の質、歩き方などの形態が形作られるのであり、靴を使わない足とは比べられないくらい違うであろう。ある友人は、外に出たことがない猫を飼っているが、その猫の足の裏は非常に柔らかいという。同様に、ケータイを使ったことがない人々の関係と、普段ケータイを使っている人々の関係も異なるはずである。

各メディアによって、それらの特徴や、使われ方の可能性は異なる。電話の場合、場所が固定され、その場所にはないとコミュニケーションがとれないという基本的な特徴がある。吉見俊哉ら（1992）は、日本の家庭では、固定電話が最初は玄関に置かれていたが、プライバシーのためにだんだん家の奥の方に置くようになったと指摘している。電話というメディア特有のコミュニケーションの形態として、場所の限定性があげられる。つまり、その場所にいるときしか、コミュニケーションがとれない。家の電話の場合、誰でも電話できる時間帯と、親しい人の電話しか認めてない時間帯があり、相手に対する話し方も変わるなど、多様な状況がある。その後、コードレス電話が普及すると、富田が指摘しているように、「コードレス電話により、私たちは電話を持ったまま家中を移動するようになる。（中略）電話が居間にある場合などは、電話での話し声が大きくて他の家族が迷惑する場合があった。コードレス電話なら好きな場所に移動して会話ができるために、そんなトラブルはなくなったのである（2009：176）」。

電話やコードレス電話は、一人暮らしの場合以外はパーソナルメディアではないが、それらに対し、ケータイはパーソナルメディアであるからこそ非常に私的な利用が可能になる、一番プライベートな電話になる。本論では、問題意識で指摘したように、ケータイというモノについて、ケータイと他者、ケータイと空間、ケータイと自分という関係性を絡め合わせつつ考察したい。

その際、「特定状況」がコミュニケーションの枠組になる。例えば、電車という空間では、様々なコミュニケーションが生じる。電車の中にいる2人の友達間のコミュニケーション、空間とのコミュニケーションなど、多様なコミュニケーションが同時に行なわれている。しかし、例えば、電車の中で2人の友達がケータイをいじりつつ喋っているというコミュニケーションは、その電車、そこに居合わせた人々、その時間、天気、空間など、すべてを含めた、ある「特定的状況」の中で生じた社会現象である。こういった「特定状況」が、ある特定のコミュニケーション現象を形作っているのである。

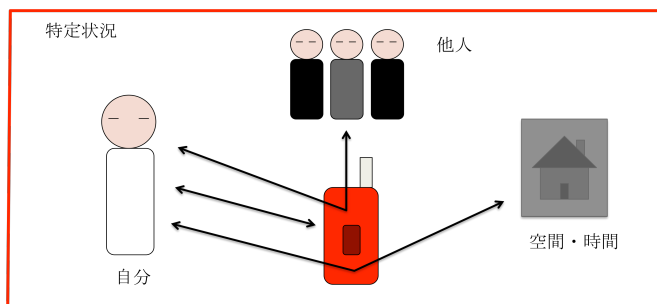


図 1 ケータイコミュニケーションの枠組

ケータイにおけるコミュニケーションは多様であるが、ケータイの機能によって制限されてもいる。言い換えれば、電話、メール、インターネット、写真、ビデオ、電卓などのケータイの機能はすでに決まっているため、それらに基づいてケータイにおける社会性が規定される。ケータイはモノとして1つの定型があるため、ケータイにおけるコミュニケーションや行動は、ある程度決まっている。

本章では、ケータイにおける人間関係を分析するために、3つの現象に注目したい。第一に、ケータイにおけるフォルダー分けとコミュニケーションの選択、第二にケータイストラップという儀式、そして最後にケータイにおける通話について述べる。

## 2.1 フォルダー化された人間

ケータイの中には、人間が多様な形で入っている。アドレス帳の人達、ケータイカメラで撮った人達、写真メール（以下写メールと略す）でもらった人の画像、人間間のケータイメール、通話、人にもらったケータイの飾りなど、全てが人間のつながりを示している。

アドレス帳の中には、たくさんの方が入っているのが普通である。ちなみに、調査対象者の中で、マリさんは、アドレス帳に誰かを登録するとき、必ずその人の写真やその人にあつた写真を入れておくという。

調査対象者の中で、例えば、やすじろさんのアドレス帳では500件くらい、マリさんは300件、松本さんは200件くらいの連絡先が入っている。それに対し、片岡さんと梅村さんはそれぞれ



51 件と 54 件だけである。何百件も連絡先を登録している調査対象者達は、もう連絡をとらなくなった人でも、一回しか会ったことがなくて連絡をとったことがない人の連絡先でも、もう日本にはいないという人の連絡先でも消さないようである。ただ、何百人の連絡先を集めていても、普段連絡を取っている人は比較的少ない。Matsuda(2005)が指摘するように、若者はケータイのおかげで知り合いや友達が多くなったように見えても、彼らのコミュニケーションパターンを見てみると、頻繁に同じ人達と連絡をとっている。これを彼は「フルタイム・インティメイト・コミュニティ」と呼んでいる。また、連絡先を登録している人は名前が表示されるため、友達や知り合いの選択が可能になり、選択的な人間関係が増加するという。調査対象者の中から、知り合いの選択に関するいくつかのコメントを紹介したい。マリさんは「しつこい元カレから何回も着信が来ててムカついたので携帯の電源をしばらく切っていました」と話す。古澤さんは、「バー（飲み屋）の女性から『また来てください』とのメールは無視」するという。かおりさんも勧誘のメールを無視していると話したが、人や知り合いの選択というケータイポリティクスは、そこまでシンプルではない。「元カレだから」というのは簡単な個人選択であるが、上記のように、ケータイのコミュニケーションを分析する時、空間や「特定状況」とのつながりが極めて重要である。例えば、あゆみさんは「次の日までに完成させなければならないエッセイがあったのと、電話料金が高いと親に怒られたばかりの時に、よく長電話をしてしまう友達からの電話を無視してしまったことがあります。その次の日に、『寝てました。ごめんなさい orz』というメールを送ってうそをつきました。」と話した。また、さおりさんは「友人や彼と一緒にいるときは、家族からの電話やメールを無視することがあります。一緒にいる相手に失礼だな、と思うし、家族なら気をつかわなくてもいつでも話す時間があるので、あとでゆっくり話ができるからです。あとは深夜にメールや電話がくると、疲れているときは無視してしまい、次の日に『昨日は寝てた』と嘘をつくことがあります」と語った。さおりさんには友人や彼との時間が貴重であり、家族と違って一緒にいる時間が限られているため、その時は家族の連絡を無視している。また「失礼だな」と気を遣う部分もあるという。そして「疲れている時<sup>10</sup>」というのが、筆者を含め、調査対象者がよく話していることである。例えば、松本さんは、「とても疲れている時は『明日でいいか。。。』と次の日に返信することが多い」という。また、あゆみさんが言ったように、「長電話」の場合も無視することがある。佐藤さんも「落ちこんでいて話したくない時や、話が長くなりそうな時」は無視してしまうようだ。

言い訳は、「寝ていた」、「充電がなくなった」、「気づかなかった」が一番多い。単なる知り合いの選択は、例えばやすじろさんが言うように、「やはり苦手な人からのメールは無視してしまうことが多いですね。苦手な人からの電話はもうすぐ充電がきれるのでといって切ってしまったことがあります」というような形で起こることも確かにある。しかし、同時に、人の優先順

---

<sup>10</sup>特に夜。

位、マナー、気分（例えば、佐藤さんが言う「落ちこんでいて話したくない時や、話が長くなりそうな時」）、「特定状況」（あゆみさんのレポートや、親にケータイ料金で怒られたこと。かおりさんの言う「他の人がいて、話が出来ない時無視する」という状況など）によって、われわれはコミュニケーションの選択をしていると考えられる。コミュニケーションしないというのも、1つのコミュニケーションの類型である。コミュニケーションの選択は多様であり、上記で指摘したような営みと、密接に結びついている。

松田(2005)が指摘したように、若者は「フルタイム・インティメイト・コミュニティ」の中で、よく連絡をとり合っている。羽瀧も「テレ・コクーン」という言葉を作り出し、「維持されている既存の人間関係をベースとして、地理的・時間的制約を離れ、人が絶え間なくメンテナンスを行ない続ける親密圏」（2005：124）として定義している。Habuchi(2005)は、ケータイにおける「出会い系」をめぐる行動を分析した。彼女によると、ケータイは、新しい知り合いを作るため、また、すでに知り合っている人との関係を維持するために利用されているという。正確には、出会い系の場合、ケータイ上で知らない人と知り合うが、本論では、出会い系のデータ、また富田が示したような「匿名性の上に成立する親密性」（2009：189）、「『匿名』であるから『親密』になれるという人間関係」（2009：1）の「インティメイト・ストレンジャー」のデータはない。本論の調査対象者は、すでに知り合い同士であり、ケータイでその関係を形成したり、強化したり、無視したりするような関係性である。さらに、「関係性」を分析するために、「家族同士」、「恋人同士」、「友達同士」を対象にしたため、親密なコミュニケーションが盛んに行われるケースが多かった。したがって、気をつかうところ、遠慮するところが少なかったため、「テレ・コクーン」のようなコミュニケーションがよく見られた。その「テレ・コクーン」の中では、自分にとって一番重要な人達がフォルダー分けされていることが多い。

調査対象者の中には、ケータイのデータに入っている人達から届いたメール、また、アドレス帳の連絡先をフォルダー分けしている人と、していない人がいる。フォルダー分けをしている人々の間には、3つのやり方が見られた。1つ目はメールが届く際に、自動的にフォルダーに入るように設定している例である（図2）。2つ目は、メールを受信してから、気に入ったメールだけフォルダーの中に入れるやり方だ（図3）。3つ目は、アドレス帳の連絡先をフォルダーにする（図4）というものである。以上、3つの分け方が観察できた。

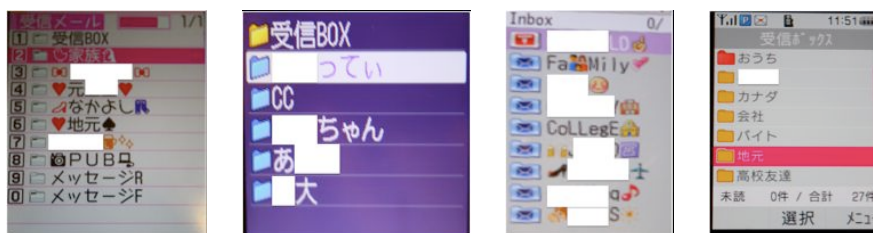


図 2 人のフォルダー（左から順に a. b. c. d.）

あゆみさん、さおりさん、マリさんとかなこさんはメール受信ボックスをフォルダーに分けて、メールが来ると自動的にフォルダーの中に入るように設定している。家族、大学、友達、バイトのフォルダーが作られることが多いようだ。マリさんの場合、彼氏の松本さんのフォルダーもあり、さおりさんの場合は、妹のあゆみさんのフォルダーもある。フォルダーを作るという過程は、かなり偶発的なものである。調査対象者に聞くと、例えば「バイトを始めたから、そこで知り合った人をバイトのフォルダーに入れた」といった理由でフォルダーを作成していた。



図 3 人のフォルダー（左から順に a. b.）

まりこさんと佐藤さんは受信ボックスにフォルダーを作成しているが、自動的にメールを振り分けるのではなく、メールを受信してから、フォルダーに分けるといふ。まりこさんの場合は、人のフォルダーを作るのではなく、例えば気に入ったレストランの電話番号などの情報を、名前を付けていないフォルダーにたまたま入れておくという。それに対し、佐藤さんは、一番よく連絡をとっている人達のフォルダーを作り、時間がある時、その人達のメールをフォルダーに入れるという。

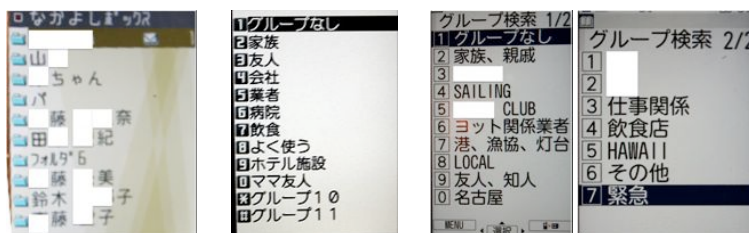


図 4 人のフォルダー（左から順に a. b. c. d.）

松本さん、古澤さんと古澤かおりさんは、アドレス帳にある人々の連絡先をフォルダー分けしている。松本さんは一つだけフォルダーを作成している。「なかよしボックス」を設定して、その中に、「なかよし」な人を登録するという分け方をしている。かおりさんは（図 4 b）、家族、友人、会社、業者、病院などのフォルダーを作成し、そこから連絡先を探すという。古澤さんは趣味でヨットを持っていて、フォルダーを見ると分かるように、ほとんどの人間関係がヨットと関連している。

人をフォルダーに入れるという行動は、ケータイが登場してからの行動であると考えられる。パソコンを使うときにも、たくさんの情報やデータをテーマ別にフォルダーに分けて入れる。しかし、個人的なレベルで人を分類するという行動は、電話帳を使うようになってから生じたのではないだろうか。電話帳の場合、あいうえお順に連絡先を書き込み、必要な時に探して電話をする。ケータイのアドレス帳もあいうえお順になっているが、その上に、自由にフォルダー分けをすることが出来る。上記の図が表しているように、人をフォルダー分けする時には、自分との関係性（「家族」や「なかよし」のフォルダー）や、自分の人生にあるコンテキスト（大学、バイト先のフォルダーなど）によって分類する。ケータイというモノは、われわれの関係性を「フォルダー」という形にする。われわれはどのように人をフォルダー分けするのかを常に意識するようになり、その分け方が当然のものになる。人をフォルダーに分類する時、自分なりのその人の重要性、またその人との関係性がおのずとあらわになる。もちろん、フォルダーに分類されていない人もたくさんいる。フォルダー分けを一瞥すると、自分の人間関係のつながりを理解し、意識する。人が、自分の中ではフォルダーの形になったといえる。それもまた、ある種のコミュニケーションの選択である。電話に出るとか、メールに返事をするという選択ではなく、「私には誰が重要」で、「誰と連絡を取りたい」というような、はっきりした人の選択である。つまり、そこに入っていない人々は、自分の人生にとっては重要ではないといえるであろう。

## 2.2 ストラップされた人間関係

前述したように、調査対象者達は、ほとんどが親密な関係にある。その親密性は、よくモノとして具体化される。ケータイの飾りとしては、ストラップが多い。貼るものやケータイアートのような飾りもあるが、調査対象者の間では見られなかった。ストラップは、2人の関係を具体化し、ストラップを見ると相手のことを思い出す。



図 5 ケータイストラップ

この図は恋人同士のマリさんと松本さんのケータイストラップである。一緒にディズニーランド<sup>11</sup>に行った時に買ったようである。そして、クマの方はマリさんが韓国に行った時、2人のために買った土産である。彼が白黒、彼女はピンク<sup>12</sup>のストラップである。

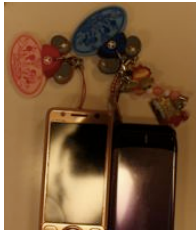


図 6 ケータイストラップ

図6はあゆみさんとさおりさん姉妹のケータイとストラップである。この場合も、あゆみさんがディズニーランドへ行った時、2人のため土産として買った。

モノで関係を表すという例はいくつか考えられる。一つは宝飾で、特に結婚指輪である。結婚指輪は2人の関係を表すためだけのものではなく、他人に「結婚している」という情報を伝える為のモノである。結婚指輪は、関係性を表すモノとしては一番形式的であるが、他の宝飾だと例えば、ネックレスもある。男女同士、いわゆるカップル同士の時が多いが、家族同士の間でもあり得る。そして、キーホルダーもまた関係をつなぐ形になっている。家の半分の形になっているキーホルダー、ハートの半分のキーホルダーなどがある。時々このようなモノに、重要な銘刻字が彫られる時もある。結婚指輪はたいていそうになっているが、ネックレスや時計でも有り得る<sup>13</sup>。それらのモノは、自分が常に身に付けているモノであるため、相手とつながっていると感じさせる。常に自分で持っているからこそ、相手のことをよく感じるのではないだろうか。人の関係をモノに「延長」というのは、儀式的な行為である。

Taylor & Harper (2002)は少年のケータイにおける贈与の行動に関して論文を書いた。彼らは、Mauss (1950)に基づき、贈与(gift-giving)という言葉を用いて、近くにいる、または離れたグループ

---

<sup>11</sup>ディズニーランドも若者の間でとても重要な役割を持つようである。おそろいのケータイのストラップやデコレーションは、多くの場合ディズニーランドで買ったものである。東京では、家族、友達、カップルの間でも、ディズニーランドへ行き、よくケータイで写真を撮る。東京ではディズニーランドやディズニーシーは一段とすぐれた遊びとして見なされているように思う。Yoshimi (2001)が指摘するように、日本の大学生にとってのディズニーランドのイメージは、素晴らしいファンタジーの世界で、夢の世界のような印象を抱いているようだ。

<sup>12</sup>日本では、ピンク色が女性や可愛さと強い繋がりがあるように思う。多くの国では、赤ん坊が生まれる時、特に周りの人が女の子か男の子か分かるように、ピンクの服(女の子の場合)か青い服(男の子の場合)を着せる。小学校の鞆(ランドセル)も濃紺(男の子)か赤(女の子)という区別がされている。図5と図6のストラップを見ると、恋人同士の場合、女性の方がピンクにし、姉妹同士の場合妹の方がピンクにしていた。

<sup>13</sup>姉妹同士の場合、ストラップには、名前が書いてある。

の間で行なわれている実際の交感<sup>14</sup>、また、少年間の象徴的な交感を示すために用いている。他者への忠誠、または、競争を維持するために生じる「贈る」行動という概念を用いて、少年のケータイ利用を分析している。彼らは、少年のケータイメールや電話の利用を、「交換の義務」として取り上げた。そこには、あげる、もらう、返礼するという儀式的な行動が見られたという。その行動を遂行するかどうかにより、友達か否かがはっきりする。

確かに、ケータイの利用には、儀式的な利用、交換の義務的な利用が多い。上記の図5と図6は、「交換の義務」でもあるが、具体的な義務（例えばメールの返信など）ではなく、感情的な義務である。婚約指輪はスペイン語で「妥協指輪」という。すなわち、相手と色々な意味で人生を妥協する。ケータイのおそろいストラップも、相手に対しての妥協、返礼、恩義という情を象徴的に表し、象徴的に2人の関係を結びつける。Taylor & Harper (2002) が指摘するように、昔ながらの儀式的パフォーマンスは忠誠心を植え付け、固定するためである。

ケータイにおそろいのストラップを付けるというのは、ケータイ自体もある程度2人の関係の象徴になるからであろう。2人の関係がケータイ上である「形態」として示される。相手と連絡をとりたい時、すぐケータイを握って取るからこそ、ケータイは2人の関係性の象徴になる。ケータイというモノに2人の関係の価値を延長する。ケータイをずっと自分の近くに持ち、ストラップが目前にあり、手で握ることで、相手の視覚的、触覚的な延長になる。

ここまでは、アドレス帳、コミュニケーションの選択とフォルダー分けについて述べてきた。アドレス帳の中に、たくさんの連絡先が入っているのは当然であるが、その中で定期的に連絡をとるのは比較的少ない人数だ。Matsuda (2005) が述べた「フルタイム・インティメイト・コミュニティ」や、Habuchi (2005) が論じた「テレ・コクーン」は、定期的に連絡をとり、コミュニケーションしている人達のことを指し示している。本研究では、前述したように親しい人達の関係性がフィールドワークの基本になったため、テレ・コクーン的なコミュニケーションがメインになる。テレ・コクーンの人々はフォルダー分けと関連している。フォルダー分けされている人達が、自分にとってもっとも重要な人であるということが、人をフォルダーにすることで、初めて意識するようになったといえる。ケータイは、コミュニケーションの選択を可能にするだけでなく、人をフォルダーという形にし、自分の人生には誰が重要なのかをはっきりと分かりやすく示す。そのフォルダーは、他者との関係性（家族、仲良しなど）や、出会った場（大学、アルバイト等）に基づいて作成されている。誰をフォルダーにするか、という選択もある一方で、誰と連絡したい、誰の連絡を、いつ、どのような時に無視したいという選択は、人の優先順位、マナー、気分や「特定状況」によってなされている。そして、非常に親密な関係の場合は、儀礼的に2人のケータイに同じストラップを付け、その親密性が具体化されるという点を指摘した。

---

<sup>14</sup>日本語では、「交感」という語が、霊との交信の意味で使われることがあるが、一般的にはそれほど利用頻度の高い語ではない。この論文における「交感」の意味は、幽霊とは関係なく、文字通り、互いに感じ合うという意味で利用したい。

ここからは、ケータイでの通話に関して分析をしていく。

## 2.3 通話コミュニケーション

通話は、もともとケータイの基本であるといえよう。多くの国では、「ケータイ」という言葉に「電話」の意味が入っている。英語で、mobile phone (または cellular phone)、スペイン語で teléfono móvil (mobile phone と同じ言い方)、タイ語の โทรศัพท์มือถือ (To-ra-sap-meu-toeu) という言葉は、「手で運べる電話」の意味で、ポーランド語の telefon komórkowy という言葉も、cellular phone と同じ意味を持つ。何語でも必ず「電話」の意味が入ってくるとは言えない。例えば、中国では、「手机 (shou3ji1)」、つまり「手の機械」という意味の言葉で呼ばれている。しかし、多くの言語では、「携帯電話」という言葉に「電話」の意味が込められている場合が非常に多い。「ケータイ」が電話であるという感覚は強いと思う。しかし、ケータイの場合、通話が基本利用ではない場合もある。岡田によると、若者の場合、通話よりメールの利用の方が非常に多い (Okada, 2005:49)。

ケータイの利用について問うと、「人とコミュニケーションをとるために使う」という答えが一番多いが、具体的に聞いてみると、ケータイの使い方は非常に広い。調査対象者の中では、目覚まし時計、時計、写真、ビデオ、インターネット (メール確認、天気予報確認、mixi<sup>15</sup>、乗換え案内、絵文字ダウンロード、音楽ダウンロード、ケータイバンキング)、メール、通話、鏡などの利用がなされていた。しかし、今までのケータイ研究では、通話とメールという2つの利用に分けられる場合が多かった。

Reid & Reid の論文では、イギリスにおける Texters と talkers の比較研究を行なっている。量的なアンケートに基づき、ケータイメッセージ<sup>16</sup>は心理的な距離を可能にするため、相手に見せる自分のイメージを調整できることを示した。また、与えている印象や内容の構成をしっかりと考えた上で、作成できると考えられていた<sup>17</sup>。メッセージは電話や面会の代わりではなく、電話や面会ができる時でも、メッセージが優先の選択であったという (2005 : 116, 117)。

Rettie は、Reid & Reid (2005) に基づき、Texters と Talkers の分析を行なった。彼女によると、Texters の中では、電話に対する反感が少なくはないという。Rettie は「Texters は通話の構造を圧制的と見なしている。世間話の必要性を感じ、静けさは耐え難く、電話を終了するのも難しい (2007 : 42)」と述べている。

Rettie によると、電話への反感は社会的に構成されているものだが、ケータイという装置の役割もあるのではないだろうか。メッセージができるからこそ、電話に慣れないという可能性もあ

---

<sup>15</sup> mixi (ミクシィ) は、株式会社ミクシィが運営する、日本最大級のシェアを持つソーシャル・ネットワークワーキング・サービス (SNS) である。

<sup>16</sup> イギリスではメールではなく、SMS (Short Message Service) になるため、「メッセージ」という。

<sup>17</sup> 本研究のフィールドワークでも、メールをきちんと考えて、時間をかけて形にした例も見られた。3.1.3 の図9を参照。



るだろう。社会的な標準があって、電話への反感があるのかもしれないが、社会の影響もケータイという装置の影響もあるといえるだろう。

次項では、通話の分析をしていく。メールのデータは比較的入手しやすかったが、通話の場合は、インタビューで聞いたデータに基づいて論じる。

電話をする場合、3つのコミュニケーションのタイプが見られた：(1) 用件電話、(2) 改まったコミュニケーション、(3) 電話好きのタイプの3つである。そして、これらの通話のタイプに加えて、電話でもメールでも「何でもいい連絡」というタイプのコミュニケーションも見られた。

### 【用件電話】

用件電話は用件を伝える、または問題を解決する目的で行なわれる電話である。内容が多い時や深い時のことを示す。相手にたくさんのこと、また、少し分かりにくいことなどを伝えたい時や、早く伝えたい時、話し合った方が分かりやすいと思う時に、電話をする場合が多い。「メールがめんどくさい」とか、「電話の方が早い」というような理由で、メールではなく、電話をかける。具体的に聞きたいことがあり、メールでは分かりにくかったり、時間がかかったりするような場合、また、すぐに知りたい場合は電話をする。待ち合わせの場所の調整は、3.3.1で説明するようにメールで行なわれているが、待ち合わせ時間になった時や、すでに着いている時、相手が見当たらない時などは電話をする場合が多い。また、重要な連絡の場合も、電話をする。例えば、かおりさんの父親は施設で暮らしている。かおりさんは毎週何回も、父親の面倒を看に行き、一緒に時間を過ごし、世話をしている。2009年、父親の様態が悪くなり入院することになった時には、すぐ家族に電話をしたという。

なお、この中で焦点を当てたいコミュニケーションの種類は情的なコミュニケーションである。親しい相手との間の情的なコミュニケーションの場合、相手と直接に感じ合いたい時、悩みの話、恋愛の話や相談の際、電話で連絡することが多い。さおりさんは、「ケータイのやりとりで感情的になるのは、メールより電話で話すときのほうが多い気がします。4年前に祖父が亡くなったとき、ショックを受けて夜中に(妹と)2人で電話で話しました。そのときは妹が[実家の地名]に、私は東京に住んでいたので、直接会えないかわりに長電話をしてお互い気持ちを落ち着いたのを覚えています」と話した。また、さおりさんの妹であるあゆみさんは、「2人が感情的なやり取りをケータイでした時、私は高校3年生で[実家の地名]に、お姉ちゃんは東京にいて、私が電話をかけました。その日は、大学受験の結果をお姉ちゃんに報告しました。私は泣いていて、お姉ちゃんはとても喜んでくれたのを覚えています」と語った。

2人の姉妹は現在一緒に東京に住んでいるが、以前はあゆみさんが親と一緒に実家に住んでいて、さおりさんは大学に通うため東京で一人暮らしをしていた。2人は仲が良くて親しい姉妹であるため、よくコミュニケーションをとる。一緒に住んでいる現在は、家で色々な話ができるで



あろうが、別々に住んでいた時、上の引用で分かるように、世間話(small talk)でもないかぎり、メールだけでは足りない場合が多い。特に気持ちを交感したい時、感じ合いたい時はメールではできない。

同じように、やすじろさんは「感情的な時はむしろメールより電話をしてしまいます。ほんとに感情的な時はメールはしないですね。」と話す。一番印象に残っている通話は、喧嘩の時であるとインタビューで語っていた。ケータイ上で、友達と「ガンガン喧嘩をした」時や、親戚と喧嘩した時の通話を、思い出したくないけれど覚えているという。

情的な電話は、よく恋人同士の間で起こる。この電話の目的は話すことそのものにあり、内容は何でもかまわな。こういった電話は夜かけることが多く、内容はその日にしたことの報告が多い。松本さんとマリさんの場合、マリさんが朝駅まで行く間、松本さんに電話をかけることもあるようだが、たいてい夜の方が多。そして、調査中に結婚した鳥海さんとあつこさんの場合は、一緒に住み始めたら、夜の長電話がなくなったという。

内容が重要であればあるほど、直接的なメディアで連絡を取りたくなる。かなこさんは、韓国人の男友達とお互いの勘違いが原因で、電話でトラブルになったとき、気まずい雰囲気になったが、後日会って話して誤解が解けたという。かなこさんは、「電話やメールだけだったら深刻な状況に陥っていたかも」と振り返った。つまり、コミュニケーションが直接的であればあるほど、有効的であると感じられているようである。

松本さんもマリさんと一週間の喧嘩をした後、メールで下記のようなコメントをしていた。「メールで下手なこと言うとあんまよくないと思うから今日の夜また電話するよ🙄なまあと仲直りがしたいです🙄お仕事頑張ってね😊ばいばーい🙄」

佐藤さんは、相談や悩みを話したい時、友人に会って直接話したいという。会えなかったら電話で話す、が、「相談にのってくれる友人」が何人かいて、その中から内容や都合によって話をする相手を選ぶという。

逆に、情的なコミュニケーションがとりにくい時、相手と十分親しくない時、恥ずかしい時などは、メールで伝える場合もある。

### 【改まった電話】

2つ目の通話コミュニケーションの種類は、改まったコミュニケーションである。フォーマルなコミュニケーションの場合、メールではなく、電話が多い。改まったコミュニケーションと言っても、マナーや相手との関係と非常に関連している。例えば、仕事関係のコミュニケーションの場合、電話が多い。しかし、このような社会のルールは緩和されてきている気もする。会社の連絡などは、電話ではなく、メールで来たりする時もある（仕事量の削減になるであろう）。また、重要なコミュニケーションの場合、かつては電話が多かったのではないかと思うのだが、

「電話するべき」か、「メールでもいい」か、という選択の基準が非常に緩い場合があるように感じる。しかし、改まった連絡の場合は、電話がいいという感覚がまだ強いように見える。

特に改まった電話の場合、しばしば女性の声のトーンが上がる。あつこさんは、電話ですぐ声のトーンが上がるという。何故かと尋ねると、相手にいい印象を与えたいからと答えていた。

### 【電話好きタイプ】

「電話が好き」という理由で電話をかけるタイプの人もいる。前述したように、ケータイの利用は、メールか通話かに分類されている。空間次第で、通話できないこともあるが、調査対象者の中には、できるかぎり電話をかけるという人がいた。例えば、佐藤さんとやすじろさんの連絡パターンは興味深い。佐藤さんがやすじろさんにメールをすると、ほとんどの場合やすじろさんから電話がかかってくるという。ただ、佐藤さんからは電話はしないそうだ。やすじろさんは、よく人に直接電話をかけるため、auの「話し放題」プランに入っていると話した。

### 【なんでも連絡】

最後に「なんでも連絡」とは、「なんでもいいけど、連絡をしたい」というコミュニケーションである。このコミュニケーションは、通話の時もメールの時もある。時間がある時、場所から場所へ移動している時、落ち込んでいる時などに、連絡をしたくなるようだ。やすじろさんは「テンションが高い時、ひまな時などはどうでもいいメールや電話を親しい友人にしていまいます」と話す。やすじろさんにはフラメンコが極めて重要である。フラメンコの発表会などによく参加する。発表会の後はテンションが上がり、フラメンコを踊った先生や生徒、フラメンコ教室の仲間達に、「よかったよ!」、「素晴らしかったよ!」といったメールや電話をよくするという。

上記4つの通話のタイプを紹介したが、この他にも、相手によって電話かメールかの選択をしている調査対象者もいた。例えば、家族の場合は電話が多いが、友達とはだいたいメールをするという発言がよく聞かれた。そこでは、「相手との親しさ」が極めて重要になる。親しければ親しいほど電話がしやすくなるようである。また、親しい人の間では「習慣的な電話」が生じる時もある。例えば、恋人同士であるマリさんと松本さんは「おやすみ電話」をよくする。その後、「おやすみメール」をする時もある。また、家族同士の間では、用件電話である「お知らせ電話」が多い。例えば、ご飯に間に合わない、帰宅が遅れる、といった内容である。

### 3. 社会を潤滑にする愉快性

#### 3.1 ケータイメール

技術的には、2つのメールのタイプがある：MMS(Multimedia Message Service、いわゆるEメール)と、SMS(Short Message Service、いわゆるショートメール)である。多くの国ではSMSの方が使われているが、日本ではEメールの方がよく使われている。日本ではEメールの場合、30Kまで書け、ケータイ会社にもらったEメールアドレスを利用し、他のメールアドレスに送る。送り先のメールアドレスは、他のケータイ会社のメールアドレスでも良いし、またパソコンのメールアドレスでも可能である。SMSの方が送るスピードが早いですが、文字も限られていて(70字)同じ携帯会社に入っている友達にしか送れないので、不便といえよう。

歴史的に考えると、日本でメールのような機能が始まったのは、PHSとポケベル(以下ポケベルと略す)の頃であった。Okadaが述べているように、ケータイの登場初期は、電話と同じように、個人利用のためではなく、組織での利用や公的な利用を目的に作られたが、どんどん個人利用の装置になっていった。ポケベルも、はじめは会社や機関が利用していたが、1990年代には個人利用が中心になり、値段も安くなると、大学生や高校生の女性の間のコミュニケーションツールになった。ポケベルでいろいろな人とメールのやり取りが可能になり、新しい会話の形が出来上がった。1993年、ポケベル新規契約者は70%にまでのぼり、そのほとんどが20代の若者であった。1996年、ポケベルの予約購入はピークになった。1995年の6月に登場したPHSは、ケータイよりも安価であった(Okada, 2005)。

ポケベルとPHSの時代には、メールによる会話コミュニケーションがはじまった。岡田(2005)は、ポケベルのメールのやり取りが現在のメール利用の原型になったというが、ポケベルやPHSを利用した経験がある人は実際には限られており、多くの方はポケベルやPHSの経験がないといえよう。

調査対象者のかなこさんとまりこさんは、ポケベルとPHSに関する記憶をインタビューで振り返り、今のケータイと比較して不便さを感じていた。PHSは、メモリの容量が少なく、10件ぐらいのメールしか入らなかった。また、メールを書いている間に、他の人からメールが入ると、書いているメールが消えてしまう。カタカナで20文字しか書けないため、1つのメールでは足りない場合が多い。また、あつこさんがケータイに買い替えた理由は、ポケベルが廃れていき、周りの人がPHSやケータイを持つようになったからだったようだ。ちなみに、ケータイを持つことに関しては、このような発言が多かった。すなわち、「自分が持ちたい」、「興味がある」といった理由ではなく、「みんな持っていたから、私も買った」というような発言である。ケータイの購入は、必ずしも意志的な行動ではないようだ。

ポケベルや PHS でのメール交換は、歴史になんらかの形で残り、ケータイ電話のやり取りにもある程度の影響があったであろう。また、ポケベルや PHS の存在は、ケータイ会社にもインスピレーションを与えたであろう。メディアの進展の歴史を考えると、ケータイは、ポケベルと PHS の潮流に位置するといえるだろう。岡田が指摘するように、「メディアというものは、何もないところから、天才的な発明家や技術者の手でポンと生み出されるものではなく、社会のなかでかたちづくられていくものなのである」(2002: 25)。特に、短いメールでコミュニケーションをするという行動を、岡田はメールに関する歴史をさかのぼって以下のように語る。

若者たちがポケベルや電子メールを使い、文字で些細なメッセージを送りあう文化に注目し、ケータイがポケベルと異なって完全双方向通信である点を生かして、文字メッセージをやりとりするサービスを提供するようになる。96年4月にケータイの DDI セルラーグループがセルラー文字サービスを開始したのを皮切りに、翌年にかけて、IDO や NTT ドコモ、PHS でも DDI ポケットなどがそれぞれサービスを始めた。97年の暮れには J-フォンがインターネットの電子メールも可能なサービスを提供するようになり、文字による各種の情報提供サービスもその後展開された(2002: 37)。

今までのケータイに関する研究は、若者を中心にした研究が盛んだった<sup>18</sup>。その中には、ケータイメールを分析した研究が非常に多い。しかし、細かい生のデータが分析されている研究はほとんどない。そこで、本章では、フィールドワークで得たメールのやり取りの細かいデータを紹介しつつ、分析をしていく。

先行研究ではケータイの利用やケータイメールの分析がなされているが、その分析において、よく繰り返されているパターンが見られた。それが、ケータイの利用全般に関しても、メールのやり取りの場合でも、機能として実用的な利用と、機能だけにとどまらない表現的な利用、という2つの利用形態に大きく分けられるという指摘である。例えば、Ling & Yttri (2002)によると、ケータイの利用は二つに分けられる: micro-coordination と hyper-coordination である。Micro-coordination は、待ち合わせや約束の調整に関するケータイ利用である。それに対し、hyper-coordination は、より表現的なケータイの使い方である。その中には、社会的なコミュニケーションや感情的なコミュニケーションとしての利用と、自己表現としての利用が含まれる。ケータイメールの場合、micro-coordination の利用は確かにはっきりしている。待ち合わせの調整などを行なう時、メールを送る習慣が見られる。

また、Rettie (2007) はメールの分析を行ない、交感的 (phatic) メールと実用的

---

<sup>18</sup> Harper and Hamill (Hamill & Lasen 編 (2005) 所収), Green (2003), Taylor & Harper (2002), Ginter & Eldridge (2001), Ling (2001), Ling & Yttri (2002), Ito & Okabe (2005), McVeigh (2003), Ito (2003), Miyaki (2005)。

(instrumental) メールを区別した。彼女が挙げたメールの例は次の2つである。1つは、恋人同士の間で送られた、「うめき声をあげて私の服をしわくちゃにするけど、大好き (you moan and wrinkle up my clothes, but I love it)」というメールで、交感的な利用の例である。もう一つは、兄弟の間で送られた「ペンキ買って (Buy paint)」というメールで、こちらは実用的なメールの例である。

今までのケータイ研究の中では、ケータイ利用者が置かれた「特定状況」と「日常生活」が説明されていない場合が非常に多い。ケータイをめぐって、メールのやり取りや、ケータイカメラの利用の条件は研究されているが、社会とのつながりという視点が弱いと感じる。メールのやり取りの分析を行なう時、確かに実用的メールと交感的メールがあるのだが、前述のRettieの2つのメールカテゴリーを見てみると、実用的メールは兄弟同士の間のメールであり、交感的メールは恋人同士の間でのメールであった。それは偶然ではない。家族の間だからこそ、距離感がなく、直接的なコミュニケーションが多いため、余分な世間話が見られない。また、恋人同士であっても、同棲しているか、していないかによって、コミュニケーションが変わってくる。例えば、買い物の会話は同棲していないと起こらないはずである。このような社会条件に基づく営みを含めて、ケータイメールのやり取りを分析する必要があると思う。

本章では、細かいデータに基づき、社会的な営みや「特定状況」を考慮しながら、次のメールカテゴリーを提示したい。(1) 調整メール。ここでは、Ling & Yttri (2002) の micro-coordination、また Rettie (2007) の実用的なメールを含んだメールを指す。例えば、待ち合わせの場所や時間を調整するためのメールのやり取り、また、買い物に関するメールのやり取りである。すなわち、活動や行動を調整する目的でやり取りするメールである。(2) 延長メール。このメールは誰かと一緒に時間を過ごした後に起こるメールである。対面で会った人達との関係は、そのときで終わったのではなく、メールによってそのときの関係性が延長される。「お疲れさま」、「ありがとう」、「楽しかった」のような内容を送るメールで、一緒にいた時の気持ちや状況を継続させるようなメールである。(3) 交感メール。「おはようメール」や「おやすみメール」、「励ましメール」、家に到着したことを知らせる「安心させるメール」、些細な「挨拶メール」、「おめでとうメール」などを含むカテゴリーである。このカテゴリーは比較的広く、互いに感じ合うようなメールのやり取りを指している。「交感メール」は感情を調整するメールとして扱うこともできる。

ここで、2つの重要な点を主張したい。まず、これらのメールカテゴリーは綺麗にくっきりと分けられるのではなく、ほとんどの場合は重なっているという点だ。言い換えれば、1つのメールには待ち合わせの調整だけではなく、他の情報も入っている場合が少なくない。そして、2つ目は、カテゴリーを作ることによって説明はしやすくなるが、同時に社会を無理やりに区切ったり制限したりしてしまうという点である。故に、このカテゴリーの中に入っていないメールやこのカテゴリーを越えているメールもあるという点は、指摘しておきたい。

### 3.1.1 【調整メール：ケータイはわれわれの日常を組織する】

調整メールの中では、時間や場所の調整と買い物の調整が一番よく見られた。ここから紹介するメールのやり取りは、実用的な目的で送られているメールであるが、その目的を持ちつつ情動的なコミュニケーションが混ざっている場合もある。当然だが、買い物の調整は、一緒に住んでいる家族同士のメールでのみ見られた。また、時間や場所の調整は、待ち合わせしている時にはよく友達同士と恋人同士の間で起こる。一方、家族同士の間では、家に着く時間の連絡や、帰宅中にお互いがいる場所の確認などが中心的である。

#### 【待ち合わせ調整】

待ち合わせ場所や時間の調整メールは、どんな関係でも一番よく見られたメールである。現在、待ち合わせが路上で調整される場合が非常に多い。時間や場所の調整という目的でやり取りするメールであり、設定した時間や場所に近づく時にやり取りが始まる。公共交通機関の中や、電車やバスを降りて歩き始める時、家を出る時などに生じるメールである。

どこかで待ち合わせをしている場合、メールのやり取りを行なっている人々は、2人とも移動中である。または、1人は半公共空間<sup>19</sup>にいて、1人は移動中である。このタイプの連絡は、友達同士と恋人同士の間でよくみられた。例えば、よくフラメンコの発表会やイベントに行く佐藤さんとやすじろさんの場合、やすじろさんがイベントの会場にいて、佐藤さんは移動中といった状況である。

家族同士のメールのやり取りで、家に着く連絡のメールが送られる場合、どちらか1人が家にいる。かおりさんと古澤さんの夫婦同士の場合、専業主婦であるかおりさんは家にいるので、古澤さんが会社を出るとき、家に着く時間を知らせるメールを送る。またかおりさんが帰宅時間を尋ねる。親子のかなよさん、まりこさんとかなこさんの場合、母のかなよさんは家から連絡し、娘達は仕事が終わる頃から時間調整の連絡を始める。また、姉妹のさおりさんとあゆみさんの場合も、時間や買い物調整の連絡が多い。家族同士の場合、各人の役割と家族同士の間で生じる権力関係が、ケータイメールにも反映される。母のかなよさんは世話をする役割、食事を作る役割で、娘達が家に着く時間を確認し、食べたい物を尋ねる連絡がよく見られる。また姉妹のさおりさんは長女であるため、妹のためにお弁当を作ったり、買い物をしたりという役割がよく見られた。

---

<sup>19</sup> 空間に関しては第4章で語るが、半公共空間とは長い時間を過ごす空間（仕事や学校）である。半公共空間は、ある程度個人化された空間である（自分のモノを置いたり、何らかの形で自分の空間として感じたりする）。

このメールのやり取りは、親しい人の中で起こるコミュニケーションであり、時間や場所を気楽に変える可能性があるという意識を持ちながら調整や確認をする。あらたまった待ち合わせの場合、メールより電話が多い。

そして、「特定状況」により、時間、場所、買い物以外の調整メールもある。以下にいくつかの具体的な例を取り上げて、その営みも含んで分析をして行く。

### 事例 1 家族同士（まりこ・かなこ）

送信者	送信時間	送信場所	メール
まりこ	20:10	東中野のスタジオの更衣室	げんげ <sup>20</sup> 🤔🤔どこ??
かなこ	20:44	電車の中	げんげ～ 🤔🤔🤔おちかれさ～ん 🚺🚺🚺次調布だぜ 🚺🚺
まりこ	20:46	電車の中	🤔🤔さいなら～ 🚺🚺🚺
かなこ	20:52	帰り途	ばるさん <sup>21</sup> 、今終わったの 🚺
かなこ	20:56	帰り途	え～ん 🚺さいなら 🚺🚺🚺🚺🚺🚺🚺
かなこ	20:57	電車の中	さいっ 🤔🚺🚺ならっ 🚺🚺🚺🚺🚺🚺

事例 1 は、まりこさんとかなこさんの姉妹のやり取りである。二人は、この日は一緒に帰る予定だった。OL のかなこさんは、調布で電車に乗る時妹に会い、家まで2人で帰るようにしているという。まりこさんは普段はアルバイトをしていて、フラメンコのレッスンに通っている。まりこさんの残業は少ないが、かなこさんは仕事で遅れる時があり、上記のように一緒に帰れなくなる場合がある。「げんげ」というのは造語であり、かなこさんと呼ぶときに家族の間で使うニックネームである。

上記のやり取りは、直接に時間や場所の調整をするというよりは、時間と場所を合わせて、一緒に帰れるかどうかの調整をするやり取りであった。2人とも、仕事やダンスの授業が終わってからメールを打ちはじめ、電車でメールを続け、その場で終わる。かなこさんが家に到着すれば、まりこさんに会える。2人とも絵文字を利用し、一緒に帰れない悲しさの表現をしつつ、お互いを感じ合い、気持ちの余韻を感じている。例えばかなこさんの最後のメールは、前のメールの1分後に送られ、同じ悲しさを表した「さようなら」が繰り返されている。

### 事例 2 家族同士（古澤・かおり）

送信者	送信時間	送信場所	メール
古澤 1	18:25	電車の中	いつもの電車ダメだったから少し遅れる。

<sup>20</sup> かなこさんのニックネーム。親子のかなよさん、かなこさんとまりこさんの場合、三人ともニックネームを通じてやり取りをする。そのニックネームは本名と似ているニックネームである。

<sup>21</sup> まりこさんのニックネーム。

かおり 1	19:20	居間	いまどの辺り？
古澤 2	19:32	電車の中	北鎌倉まで来た。

古澤さんのメールのほとんどが、奥さんに家に着く時間を知らせる目的で送られている。会社の玄関を出るときや電車に乗ってからメールを送り、奥さんはほとんどの場合、家の居間からメールをする。古澤さんが単に「いつもの電車」というメールを送り、奥さんからは返事がない場合が多い。上記のように、いつもの電車に乗れなかった場合、時間や場所確認のメールなどがかおりさんから送信される場合もある。

### 事例 3 恋人同士（マリ・松本）

送信者	送信時間	送信場所	メール
マリ 1	08:01	ベッド	信二 <sup>22</sup> 起きた～？ ホントに9時で大丈夫？
松本 1	08:06	家を出てすぐの道路 (車の中)	なんとかね 😊 道が混んでそうだな 😊 少し遅らせようか 00?
マリ 2	08:07	ベッド	いいよ 😊 じゃあ10時？
松本 2	08:09	車の中	でもそうすると映画が遅れちゃうからな 🙏 9時ちょい…みたいな?笑
マリ 3	08:11	ベッド	いいよ 😊 じゃあ着いたら 📱💕 ください 00
松本 3	08:16	車の中	うん 😊  近くなったらまた電話します 🎵  9:15 を目指して
松本 4	08:35	車の中	まあちゃーん!?
松本 5	09:08	車の中	もう着くぞ 🙏
松本 6	09:16	車の中	もう着くぞ 🙏

事例 3 は、映画に行く約束をしていたカップル同士の会話である。彼が彼女を車に乗せて映画館に行く予定である。このカップルは映画が大好きで、週末になったら家で DVD を見たり映画館に行ったりすることが多い。また、よくメールや電話で映画の話をし、彼女はよくケータイで映画の時間を確認して彼に連絡する。2人とも実家に住んでいるので、待ち合わせ調整メールがよく見られる。

<sup>22</sup>松本さんのファーストネームの仮名。



#### 事例 4 友達同士（梅村・片岡）

送信者	送信時間	送信場所	メール
梅村 1	10:57	家	今起きた～
片岡 1	10:59	家	速攻準備して何時に都立大着ける？
梅村 2	11:09	家	1 2 時くらいかな。
片岡 2	11:14	家	おっけ  じゃあオレオヤジの店にチャリ借りに行くから学芸大学着いたら連絡して b <sup>23</sup>
梅村 3	11:56	学芸大学	学芸大学着いたよ～。
梅村 4	11:59	学芸大学	どこに？
片岡 3	12:00	家	学芸大学
梅村 5	12:01	学芸大学	もう着いたよ。
片岡 4	12:03	家	わりメールがダメってた <sup>24</sup> 📧  すぐ行くからちょっと時間つぶしてて～

上記は梅村さんと片岡さんのやり取りである。梅村さんはアルバイトをしながら、週一回通信センターで勉強をしている。片岡さんは車の運転免許を取るために午前中自動車教習所に通い、午後は夜間高校で勉強している。小学校からの友達で、2人はメールより電話をすることが多い。メールの場合、ほとんど時間や場所調整でメールをしている。

#### 【買い物調整】

買い物調整のメールのやり取りは家族同士の間で見られた。言うまでもなく、一緒に住んでいないと生じないやり取りであるため、一人暮らしをしている人が非常に多い東京では、家族同士以外の会話メールではほとんど見られないものであろう。また、専業主婦や「奥さん」という役割の意識が強い人は、買い物の責任を自分に課しており、買い物に関して家族に頼らないため、このタイプの連絡は生じない。このメールのやり取りは、家に帰る途中や帰る前に生じる。

#### 事例 5 家族同士（さおり・あゆみ）

送信者	送信時間	送信場所	メール
さおり 1	15:51	電車の中	はろ 📧何してる～？ 今電車に乗った 📺 5 時頃には着くよ～。 昨日吉祥寺でおみやげ買ったよ 📍

<sup>23</sup> 片岡さんはネットゲームをやっていた時に使っていた b と@を、ケータイメールに使う。b は 📧 と同じ親指のサインを表す。@は「後」の意味で使っているという。

<sup>24</sup> 「ダメってた」は「かたまってた」という意味のようである。

あゆみ 1	15:54	自宅	殺人事件 <sup>25</sup> フューチャリング コミュ論の宿題  5時頃ね～了解💎  おみやげ💎💎💎 わーい❤️❤️
さおり 2	15:57	電車の中	殺人事件…👉 おみやげお楽しみに👉 何か買ってくもの、ある？
あゆみ 3	16:02	自宅	食パンありませんので 買ってきてくれると幸いです💎  個人的にオレンジジュースが飲みたいです💎  玉ねぎが 一個しかないよ～
さおり 3	16:04	電車の中	え、もうないのか👉👉フレンチトースト食いたい👉👉オレンジジュースと玉ねぎ了解👉
あゆみ 4	16:07	自宅	キャベツないけど食べたかったら買ってきて～  きゅうりもない～
あゆみ 5	16:08	自宅	ドレッシングもなくなりそう
さおり 4	16:09	電車の中	ぬ～ん。食料難だな👉 りょーかい👉

上記のメールは東京と一緒に住んでいる 20 代の姉妹の会話である。姉のさおりさんは、妹のあゆみさんの世話をする役割を強く感じていて、妹のお弁当を作ったり、アパートの取引の責任を取ったりという行動が見られた。この会話では、姉は基本的に「帰宅時間を知らせるため」メールを送ったという。姉は上記のメールを全て電車の中から送り、妹は自宅から返事をしている。姉のさおりさんは、「電車の中でひまだったので。買い物をする必要があるのかどうかを知るため」メールを書いたという。調整メールは買い物の内容のみの時もあるが、他の内容と混ぜる場合が少なくはない。ちなみに、姉のさおりさんはケータイで買い物メモをする習慣があり、電車にいる時、特にやることがないため、買い物メモをよくするという。

<sup>25</sup>「殺人事件」はテレビドラマの名前である。「フューチャリング」はタレントのギャグで、「殺人事件を見ながら宿題をしている」という意味である。

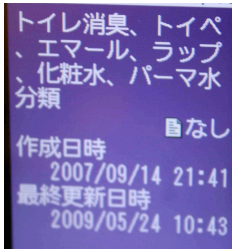


図 7 買い物メモ

この姉妹の場合は、よく到着時間などを知らせるためにメールが始まるが、買い物、作る御飯などの内容も入り、いくつかのテーマが1つの会話で混在する特徴が見られた。

事例 6 家族同士（あゆみ・さおり）

送信者	送信時間	送信場所	メール
あゆみ 1	自宅	17:51	今日はいったいいつ帰ってくるの？ 🏠🏠🏠 あやちゃん <sup>26</sup> と明日会うことになりました ☺
あゆみ 2	家	18:05	ポストカードありがび ❤️
さおり 1	駅	18:06	今から帰るよ～ 🌟 着くのは7時半くらいかな。 何食べたい？ ☺ 明日どこ行くの～？プレゼント買えるじゃん 📺💎
あゆみ 3	家	18:12	塩こしょう買ってきて 🌟 野菜炒めがたべたい ☺  日本で 新型インフルが 3人発見されたね 🌟
さおり 2	電車の中	18:15	野菜いため…肉入り？ ☺ じゃもやしとか買っていこうかな。 あ、あと、ごま油とオリーブオイル、まだある？ 床下も見てみてくれる？
あゆみ 4	家	18:20	肉入りがいいな ☺  ごま油はちょっとしかない オリーブオイルはまるでにやい  あやちゃんちにいぬがきた 

<sup>26</sup> 姉妹の友達。

さおり 3	電車の中	18:25	ふむ、やっぱ買わなきゃだめかな。りょうかい💡 あとなんかほしいのあったらまた連絡ける📞 わんちゃんめんこいな❤️
あゆみ 5	家	18:29	卵が2つひかないよー  あつ  アイスくいて～  あつ  宿題ヘルプミー
さおり 4	電車の中	18:39	卵、アイス →りょーかい  宿題 →👉👈

この会話では、前述したように、姉の「守る方」の役割がよく見られる。妹は姉に色々頼み（食べたい物、宿題の手伝いなど）、姉の方は対応する。その権力関係がケータイにおけるコミュニケーションにもうつっていく。上のメールの会話では、妹は姉の帰りが遅かったため心配し、自宅から 17:51 にメールを送った。メールを送るのは、特に親しい人の間では、とても気楽な行為であるため、きちんと考えを整理してメールを送るのではなく、適当に、気楽に、自分のペースに合わせて送るため、買い物の内容を全部を調べてからメールを送るのではなく、買う必要がある材料を調べながら、メールを送り続けている。

#### 事例 7 家族同士（古澤・かおり）

送信者	送信時間	送信場所	メール
古澤 1	18:04	会社の玄関	これから帰るがケーキか 和菓子買ってこうか？

古澤さんの予定は割と固定的で、通常は午後 6 時まで仕事をしているため、6 時から 6 時半の間に、奥さんに帰る時間を連絡するという習慣的なメールのやり取りが見られた。そのお知らせメールに対して、たいてい奥さんからの返事はない。そして、週に一回古澤さんがケーキやお菓子を買って帰るようであるが、その時も奥さんからは返事がないことが多いようである。

【その他の調整メール】

#### 事例 8 家族同士（まりこ・かなよ）

送信者	送信時間	送信場所	メール
まりこ 1	18:41	ホーム	帰ったらお風呂はいれるかな。。シャワーでもいい

			んだけど👏👏
かなよ 1	18:46	自宅	入れるよ👏👏今げんこつ <sup>27</sup> 入るところ
まりこ 2	18:47	駅	よかった～👏👏👏👏

事例 8 の、母のかなよさんと次女のまりこさんのメールのやり取りはある日曜日のものである。母のかなよさんによれば、「日曜日まりこはフラメンコのレッスンを4時間しているので汗だく、来訪者がある時はその前に入浴したい」という。その日は息子夫婦が自宅を訪問する予定であったため、まりこさんもかなこさんもその前にお風呂に入りたかったようである。

### 事例 9 恋人同士（鳥海・あつこ）

送信者	送信時間	送信場所	メール
鳥海 1	17:28	JR 広島駅前 <sup>28</sup>	小口さんからの誘いです。嬉しいね。是非打ち合わせさせて頂こうかね❤️❤️❤️❤️❤️❤️先日はお疲れさま。  で、飲み前にも話してた、鳥海夫妻の2次会的なことを開催したいんだけど、一度夫妻と打ち合わせさせてくれない？  勝手に話しを進めちゃてるけど、やるやらない含め、ざっくばらんに会話したいと思ってます。  結婚式準備で忙しいと思うけど、どっかで時間作って。  可能な日を2～3下さい。  よろしく。
あつこ 1	17:41	会社	嬉しい❤️❤️❤️  あつ <sup>29</sup> は今日（遅番）と結婚講座の日以外、いつでもよいよ👏👏 今週（土）も夜なら行けると思うし、来週の遅番はコントロールできるし！

鳥海さんとあつこさんは結婚準備のため、よく結婚に関する調整メールのやり取りをしていた。上のメールのやり取りは、2人の友人から結婚パーティーを企画してもらうための打ち合わせの日程連絡である。

<sup>27</sup>かなこさんのニックネーム。

<sup>28</sup>鳥海さんは仕事の関係でしばしば国内飛行機に乗って移動する。

<sup>29</sup>あつこさんのこと。

### 3.1.2 【延長メール：ケータイがわれわれの関係を継続させる】

延長メールは、前述したように、人と会った後に生じるメールである。このメールは友達同士と恋人同士の間で起こり、家族同士の場合は見られなかった。調査対象となった家族同士の全員が同居しているため、延長メールが見られなかったのかもしれない。延長メールは一種の礼儀となっていて、ケータイ上の新しい慣行であるといえる。家族同士の場合、距離感がない場合が多く、礼儀がいらぬ場合が多いからこそ見られなかったという可能性もあるだろう。

延長メールは相手と一緒に時間を過ごした後、一緒に過ごした時間とその時の気持ちが、自分の中に残り、相手と感じ合いたいときに書かれるメールである。このようなメールは人間同士を強く結びつける。または、誰かと会った後のメールだけではなく、電話で話した時のその「特定状況」を延長するケースもある。ケータイによって人間関係が延長できるのは、「perpetual contact（永続的な接触）<sup>30</sup>」と、「mobile phone omnipresence（ケータイの偏在）<sup>31</sup>」というケータイの二つの特性に起因している。

#### 事例 10 恋人同士（松本・マリ）

送信者	送信時間	送信場所	メール
松本 1	23:46	ベッド	<p>無事にウチ着きました～  <sup>32</sup></p> <p>あの後雨ヤバかったよ</p> <p>明日平気かな</p> <p>いや～やっぱT4おもろかったよ～</p> <p>映像もストーリーもめっちゃカッコよかった</p> <p>貯金は5万にしときなよ</p> <p>さすがにいきなり10万なんて…超お金持ちになっちゃうよ</p> <p>今日はホントに楽しかったです</p> <p>まあともラブラブできて最高でした</p> <p>iPhoneに関してまた連絡取り合おうね</p> <p>じゃあ明日からまた頑張ろうっ</p> <p>お風呂に行ってきた～す</p>

<sup>30</sup> Imar de Vries (Hamill&Lasen 編 (2005) 所収)。

<sup>31</sup> Vincent (2005)。

<sup>32</sup> 見にくいですが、キスの顔絵文字である。

このメールは松本さんがマリさんと電話で話した後送ったメールである。2人は普段週末デートをしている。上のメールは日曜日デートで映画館に行った後のメールである。電話で話した後、松本さんは「なんとなくおやすみメールを送った」という。恋人同士の間、「おやすみメール」や「おはようメール」は頻繁に生じ、儀式的な利用であるように思う。上の松本さんのメールは延長メールと儀式的な「おやすみメール」を混ぜた1つの例である。恋人同士の儀式的なメールのやり取りに関しては2.4.3の交感メールで説明をする。

### 事例 11 友達同士 (佐藤・やすじろ)

送信者	送信時間	送信場所	メール
佐藤 1	21:35	自分の部屋	お疲れえ。  丘さんのセンセイ、かわいい人だったね。 あと、ジロ <sup>33</sup> のギター、よかったよ。ホントに。かっこつけてる方がイイっす。  今日は、最後まで見られなくてごめんね。
やすじろ 1	21:44	新宿	いやいやまたまた来てくれてありがとう👉ギターはもっと精進しますよ🐱 <sup>34</sup> そう丘さんの先生は可愛いよね👉サトマン <sup>35</sup> より年上だよ🐱そうあの先生の受け持ってる踊りクラスの伴奏行ってんよ俺今月から🐱
佐藤 2	23:07	自分の部屋	あのセンセイに会えるから、うれしいって言ったのかあ。🐱 なるほど、納得。  ホント、ギターがんばって。プロだ、プロ。 他の人のは、ギターの音って感じだったけど、ジロのは音色って感じだった。ちゃんと曲の持つてる感情とかが出てたなあと思う。ジローなりの人と鳴り。  私の場合、歳とるごとにいろいろ感じる事とか変わってくるつか広くなるというか、なんとなくいろいろ感じる強さが強くなって。ま、勝手な受け止め方だけ。 音楽も、音器の音のみで泣きそうになったりする。私はね。 すごい反応する場合とそうでないのとあるけどさ。  フラメンコって、特にそういう音楽だと思うしね。
やすじろ 2	0:00	家	ありがとうまだまだ頑張らないといけないんだけど🐱見ためはね〜プロっぽいんですけどね〜🐱でもサトマンには踊り色々みてほしいよ👉いい踊り見てるとほんとに胸つかまれるね🐱

<sup>33</sup> やすじろのニックネームである。

<sup>34</sup> 運動なしで分かりにくいですが、おじぎしている猫である。

<sup>35</sup> 佐藤さんのニックネームである。

やすじろさんはギターのリブを行うことが多く、その際だいたい5人の仲のいい友達を、メールで一斉送信して見に来るように誘う。上記のメールのやり取りは、その1つのイベントを見に行った佐藤さんとやすじろさんのやり取りである。このメールのやり取りは延長メールとして「今日はよかったよ」のようなメールとともに、礼儀正しく「最後まで見られなくてごめんね」と佐藤さんが伝え、「いやいやまたまた来てくれてありがとう🙏」とやすじろさんが返信しており、ケータイのしきたりにもとづくやり取りである。

### 3.1.3 【交感メール：感情の穴】

交感メールは一番幅広いカテゴリーであり、他のメールよりも、感情的で内容が深いメールが多い。すなわち、感じ合うメール、相手に心を開くメールが多い。向かい合って言いにくいことでも、メールだと話せることもある。気持ちを伝えることは難しいからこそ、相手を前にした時にはなかなか言えないことが多い。言いにくい、恥ずかしい、適切ではないなどの理由で、相手と向き合っていると心を開けない。ただ、ケータイの場合、「心理的な距離」(Reid & Reid, 2005)があるため、普段言えないことが伝えやすくなる。ケータイは身近なメディアであり、気楽にコミュニケーションがとれると調査対象者は感じているようである。ケータイを介すときには、相手と対面した状況ではないからこそ、気持ちを伝えやすい。また、話す時よりも書く時の方が状況の管理やコントロールがしやすく、何度も読んで直すこともできるため、言いたいことを言いたいように伝えることができる。だからこそ、メールの方が気持ちを伝えやすい部分がある。これを、ケータイにおける「感情の穴」と名付けよう。ケータイの「感情の穴」とは、ケータイメールを通じた心理的な距離にアフォードされる、気楽さや気軽さを示す。言い換えれば、ケータイメールにおける相手とのコミュニケーションは対面的ではないため、対面的な場で生じるような、遠慮や恥ずかしさ、恐怖感などの理由で感情の表現が妨げられるという事態に陥ることは、それほどない。その意味で、2人の間の距離はコミュニケーションの壁のように思われるかもしれないが、実は、ケータイメールによって、その壁に穴が開いたように、感情的なコミュニケーションがしやすくなるのだ。

2.3 で説明したように、非常に親しい人達の間（例えば家族同士や友人）で共感したい時、相談したい時などは、電話をする。ただ、ここで指摘したいのは、対面でも電話でも言えないようなことを、メールでは言えるということである。例えば、鳥海さんとあつこさんは、前述したように、結婚準備に関するメールのやり取りをよくしており、事例9のメールと同時に、式に誰を誘うかについての調整メールもやり取りしていた。そこで、ある人を誘うか否かについて、喧嘩になったが、その話し合いもすべてケータイメールで行なわれていた。二人は、ケータイ上で言い合いをすると同時に、他の結婚準備の調整を、別のメールの中でやり取りしていた。例えば、事例9の直後にも、喧嘩のメールが送られている。つまり、ケータイを用いて、「喧嘩」の内容と、その他の内容を、別々のメールにしてやり取りしていたのである。ここから、ケータイが感



情的なコミュニケーションをとりやすくするだけではなく、感情の整理や区別も可能にすることが分かる。

### 【おめでとうメール】

メールの中でも、特に喜ばれ、印象に残るメールは、おめでとうメール、特にお誕生日メールである。自分のことを覚えていてくれて、わざわざ時間をかけてケータイでデコレーションしたメールを送ってくれる気持ちは、とてもありがたいと多くの調査対象者が語った。お誕生日メールについて聞く時、一番よく出てくるのが「嬉しい」という言葉である。

メディア革命によって、「お誕生日おめでとう」の連絡はどんどん変わってきている。例えば、facebook<sup>36</sup>を利用すると、名前さえ分かれば、友達を検索し、まったく連絡を取っていない友達でも、友達として記録できる。Facebook のページには、その人の誕生日が登録されているため、「お誕生日おめでとう」の短いメッセージが、驚くほどたくさん届く。facebook 以前には、そんなにたくさんの人から誕生日メッセージをもらったことがない。しかも、そこまでよく知らない人からも、もらうのだ。ケータイでも、自分のプロフィールで誕生日の設定をすれば、友達に知らせることができる。

誕生日を電話で祝うと、もちろん嬉しいが、ケータイメールにすれば、データとして残るし、保護もできるため、好きなときに思い出し、確認することができる。また、電話で「お誕生日おめでとうございます」と伝えるときは、声だけしか聞こえないので、印象は薄い。それに対し、ケータイメールの場合、色、形、絵文字などが入っているからこそ、電話の連絡より印象的である。「お誕生日メール」自体が、一種のプレゼントとして受け取られるだろう。誕生日のお祝いは、電話、手紙、メールなどのメディアを通じて起こる。現在、手紙に関する意識はかなり変容し、友人や家族に手紙を書くという行動は徐々に減少している。

誕生日は美しい儀式である。日本における誕生日の儀式的行動に関しては、まだ十分な理解や経験をしていない部分が筆者にはあると思うが、いくつかの象徴的な行動が指摘できる。誕生日は、生まれた記念日を祝う日であり、生まれたその日に「お誕生日おめでとう」とあたたかい、親密的なメッセージを伝える。もし、忘れてしまって次の日等に祝う場合は、本人に遅れたことを謝ってから祝う。友人の場合、誕生日カードとプレゼントを渡す場合が多い。また、家族や友達と一緒に集まって食事をして、最後に誕生日ケーキを食べ、英語の「happy birthday to you」を歌うといった儀式的な行動がある。その人のことを「覚えている」、「大切にしている」、ある意味では「愛している」という気持ちを伝えるのは、お互いにとって嬉しいことである。

近年、ケータイがこの儀式を変容した。プレゼントやケーキだけでは十分ではなく、「お誕生日メール」を送る必要性が発生したのである。女性の友達同士と恋人同士の場合は、特にそうで

---

<sup>36</sup>Facebook とは SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) である。

ある。早ければ早いほどよくて、「起きたときから覚えている」という印象を与えるために、朝早く送る人もいる。友人の場合は、「お誕生日メール」とともに、本人に会ってプレゼントを渡すが、そこまで親しくない人に対しては、「お誕生日メール」だけにする。ケータイがなければ、その人を祝わないかもしれないが、メールを通じて気楽に祝うことができる。そして、誕生日には、特別に豪華なメール、つまりデコレーションメール（以下デコメールと略す）を送る習慣が構築されてきているようだ。



図 8 お誕生日メール

このデコメール<sup>37</sup>は、かなこさんが友人にもらったメールである。かなこさんは、「メールを見た瞬間幸せな気分になった。31 も悪くないなあと思い、自分も人の誕生日には必ずメールをしようと誓う」と話した。

調査対象者のほとんどが、「お誕生日メール」が一番印象に残る、または、一番嬉しいと話した。お守りとして、友人からもらった「お誕生日メール」を保護している人もいた。



あゆみちゃん、  
富田です…あの…20才ですか？お先に20才なんですか？私は信じられません。ぶっちゃけ…あゆみちゃん20才ですか？私は信じられません。  
でもしかし、

<sup>37</sup>ちなみに、デコメールや非常に豪華なメールをよく送るのは50代～60代の女性が多い。なぜかは分からないが、絵文字のダウンロードやデコメールをよくするようだ。例えば、かおりさんの友人は Michael Jackson が亡くなった時、かなり大きい踊っている Michael Jackson の絵文字をメール添付で送ってきたと言う。

20 才のお誕生日、本当に本当におめでとう♡♡♡♡♡\(^0^)/\(^0^)/\(^0^)/\(^0^)/\(^0^)/!!高校であゆみちゃんと会わなきゃね、私の今までの笑の数は絶対の絶対に 1/3 にも満たなかった、まちで♡緑の神様とかキノコとか思い出すと微笑んでしまって気持ち悪くなっちゃうけど、私はあゆみちゃんと会えたので、これから自殺は絶対しません♡これから何か嫌いなことあっても無くても、あゆみちゃんとお話するのがとっても楽しみで嬉しいです♡うふー♡すき♡!!

あゆみちゃんお先に 20 才です!! 本当に本当におめでとう♡♡♡♡♡早く会いたい♡♡♡どうかあゆみちゃんが、もっともっと幸せでありますように♡♡♡!!!! 大大大大すき♡♡♡富田より♡

### 図 9 お誕生日メール

ほんとに x0 2<sup>38</sup>、こころからおめでとうッ (涙)♡♡♡ほんとに x0 2 あゆみちゃんのおかげで元気なれたッ(∴∴;ω;∴)合格してもしなくても大好きだけどさ♡合格して元気なあゆみちゃん知ったらもっとすきなった♡あたしも、後追えるように本気頑張るね (涙) 頑張るッ!!!! (∴∴;ω;∴) 📧

それでね♡♡

0 1 ヶ月くらい前に初めて自分で映像ぼいの作ったんスよ♡♡味けないしさ (涙) キラキラしてるから♡もしよかったら画像見て合格に浸かって<sup>39</sup>ね♡♡♡ほんとに x0 2 おめでとう♡♡♡あゆみちゃん♡♡♡

### 図 10 合格おめでとうメール

上記の図 9 はあゆみさんが友人にもらった誕生日メールである。このメールは、明らかに作成するのに時間がかかったメールである。図 10 はあゆみさんの合格おめでとうメールである。このメールには添付ファイルであゆみさんのお友達が作成した映像があったようであるが、もとのケータイから現在使っているケータイにデータがうまく移せなかったため、残っていないという。2つのメールとも、一番言いたいことは「好きです」「大好きです」ということであり、そのため、ハートの絵文字をたくさん使い、「おめでとう」を繰り返し言いながら、2人で経験した思い出を語って「大好き」という気持ちを伝える内容のメールである。

お誕生日おめでとう ✨ 「オメデトウ」 📧  
バイトで知り合い  
こんなに仲良くしてくれたの  
マリだけよ♡  
これからも  
どーぞ  
よろしくねえ  
いつも  
ありがとう♡

<sup>38</sup> 「x0 2」は「二回」の意味で、最初の文章だと「ほんとうにほんとに」という意味である。

<sup>39</sup> 原文のメールにはこの通り書いてあったが、「浸かって」ではなく「浸って」という意味であろう。

マリ大好き千穂より

## 図 11 お誕生日メール

この「誕生日メール」は、マリさんがバイト先の友人からもらったメールである。マリさんは、「大好きな友達のお誕生日メールで凄く嬉しかったので保護しちゃいました」と話す。あゆみさんの「お誕生日メール」と同じく、「おめでとう」、「2人の経験」と「大好き」という内容がそれぞれ語られている「お誕生日メール」であり、ハートの絵文字もつけられている。

### 【気持ちを話し合うメール。励ますメール、励ましてもらいたいメール】

励ます、または、励ましてもらうメールは、調整メールよりは少ないが、親しい人の間で「特定状況」によって起こるメールである。「励ましてもらう」メールとは、自分が落ち込んでいる時などに送るメールであり、「励ましてもらおう」という気持ちを意識して送るといよりは、送信者側の気分としては、何かを誰かに伝えることの必要性を感じた時に送るメールである。

## 事例 12 家族同士（あゆみ・さおり）

送信者	送信時間	送信場所	メール
あゆみ 1	15:41	学校	ブリヒル抽選で落ちちゃった ㇿ ㇿ
さおり 1	16:32	電車の中	さっき一瞬家帰った～🏠 携帯忘れてたよ ㇿ ㇿ あれ、抽選だったんだ～。かわいそう🥺まあ、ゼミとか インターンとか受かったんだし、しょうがないさ🙄
あゆみ 2	16:33	学校	だな🙄

事例 12 では、妹は「落ち込んだため」学校から帰る電車の中にいた姉にメールを送った。妹は大学のアルバイトの抽選に落ちてしまい、その気持ちを伝えようとし、姉にメールを送ることにした。妹が姉にメールを送ったのは 15:41 だったが、姉は家にケータイを忘れていたため、返事が遅れ、16:32 に妹に返事をした。「妹が落ち込んでいたのではげまそうと思って」、妹にメールを送ったという。妹は姉の返事を見て、「納得した」という。

## 事例 13 恋人同士（マリ・松本）

送信者	送信時間	送信場所	メール
マリ 1	12:26	会社（お昼休み）	（前略） そう言えば信二は前期のテストこれから始まるよね👀 大変だと思うけど頑張ってるね🍀 もうすぐ summer vacation だし🎵 （後略）
松本 1	17:58	学校	（前略） 今日は早めに帰ってウチでレポートやります🎵 （中略）

			テストヤバイよ～😓 実験が普通にあるからめっちゃキツイと思う😓  まあとのラブラブな夏休みに向けて頑張ります😓 (後略)
マリ 2	20:28	家	(前略) レポートがんばってにん😓 (中略) 夏休みいっぱい遊んであげて下さい🎵 (後略)
松本 2	20:59	自分の部屋のソファ	(前略) レポートはなんとか終わりそうだよ😓 (中略) 夏休みまあいっぱい遊びたい😓 (後略)
マリ 3	21:24	ベッド	ちゃんとレポちゃんやって偉いです👏 前のまあだったらいつも期限ぎりぎりに🤖

上記のマリさんと松本さんのメールのやり取りは略した。2人のメールのやり取りには恋人同士の特徴として、長いメールが多く、たくさんの情報を混ぜて会話していたためである。上記は、レポートを励ますメールとして取り上げたが、実は他にも夢の話やウグイスの話<sup>40</sup>等たくさん入っていた。

#### 【おはようメールとおやすみメール】

このメールは恋人同士の間でしか見られなかった。おはようメールは起きた時に送るメールで、おやすみメールは寝る前に一番最後に送るメールである。おやすみメールは、おやすみ電話の後によく起こるメールである。また、電話しないでおやすみメールをする時もある。そして「おはよう」または、「おやすみ」を言うためだけにそのメールを送るのではなく、その日の最初のメールが「おはようメール」、最後のメールが「おやすみメール」となる。その日最初のメールの始めに、必ず「おはよう」と書き、最後のメールは「おやすみ」で終わるという形式がある。どちらのメールの場合も、「おはよう」という言葉の後、また、「おやすみ」という言葉の前には、それぞれたくさんの内容が書かれている。つまり、その日の最初や最後のメールという意味で「おはようメール」と「おやすみメール」であるが、内容的には、ただ単に「おはよう」とか「おやすみ」だけを伝えるメールではない場合が多い。ただし、鳥海さんとあつこさんの場合は、ときどき「おはよう」だけのメールを送るようである。起きてメールし、寝る前にもまたメールをすると、相手とずっと一緒にいるように感じるため、これらのメールが作成されている。

<sup>40</sup> 5.2. 瞬間画像の図 2 2、事例 1 9 を参照。

#### 事例 14 恋人同士（松本・マリ）

送信者	送信時間	送信場所	メール
松本 1	4:49	ベッド	<p>おはよ<sup>41</sup>🙄</p> <p>お母さんが兄貴の喋り声でねられなかったらしく、お風呂に入ったあと2人でずっと下で喋ってた🙄</p> <p>超～眠い😴笑</p> <p>今から寝ます😴</p> <p>ごめんなー遅くなって🙄</p> <p>じゃあジャスコに来て💖</p> <p>病院いかない🙄?</p>
マリ 1	4:52	ベッドの中	<p>大変じゃんすぐねちゃな😴</p> <p>今日会社の水泳くら 病院行けない夕方間に合ったら行く感じ🙄</p> <p>おき🎵</p> <p>おやすみ🙄</p>
松本 2	4:53	ベッド	<p>おっけ～了解🙄</p> <p>おやすみ～💖</p> <p>まあ大好きだぞ～🙄</p>

松本さんは、マリさんにおやすみ電話をしたくて、0:41 にマリさんに寝ているかどうかの確認メールを送ったが返事がなかったため、放っておいたという。4:22 にマリさんから「ごめんよ疲れすぎてかえったらすぐお風呂入って寝た🙄（後略）」というメールが届き、その後おやすみメールのやり取りが始まった。

#### 事例 15 恋人同士（松本・マリ）

送信者	送信時間	送信場所	メール
松本 1	0:06	自分の部屋	<p>（前略）</p> <p>じゃあお風呂入ってくる🙄</p> <p>先に寝ててもいいからね💖</p>
マリ 1	0:15	ベッド	<p>（前略）</p> <p>じゃあお先にねんねすんね🙄</p>

<sup>41</sup> このメールの場合は「おはようメール」と「おやすみメール」は混ぜてある。

			明日ね💕 おやすみん💕
松本 2	1:38	ベッド	お風呂出て歯磨きしてまったりしてたらこんな時間に🤪 (中略) じゃまた明日ね💕  おやすみ〜💕  まあ愛してるよ💕💕

上記で松本さんが書いている「先に寝てもいいからね💕」という一文は、ケータイ上での習慣を表している。すなわち、2人は寝る前に電話やメールをすることが前提になっている。以前は毎日電話やメールをしていたが、かなりお金がかかったため、今は毎日していないそうだが、夜に「おやすみ」の連絡を入れると相手の返事を待つことが習慣になっているため、上記では「今日は電話しなくても、寝ても大丈夫」という発言をしている。「おやすみ」メールはよくベッドで行なわれているメールである。

松本さんとマリさんの恋人同士のメールの場合、情報がたくさんあり、いろいろなトピックが混ざってある。その時やっていることの報告も多く、とても平凡な内容がよく見られる。例えば「お風呂出て歯磨きしてまったりしてたらこんな時間に🤪」のような内容もあり、やっていること全てを報告しているような形のメールである。そして、「好き」、「大好き」といった発言もよく見られる。

#### 事例 16 恋人同士（あつこ・鳥海）

送信者	送信時間	送信場所	メール
あつこ 1	8:03	電車の中	おはようじろちゃん <sup>42</sup> 💕💕
鳥海 1	9:47	岡山空港	おはよう👏今日も頑張りましょう。


このメールに対しては、あつこさんが「おはようと打ってみた。あまり意味はないメール」と説明している。つまり、内容よりは、相手とのつながりを感じ合うため、気まぐれに送ったメールである。

#### 【安心させるメール】

安心させるメールはいくつか種類がある。「特定状況」によって、例えば、具合が悪い時に相手に「元気になった」ことを知らせる安心メールもあれば、「最終電車に乗れた」というメールもある。心配事があるとき、相手を安心させるために送られるメールであるが、習慣的によく見られるのは、帰宅を知らせるメールである。このメールは、恋人同士の間でよく行なわれている。

<sup>42</sup>あつこさんは恋人の名前を略して呼んでいる。ここでは仮名。

## 事例 17 恋人同士（あっこ・鳥海）


送信者	送信時間	送信場所	メール
あっこ 1	22:37	自宅	あっちゃんは着いたちん 

上記で紹介した「おめでとうメール」、「励ます、励ましてもらうメール」「おはよう、おやすみメール」、「安心させるメール」以外にも、たくさんのメールがある。ある「特定状況」によって、「ありがとうメール」、「頑張れメール」など、その他の交感メールもある。

### 3.2 絵文字に捕らえられる人間

本章では、メールのやり取りを中心に議論してきたが、その中で使われる絵文字の意味や利用、また、どのように絵文字がわれわれのコミュニケーションを形づくっているのかに関して述べるのが、本節の目的である。

絵文字は日本語で「文字」とある通り、絵の文字である。英語では emoticon と呼ばれているが、これは emotion(感情)に由来する言葉であり、感情を表現する絵であるという響きの言葉である。

私が最初に絵文字を使ったのは、パソコン上での microsoft msn のチャットであった。その時は、簡単な絵文字しかなくて、ほとんどが顔であった。スペインの友人に絵文字に関して聞いてみると、Microsoft msn<sup>43</sup>の場合は使うが、ケータイ上では記号絵文字しか使わないという。記号絵文字とは、記号を利用して作成する絵文字である。例えば (^\_^) の笑顔である。それに対し、「イラストの絵文字」は絵で表している絵文字である。例えば  である。MMS ではなく、スペインのように SMS が中心になっている国では、「イラスト絵文字」はないが、記号絵文字は使う人がいる。ただ、日本の記号絵文字と違って、横から見た絵文字である。例えば、笑顔は :)、悲しい顔は :( などである。記号絵文字だけではなく、microsoft msn で使う記号をそのまま使う時もあるという。例えば、microsoft msn では(K)はキスである。それを通じる仲間の間では、ケータイでも(K)を送ったりするようである。

日本ではケータイにおける最初の絵文字は白黒であったが、顔の形等の絵文字ができる前に、すでに多様な記号絵文字をつかう傾向があった。すでに述べたように、日本の場合横から絵文字を読むのではなく、正面から読む。絵文字は日本ではかなり人気であるように見える。例えば、日本のブログでは Ameba (<http://ameblo.jp/>) や Yaplog (<http://www.yaplog.jp/>) など絵文字の利用が設定されている。同じくヨーロッパにおいてもケータイの「イラスト絵文字」は使われていない。主な理由としては、SMS が基本であるため、文字数自体が限定され、スペース的に

---

<sup>43</sup> MSN メッセンジャーはインスタントメッセンジャーのひとつで、Windows および Mac OS 上で動作するソフトウェアである。



絵文字を使う余裕がない。また、例えばスペインでは絵文字が入っているケータイがほとんどない。

しかし、技術的な特徴だけではなく、文化的な意味合いもあるだろう。Miyake (2007) が指摘しているように、絵文字の起源は 1970 年代にさかのぼる。友達同士のカジュアルな手紙やギャル文字、漫画などでは、絵文字のような書き方がすでに存在していた。いくつかの絵文字の意味は日本で育った人であればすぐに分かる。例えば、🏃は走り出した後の意味を表している。また、👉はすさまじい音の表現であると Miyake は述べている。

この点に関して、調査対象者の佐藤さんは次のように語っている。

「漫画的に感情を表現するというのが日本人の中では日常的にあると思う。だから、例えばケータイじゃなくても、昔私が中学校の時とか、高校の時に、ちょっと授業中にメモ帳に手紙を書いてちょっと回したりした時も、ちょっとこういう絵文字、その時はケータイがなかったから、絵文字ではないけど、ちょっとウサギの絵を書いてみたり、猫の絵を書いてみたりして、ちょっとそういうモノを意味もなく書いたり、楽しいイメージを作るみたいなの。そういうのが基本的に日本人の文化、まあ、日本人というか私の世代、ジロ<sup>44</sup>ぐらいはまだあると思うけれども、そういう子供の時からそういうやり取りとかちょっとした手紙の中とか、例えば、年賀状とかを書いたり、クリスマスカードを書いたりとか、ちょっと絵を入れたりすることがあったから、多分その延長線でこういうものを使っている。(中略) そういうものの親近感みたいなものが子供もそうなんだけど、大人になってからもずっとそれがある。だからこういう表現をするのね。年を取ってからも。私はもう 30 代だけれども、普通だったら多分こんな表現は多分外国の人はあんまりしない。普通に文章を書いて。でしょう。」

(20091107 : インタビューより)

佐藤さんが話すように、絵文字はケータイ以前にも別の形で存在し、漫画や日本のポピュラーカルチャーの中に多様な形で偏在している。

フィールドワークのメールのやり取りにおける絵文字を分析すると、4つの使い方が見られた。(1) 表情や気持ちを表すための絵文字。相手の顔や表情が見えないため、補足として顔絵文字を使う場合が多い。また、気持ちを表現し、強調するための絵文字。気持ちを言葉で伝えるだけでは足りないと感じる時、また、書いたことに何らかの気持ちを加えたい時に使う絵文字。ハートと笑顔が非常によく使われている。(2) 飾りや雰囲気作りとしての絵文字。メールを可愛くするために使う絵文字を指す。特に意味がない場合が多い。(3) モノを表している絵文字。言葉の代わり、また、言葉に加えて使う絵文字を示す。(4) 体の動きを表す絵文字。

---






























<sup>44</sup> やすじろさんのニックネーム。

絵文字は非常にたくさんあって、ここでは一個ずつ細かく分析することができないが、いくつかの例を取り上げて論じる。

### 【表情絵文字】

表情絵文字は一番よく使われている絵文字である。気持ちや表情を表したい時に利用し、一つだけではなく、たくさん連続して使う人もいる。その中で笑顔の絵文字は非常に人気である。



表 2 表情絵文字

	悲しい	え～ん  さいなら           
	吃驚	お風呂出て歯磨きしてまったりしてたらこんな時間に 
	恥ずかしさ	まあ大好きだぞ～ 
 	大変 困っている 恥ずかしい ごめん	病院行けない夕方間に合ったら行く感じ  わりメールがダメってた <sup>45</sup> 
  	どうしよう 困っている 大変	テストヤバイよ～  実験が普通にあるからめっちゃキツイと思う  おちかれさ～ん   

上記はいくつかの例だけを取り上げた。すべては表情絵文字であり、顔絵文字がとてもよく使われている。絵文字の意味は感覚的であるため、調査対象者に聞くと「なんとなく」、「あんまり意味がない」のような答えが多いが、上の表のように例を見てみると、感覚的でもある程度は利用した意味があることが明らかである。

表情絵文字の中では顔絵文字が多いが、ハートマークも非常によく使われている絵文字である。ただ、男性同士では見たことがない。恋人同士の間で使われることが非常に多く、また、女性の友達同士や女性の家族同士の場合も多い。以下はハートマークの利用とその気持ちに関する表であるが、特に意味がなく、飾りとして利用されている場合もある。

表 3 表情絵文字

	楽しみに	昨日吉祥寺でおみやげ買ったよ 
---	------	--

<sup>45</sup> 「ダメってた」は「かたまってた」という意味のようである。

嬉しい	おみやげ 🍡🍡🍡 わーい 🍡 🍡
有り難い	ポストカードありがび 🍡
かわいい	わんちゃんめんこいな 🍡
おめでとう	本当に本当におめでとう 🍡🍡🍡🍡
好き 愛している	すき 🍡 こんなに仲良くしてくれたの マリだけよ 🍡 まあ愛しているよ 🍡🍡

### 【雰囲気絵文字】

雰囲気絵文字は特に意味がなく、飾りとして、相手を楽しませるため、かわいくするために使われている絵文字である。この中でよく使われているのは 🍡🎵🍡 である。特に意味がないものが多い。

表 4 雰囲気絵文字

🎵	近くなったらまた電話します 🎵
🍡	「お風呂に」入れるよ 🍡🍡
🍡	5時頃ね～了解 🍡
🍡	お風呂に行ってきた～す 🍡
🍡	お誕生日おめでと 🍡
🍡	おみやげお楽しみに 🍡
🍡	そう言えば信二は前期のテストこれから始まるよね 🍡 大変だと思うけど頑張ってるね 🍡 <sup>46</sup>
🍡	いやいやまたまた来てくれてありがとう 🍡
🍡	だな 🍡


### 【モノ絵文字】

調査対象者の中では、さおりさんとあゆみさんの姉妹が一番よくモノ絵文字を使っている。そのモノの言葉の代わり、あるいは言葉に加えて使う。特に、🍡 はよく使われている。モノの場合は、言葉を打つと予測変換で出てくるからこそ使う時もある。すなわち、自分から「この絵文字

<sup>46</sup> マリさんはクローバーは「ラッキー」の意味でよく使うという。

を使おう」と思って使っているのではなく、ケータイが自動的にある絵文字に変換するから、利用者が選択してしまう場合が多い。

表 5 モノ絵文字

	今電車に乗った 
	あとなんかほしいのあったらまた連絡ける 
	じゃあ着いたら   ください 
	さっき一瞬家帰った～ 
	プレゼント帰るじゃん  

【身体絵文字】













身体絵文字は体の動きを表現する絵文字。「了解」の後は、を使うのは非常によく見られたが、この身体の動きは実際はほとんど行なわれていない。

表 6 身体絵文字



	りょーかい 
	  さいなら～   
	いやいやまたまた来てくれてありがとう  ギター 一はもっと精進しますよ 


絵文字はケータイ会社によって異なっている。ほとんどの絵文字は異なる会社間でも使えるように対応しているが、対応しているといっても、例えば AU のある絵文字をソフトバンクに送るとまったく違う絵文字が出てくる場合もある。そして、対応していない絵文字の場合、= という印が表示される。それを意識しつつ絵文字を利用している調査対象者が多かった。





「これは、このやつは、ここでは見えているやつは、私のケータイでみえているやつと違うのね。絵が違う。だから、その同じ絵になる ezweb の au の人にはこれを使う。だけど、あんまりドコモとか、ソフトバンクの人とかにはあんまりこれを比較的使わないようにしている。相手から送ってきた時にこういう動くアニメーション的なもので使っている場合は、あ、大丈夫かなと思って。たてえば、ハートマークちょっと動いているやつとか笑っているやつとか、なんか基本的に同じになりそうなものとか、限られたものに関して多少使ったりはするけど、私のケータイだと猫とかがいたりとか。。。これは例えば、これね（筆者に見せながら）こういう感じでいろいろ違うでしょう、こういうのが。で、こういうのは、多分これでは向こうに行かないだろうなと思われるものは使わないでこっちにする。（記号絵文字を指して）これだったらどんなケータイで

も見れるから。だから、間違っへんな意味にとられないような使い方をする。たとえば、基本的にこういう笑っているやつとか、後はこの辺のハートマークとか、こういうのは多分どのケータイでもハートマークはハートマークで出て来るだろうし、笑っている顔はスマイルの顔で出て来ると思われるから、そういうのは使ったりはするけれども、こういう「お巡りさん」とか「お化け」とかは出ない可能性があるでしょう。そういうのはなるべく使わない。ただ、au 持っている人にはこれを使う。」

(20090606：インタビューより。)

































絵文字はある種自分のアイデンティティになっているため、自分がいつも送る絵文字が、相手には違った雰囲気絵文字になって送信されることに対して違和感がある人が多い。鳥海さんは、よく走るの、走っている人の絵文字をよく使う。彼が使っている NTT ドコモでは、 という絵文字になるが、調査中に、恋人が使っている Softbank のケータイでは、 という絵文字が表示されていると知り、「かっこよくない」とがっかりしていた。ケータイによって、自分のアイデンティティを裏切られたような感覚であろう。

ほとんどの調査対象者は、ケータイに入っている絵文字を使うが、あつこさんは普段出て来る絵文字ではなく、ケータイの機能としてすでに入っている、もう少し大きい特別な絵文字を使うという。例えば、 といった絵文字である。

絵文字をダウンロードする人もいる（あゆみさん、かなこさん）。また、佐藤さんはブログで見た記号絵文字を、自分のケータイに登録して使うという。やすじろさんは猫が大好きで、以下のように会話に合わせて猫の顔絵文字を使うという：「ありがとうまだまだ頑張らないといけないんだけど  見ためはね〜プロっぽいんですけどね〜  でもサトマンには踊り色々みてほしいよ  いい踊り見てるとほんとに胸つかまれるね 」。

かなよさん、まりこさんとかなこさんの家族同士は、絵文字をたくさん使う特徴がある。友人に対してはそこまで使っていないようであるが、3人の間では非常に使っている。

表 7 絵文字<sup>47</sup>

かなよ	おげー        
まりこ	は〜い    待っててね     週末だぜ 
かなこ	ざんね〜ん                四ッ谷出たよ  何分に着く？

<sup>47</sup> 表 7 と表 8 の絵文字は 1 つの会話ではなく、別々のメールである。

非常におもしろいのは、人間が絵文字になる時である。まりこさん、かなこさんとかなよさんは、ニックネームを使っているだけではなく、絵文字でそれぞれを表現している。まりこさんは👤、かなこさんは👩、かなよさんは👨になっている。メールのやり取りでは、その絵文字で相手を指し示し、自分を表している。

表 8 自分絵文字

かなよ	お疲れさんパパがお迎え行くよって👨👤👨👨👨👨👨 👨時刻など連絡しておくれ
まりこ	👤子も食べたいよ👉かぶよ <sup>48</sup> 👨早いぜ👋👤👤👤
まりこ	遅いね～気をちけてね 👨👤👨👨👨👨👨👨👨
あゆみ	今日はいついつ帰ってくるの？👤👤👤

上記のかなよさんが送ったメールでは、「パパがお迎えいくよって」の次に続く絵文字は、娘達を表していて、2人の娘を迎えに行くという意味である。また、その下のまりこさんのメールでは、「私も食べたい」という意味で、自分を表している絵文字を用い、「👤子も食べたい」と書いている。そして、3つ目のメールは、姉が帰ってこなかった時、まりこさんが送ったメールである。そのメールは「家族みんな寝ている」という意味で送った。バイバイと手を振る絵文字の後は、まりこ👤、母👩、犬🐶、父👨の意味である。

では、どのようにして3人を表現する絵文字が決まったのだろうか。かなこさんの場合、部屋着がすべて茶色であるらしく、やせているかなこさんが着ていると、「サルみたい」だと言われたので、サルの絵文字を使うようになったという。実は、以前は部屋着が緑だった頃があり、その時はカエルの絵文字になったという。まりこさんが豚で表現されている理由は2つある。1つは、子供の頃顔がまるくて少しぽっちゃりしていたからである。そして、もう1つの理由は、父が豚が大好きだから、まりこさんを豚で表現するようになったという。かなよさんの場合は、まりこさんとの面白い会話がきっかけでカバになった。



図 12 絵文字の元

<sup>48</sup> 「かぶよ」はかなよさんのニックネーム。

まりこさんが母に図12のぬいぐるみを見せたら、かなよさんが「これ何？」と聞いてきたので、「カバよ」とまりこさんが答えたのだが、かなよさんはよく分からなくて「かぶよ？」と聞き返したという。このやり取りが、あまりにも面白かったから、その時からカバになったという。しかし、Softbankではカバの絵文字がないため、ハムスターで表現しているという。なぜかという、亡くなった犬について話す時、Softbankの絵文字の犬が、昔飼っていた犬とは似てないため、代わりにいつもハムスターの絵文字で表現しているという。それで、かなよさんも犬と同じ絵文字を使っているようだ。最後に、ケータイを持ってない父がサンタになった理由は、頭にけがをした時、病院に行って、図13の格好で家に帰ってきた時、「サンタみたい」と家族が言い始めたことがきっかけだったそうだ。

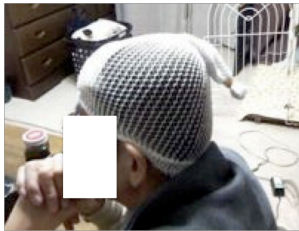


図 13 絵文字の元

そして、あゆみさんの姉、さおりさんは、ペンギンで表現されている。家族にペンギンのように歩いていると言われるらしく、「実家でテレビを見ていてペンギンが出てくると、家族みんなに、あ、姉ちゃんがいる！と笑われます」と話していた。

多くの調査対象者は、何度も同じ絵文字を使っている。そして、親密に連絡を取っている人同士は、お互いに影響し合っって同じような絵文字を使う。また、絵文字を使う時、点やコマを使わないで、その代わり文の区切りとして絵文字を入れることもある。

絵文字は親しい人の間で利用されるものであり、やすじろさんが言うように、「目上の人に対してはなかなか使えない」ようだ。絵文字の利用は感覚的であり、絵文字について説明するのは難しいように見えた。使っている理由としては、気に入っているから使う、また、気持ちを表したい時、嬉しい時、お礼を言いたい時、メールが楽しい時などに使うという。

絵文字を使うことによって、言葉にできない表現や気持ちを表し、伝えることが可能になるだけでなく、遊びのある、楽しいコミュニケーションの世界が出来上がる。

### 3.3 ケータイメールにおける愉快性

本章では、ケータイメールのやり取りや、絵文字の細かいデータに基づき議論をすすめてきた。日本ではPHSやポケベルが出てきてから、現在のメールに近いコミュニケーションが始まった。

調査対象者の中では、PHS やポケベルを使った経験がある人は少なかったが、歴史としては、そのコミュニケーションの形が、今も程度残っていると見えるだろう。本章では、メールを3つの種類に分けた。第一は調整メール、すなわち、待ち合わせの場所や時間、活動や行動を調整する目的でやり取りするメールである。第二は延長メールで、会った人と別れた後、その日の経験をそのまま終わらせず、その関係性を延長、継続させるためにやりとりするメールである。最後に、交感メールについて分析した。交感メールは、相手と気持ちを通わせる、互いに感じ合うメールであり、その中には例えば、「おめでとうメール」、「おはよう」と「おやすみメール」、「安心させるメール」などがあげられる。そして、メールにおける絵文字を、表情絵文字、雰囲気絵文字、モノ絵文字と身体絵文字という4つに分類し、事例を提示しながら、分析してきた。そこで特に興味深い例として、人が絵文字になるという過程を紹介した。

メールと、そこにおける絵文字のコミュニケーションの目的は、内容を伝えるというよりは、お互いに愉快さを感じ合うことだ。非常に日常生活に適したコミュニケーションであり、かなこさんが言うように、「用件がないと電話できないが、メールはできる」。すなわち、メールは情報を伝えるためのコミュニケーションではなく、遊ぶため、感じ合うため、愉快性を多様な形で伝えるためのコミュニケーションである。ケータイメールは文字のコミュニケーションと会話のコミュニケーションの中間にある。会話のように、些細な、ありきたりな内容について話す気まぐれなコミュニケーションでありつつ、文字のコミュニケーションのように、コミュニケーションを準備する余裕があり、メールのリズムが不定期であるため、言いたい内容や言い方、返事を推敲する余裕がある。

愉快性、つまりユーモアは、人間関係を潤滑にする非常にすぐれた社会的な技能である。愉快性に満ちたコミュニケーションこそ、人間関係を構築し、強化し、維持することができる。かなこさんは、「妹が電車にいると知って、笑わせたいからメールを送る」ことがあるという。そして、鳥海さんとあつこさんは、食べ物を交えた言葉でメールのやり取りをした時期があって、「おはヨーグルト」、「おつかれんこん」などの言葉を作成し、楽しんでいたという。また、同じく鳥海さんとあつこさんは、漢字だけをつかった、中国語のようなメールのやり取りもしていたという。つまり、ケータイコミュニケーションは1つの遊び、エンターテインメントである。

メールのやり取りを見ると、ケータイがまるで触手のように見える。常に身につけているからこそ、頻繁に、しかも簡単に人とコミュニケーションをとることができ、人々は互いに結びつきあう。

本章はメールを中心に分析したが、ここでは、第2章と第3章もふまえて、メールにも電話にも関わる相互作用に関して考察したい。Goffman (1959) は、対面的な相互作用を分析し、劇場理論を提唱した。彼は、人間は相互作用の際、パフォーマンスをすると指摘した。しかし、ケータイによって、面白い状況が発生している。ケータイが、われわれのパフォーマンスを形作っているのだ。例えば、電車の中でメールを送っている時、ゴフマンが指摘するように、その場所と、



その場にいる人間との相互作用が生じているといえる。着ている服、態度、座り方、ケータイの飾りなどは、すべてわれわれのパフォーマンスである。しかし、同時に、ケータイ上で行なわれている相互作用においても、われわれはパフォーマンスしなければならないため、2つのパフォーマンスを同時にコントロールしなければならない。電車できちんと座りながら、隣の人に迷惑をかけないような表情を保ちつつ、メールを書く。そのメールで絵文字を使っているにもかかわらず、実際には表情を変えない。メール上で行われるコミュニケーションで見せている表情と、電車という場で見せている自分のイメージにギャップがあるまま、二重に相互作用を行なっているのである (two-fold interaction)。時々、メールをしながら微笑んでいる人もいるが、ほとんどの場合、表情を変えないように自らコントロールしている。このように、ケータイはわれわれの社会的なパフォーマンスを二重にし、われわれの自己コントロールを促す。この二重パフォーマンスの興味深い例は、ケータイ画面用のステッカーである。その場にいる人にはケータイの画面が見えないようにすることで、同時に行なわれている2つの相互作用を混ぜないように利用されている。

また、絵文字があるからこそ、われわれの気持ちは形になる。しかし、表したい感情が、必ずしも適切に具体化されるわけではない。異なる会社間でのやり取りでは、自分が選んだ絵文字を、ケータイが自動的に違う絵文字に変換してしまう。われわれのパフォーマンスが、勝手に変換されてしまうのだ。

では、本章の最後にケータイユーザーとケータイモードについて考察してみたい。Green はケータイ利用者を、熱狂的、実用的、批判的という3つのカテゴリーに分類した (Katz 編 2003 所収)。彼女によると、熱狂的なユーザーにとって、ケータイは自己表現として、また、友達とのコミュニケーションの象徴として見なされていた。実用的なユーザーは、ケータイを便利な機能として見なしている。そして、批判的なユーザーは、ケータイを持っていても、ケータイに対してネガティブな意見を持っているという。

本研究の調査対象者達にも、おおまかに熱狂的、実用的、批判的なユーザーがいたといえるかもしれない。しかし、単純に3つのカテゴリーに分類することはできない。例えば、古澤さんは実用的なユーザーであり、絵文字を使わない。また、用件のないコミュニケーションはしないが、ケータイバンキング、万歩計、画像撮影等の利用はしている。特に画像は、実用的とはいえないだろう。また、かなよさんは、ある程度ケータイに対して批判的だが、同時にとても熱狂的に使う。本論の分析から、前述した3つのカテゴリーに加えて、表現的なユーザーや、感情的なユーザーの存在も明らかになった。どちらかという、男性の方が実用的な利用をしているように見えた。また、ケータイに対する態度は、おおまかに2つに分類できる。まず、ケータイに対して注意深い態度をとっているユーザーは、ケータイを常に調べたり、バイブレーションも触感的に感じやすかったりと、ケータイに対して常にアンテナを張っているような状態である。それに対し、不注意な態度をとっているユーザーは、ケータイを持っていても、使いたい時にしかケータイを見ないので、連絡が来ても気づかない。特に後者は、なかなか連絡がとれないため、周りの

人にしばしば注意される態度である。最後に、コミュニケーションや状況によって、ケータイに対するモードが2種類あることを指摘したい。まず、ケータイでやり取りしている最中は、活動的モード(alert mode)にあるといえる。相手に連絡をしたり、相手の連絡を待ったり、という相互のやり取りを、常に予期している状態を指す。それに対し、無活動モード(passive mode)は、ケータイを持っているが、他者からの連絡を期待していない状態を指す。

## 4. ケータイ化された空間

第2章と第3章ではケータイと人間関係について論じた。ケータイにおける人間関係がどのように構成されているのかに関して分析してきた。「触手」というメタファーを用いて、触手のように、ケータイを延ばす（利用する）こと、人と結びつくということを示した。第2章ではケータイというモノは、ストラップで人間を儀式的につなぎ、人間はケータイの中でフォルダーになるという点を指摘してから、通話コミュニケーションの分析を試みた。第3章ではメールコミュニケーションとそこにおける絵文字に関して論じた。

本章では、ケータイと空間の関連について論じる。ケータイというモノはどのように空間と相互作用し、空間を形作っているのかについて分析していく。ケータイのある空間とケータイを置く場所を分析してから、ケータイそのものを一つの空間を形成するものとして取り上げたい。

### 4.1 プライベートとパブリックの境界線

ケータイ研究の中では、空間というテーマがしばしば出てくる。日本における研究においては、電車内での通話禁止が特別な事例として取り上げられ、電車内でのケータイ利用の「社会問題化」について論じられてきた。例えば、富田は「ケータイでの話し声も、着信音と同様に、空間を侵犯する。私たちは目をつむることはできても、耳を閉じることはできない」（2002:56）。Ito & Okabe（2005）も公共交通機関におけるケータイ利用について研究した。公共交通機関で観察を行ない、公共交通機関利用者にインタビューをした結果から、「ケータイの適切な利用」のあり方を明らかにした。多くの利用者がケータイメールに関してはいくらしても良いが、長い電話をするのは適切ではないというふうに感じているようである。電話に出ても、「電話に出て申し訳ない」というパフォーマンスを行うべきであるという感覚を持っているため、小さい声で話したり、すぐ電話を切ったり、離れた所にいって話したりする行動が見られた。公共交通機関利用者のマナーの認識はごく普通のこととして受け入れられている。

電車という空間に関する研究の他には、プライベート空間とパブリック空間に関してのいくつかの考察がある。まず、ケータイがパブリックな空間とプライベートな空間を横断しているという考え方がある。車内で電話で話すと、関係のない人にも聞こえてしまうため、公共空間で普段見せる自分のパフォーマンスにプライベートな情報が入り、プライベートとパブリックの壁が薄くなる。この話は、ケータイに限らず電子メディアについての一般的な見解としてある。Meyrowitz もプライベートとパブリックについて論じた。彼は、メディアの全般についての考察をしているが、基本的にはテレビ分析を行なっている。彼によると「Electronic media have combined previously distinct social setting, moved the dividing line between private and public behavior toward the private, and weakened the relationship between social situations and physical places」（1985:308）。しかしながら、彼の分析ではパブリックメデ

ィア(テレビ)が基本になっているからこそ、この結論が導きだせたのである。確かに、パブリックメディアにおいては、地理的な場所と社会的な場所のライン(境界)は薄くなったと考えられるだろう。

しかし、プライベートとパブリックにおけるふるまいの境界線は、ケータイの場合はなくなっていない。ケータイはパブリックなメディアではなく、非常にプライベートなメディアであるため、情報へのアクセス<sup>49</sup>と言ってもは公共に関わっているというわけではない。ケータイに関わる社会的状況は、親しい人同士の間で生じる状況であり、親密な関係でない人にはケータイに入っている情報へのアクセス権を与えることはない。例えば、調査対象者の片岡さんは、友人が勝手に彼のケータイを手にとってメールを見ていたとき、一所懸命に友人に見せたくない情報を消していた。もちろん、公共空間においてもしばしば誰かがケータイで大きい声で話し、プライベートとパブリックのラインがなくなることがある。しかし、筆者の観察したかぎり、周囲に迷惑をかけないように、またまわりの人に聞かれないように、「本当に相手が聞こえているのかな」と思うくらい、小さい声で話しているケースがほとんどであった。しかも、プライベートとパブリックを区別するために、わざわざケータイ画面にステッカーを貼り、自分のプライバシーを守る傾向が見られた。

Meyrowitz は Goffman (1959) に基づき、社会的な状況が空間に構成されているという基本的な概念から分析したが、Meyrowitz は「To include mediated encounters in the study of situations, we need to abandon the notion that social situations are only encounters that occur face-to-face in set times and places. We need to look at the larger, more inclusive notion of “patterns of access to information”」(1985: 37)とも指摘した。彼によると social situation は情報システムであり、相互作用は必ずしも物理的な場所に限られたものではないという。しかし、ケータイの場合は、テレビと違って、ケータイの中の個人情報は公にはならない<sup>50</sup>。

先に指摘したように、ケータイはプライベートなメディアであるため、パブリックなモノとして使われる場合が少ない。Lasen (2005)が指摘するように、プライベートな会話はいつもパブリックな空間でも起こってきた。そして、パブリックとプライベートな行動はいずれも個人空間でも公共空間でも起こるものだ。

プライベートとパブリックは“black&white”ではなく、その境界線が「薄くなる」、「全くない」、「全くなくなってない」という状況が重なりあっているが、結局その境界線を横切るかどうかは、利用者が「特定状況」によって決めることである。

---

<sup>50</sup>松田(2004)が指摘したように、ケータイにはわれわれの個人的な情報がたくさん入っているため、「監視のための『端末』となる可能性をもっている」。しかし、監視はプライベートとパブリックの概念の話と言うよりも、個人的な情報がパブリックに監視されているという話である。

そして、ケータイ研究の中でしばしば繰り返されている概念が、「いつでもどこでも」という空間と時間に関するケータイの利用における考えである。ケータイは、確かに「いつでもどこでも」利用できるような感覚がある。ただ、それは錯覚にすぎない。ケータイの利用は「いつでもどこでも」できるのではなく、われわれは日常に合わせて利用している。とはいっても「いつでもどこでも」という感覚は確かに一般的には感じられて、安心感と繋がってはいるが、実際の利用の形態とは異なる。

プライベートとパブリックの話や「いつでもどこでも」の概念は、理論的なレベルで終わってしまいがちで、具体的な場所や空間と関連した研究がほとんどない。そこで、理論のレベルでの話を具体化のレベルへ持っていきたい。また、今までの研究のように電車という空間におけるケータイ利用についてだけではなく、今まではほとんど見過ごされてきた実態、つまり実際にケータイが空間とどのように関連しているのかを分析していくのが第4章の目的である。

ケータイと空間、場所との関連は3つのレベルで分析できる。第一に、ここまで語ってきた公共空間とケータイ利用に関するものである。ここではケータイに対する公共空間を規制として取り上げ、それに関わる利用者の感覚や空間との距離のとり方について述べる。第二には、公共空間、半公共空間と個人空間という3つの空間を説明してから、それらの空間とケータイとの関連について、最後に、ケータイと場所について論じる。

本論では、「場所」を何かが存在したり行なわれたりする地理的な所として定義する。場所の場合、そこに物質的にいる点が重要である。それに対し、空間とは時間とセットになった社会現象の場であり、物理的に存在する物質が必ずしも重要ではない。

空間に関しては、第一空間、第二空間と第三空間という分析がある。第一空間とは、家庭、住まいの空間である。第二空間は職場の空間である。この2つの空間では、人間関係がある程度はつきりしており、匿名性がほとんどない空間である。これに対し、第三空間は匿名性のある空間であり、自由空間、余裕空間として定義されている。この空間は例えば、都市の戸外である。その分析に基づいて、宮台(2000)はテレクラ<sup>51</sup>に関して語り、第四空間という概念を生み出した。第四空間とは、非場所的な、不可視化のような社会現象を起こる場を表している。例えば、宮台は性的なコミュニケーションについて語り、こう言った第四空間は都市空間と融解するという。若者、特に女性が学校、家庭、地域では居心地が悪く、大都会という第四空間に出るという話を取り上げ、第四空間を「何でもできる」空間として取り上げられている。その居心地の良さは大都会における匿名性と関係しているとも指摘されている。

そこで疑問を持つのは、第三空間と第四空間の違いについてである。第四空間は一般的な空間の定義というよりは、空間の扱い方についての定義になってしまっている。空間の状態だけを考えれば、第四空間は匿名性のある都会の空間であるかぎり、第三空間と違わないであろう。更に

---

<sup>51</sup>テレクラ(テレフォンクラブ)とは、電話を介して女性との会話を斡旋する店。会話次第では女性と会う約束もでき、出会い、ナンパが可能になる。

例えば、非場所的な、不可視化社会現象について語るなら、それは、大都会でも自分の部屋でもありえる現象であるのではないか。例えば、若者は長い時間大都会にあるコンビニという匿名性の高い空間で不可視化の行動を行なうことができるが、個人空間の自分の部屋からでもケータイを使って性的なコミュニケーションをすることも可能である。そうすると、ここで言われる第四空間は都市空間における社会現象なのか、匿名性を持つ社会現象なのか判断がつかない。

## 4.2 ケータイへの規制と公共空間

ケータイというモノはわれわれの空間を大きく変えた。様々な場所で、ケータイに関する利用やマナーの報告、サイン、ポスターなどが普及してきた。映画館でも「ケータイの電源を消して下さい」という注意が当たり前になった。図書館、美術館、美容院、電車、バスなど公共空間でケータイに関する情報が増え、空間の見た目も変わってきた。



図 14 公共空間における規制（左から順に a. b. c.）

これらは、会社や機関が一方向的にケータイの適切な利用を押し付けとも言えるが、空間とケータイ利用における多様な違和感や不安が生じたことの反映でもあり、それゆえケータイに対する空間規制が始まったと考えられる。

公共空間による規制から、そこでのケータイ利用は制限されているが、人間はその規制と折り合いをつけつつ、ケータイを利用している。ケータイの利用制限により、メールでのコミュニケーションが多くなり、通話に限らずケータイの全体的な利用を禁止されていても、メールを遠慮することは非常に少ない。調査対象者も「メールならだいたいどこでも大丈夫」という発言が非常に多い。美術館、映画館の場合はメールを含め、ケータイの利用は少ないが、その他の公共の場所ではメールをすることはあたかも当然のこのようである。

Ito & Okabe (2005)が言うように、電車の中のケータイ利用は、時間、年齢、路線等のコンテキストにより異なる。その他の公共空間でも、会社や、機関がケータイの利用を制限し、それに対して、人間が自身の感覚によって、どこまで制限を守るのかを決める。例えば、ある友人はこう言った。「なかなかいいレストランに食べに行ったら、そこで食べていた人がケータイで御飯を撮影していた。あんな豪華なレストランでもケータイカメラ使っていいのかな」と彼女は疑問を持ったようだった。彼女は 30 代の人で、レストランでケータイカメラを使った人は彼女より

若かった。ケータイ利用は年齢によるのではないと思われるが、時代によってケータイというモノに対する感覚が変わってきていることもまた確かである。

このように、公共空間におけるケータイ利用制限とその関係は、その空間、その場所と時間、という「特定状況」によって形作られている。言い換えれば、ある程度は人間の感覚でケータイ利用の形態が決まるが、その人間がいる空間によっても身体感覚は変わってくる。つまり、感覚と空間は分離できないものである。土曜日の夜、山手線に乗ると分かるように、非常に賑やかな雰囲気、グループやペアで、または友達同士で電車に乗っているケースが多く、通話も問題ないように感じ、周りの人からの監視も起こらない。それに対し、朝の「仕事に向かっている」という雰囲気の電車の中は静かであり、ケータイでの通話はあまり見られない。もちろん、こうした現象は電車に限ったことではない。

ケータイマナーは普段周りの人や警告のポスターなどから押しつけられる。しかし、ケータイカメラの場合は、外からではなく、ケータイ自体がカメラの利用を制限もする。カメラを利用する際、音が出るため、至る場所で好きなようにケータイカメラを利用することは不可能である<sup>52</sup>。

つまり、公共空間におけるケータイ利用の制限に対し、人間は感覚と雰囲気によって制限との距離をとりつつケータイを利用しているのだ。ケータイというモノによって、われわれの感覚、マナーの適切さ、考え方は変容しつつある。

#### 4.3 三つの空間とケータイの関係性

東京に住んでいる、あるいは生活している人々は、東京のいろいろな所を通り過ぎたり、歩いたり、見たりするのであろうが、結局出掛けたり、時間を過ごしたりする場所は非常に限定的だ。いつもと違う場所に行くのは、週末や暇な時くらいであり、ケータイを使っている場所も極めて限定されている。ケータイ利用に関する空間は次の3つに分けられる。

①個人空間：自分が占有している場所、自分の場所。だいたい家や部屋であるが、例えば、ホームレスの場合はベンチなどでも有り得る。個人空間は他者を除外する空間であり、個々人が落ち着ける親密な空間である。

②半公共空間：長い時間を過ごす空間。生活に関わる基本活動が行なわれている空間。例えば、調査対象者の場合は、会社、高校、大学、施設、アルバイトの店などである。これらはある程度個人化された場所である。自分のモノを置いたり、同じ場所で長時間過ごしたりする空間であり、何らかの形で自分の場所だと感じられる空間を指す。

---

<sup>52</sup> プリクラのあるゲームセンターやアーケードでは雑音があり、女性がプリクラを撮っている間、男性が女性の下半身を盗撮するという事件が起こったため、「ケータイ撮影禁止」というサインがあるが、それ以外はケータイ撮影に関する注意を見た事はない。

③公共空間：個人化されてない空間である。長い時間でも、短い時間でも過ごす空間であるが、その空間の中には特定の時間を過ごす決まった場所がない。例えば、電車、カフェ、カラオケ、道路などである。

個人空間の場合はプライバシーがあるため、落ち着いて、ゆっくりケータイを使うことができる。自分の部屋やベッドの中などでは、居心地よくより親密にケータイを使える。あゆみさんが言うには「一番居心地がいいのは自分の部屋です。1人でいたほうが周りの目を気にせずになれるからです」。松本さんにとっても、ケータイを使う際一番居心地がいいのは自分の部屋の「ベッド（布団の上）」だそうで、「一番落ち着いてゆっくりできる」からだという。梅村さんも自宅が一番居心地が良いと話した。鳥海さんの場合は自分のリビングで、「ケータイ利用するとかに関係なく、自分が一番落ち着く場所だから」と語る。かおりさんは「静かだから」居間が居心地がよいという。かなこさんは、特にメールの場合、「自分の部屋の片隅で、誰にも邪魔されないし気分も快適、片隅だと2辺に囲まれて落ち着く」と話す。つまり、個人空間では、「落ち着く」、「気にする事がない」、「ゆっくりできる」、「静かである」といった理由からとても気持ちよくケータイを使えるようである。ケータイ利用は空間によって影響されるが、その空間にいる人達、自分と那些人達との関係、そしてその空間における適切な行動の決まり事の上、自分の感覚で利用できる。例えば、家にいても、親がいると自由に電話で話せない場合が多いため、親と一緒に住んでいるマリさんや松本さんにとって一番落ち着くのは自分の部屋である。

半公共空間は、ケータイ利用が一番制限されている空間である。仕事や学校ではケータイの利用が限られている場合が多いが、空間とそこにおける営みはそれぞれである。まりこさんの参与観察を行なった際、彼女はケータイをずっと鞆の中にしまい、まったく使わなかった。ランチになるとケータイと弁当を鞆から出し、食べる前にケータイチェックやメールをする。しかし、インタビューをした結果、仕事中に電話に出る場合もあるようだ。まりこさんが勤めている会社は小さく、社長と彼女しかいないため、お互い親しいので<sup>53</sup>、電話が鳴ったら、「出ていいですか」と聞き、出る時がある。片岡さんは夜間高校に通っているが、授業中でも電話に出られると話す。夜間学校は普通の学校よりは自由な雰囲気なのであろう。調査対象者の中では、例えば、かおりさんが父親の施設に行く場合、特に父親の部屋にいと、周りの人がいないため、割と自由にケータイを使えるが父親に注意されることもあるようだ。梅村さんはスーパーでバイトをしていて、バイト中でもメールをするそうだが、上司からよく怒られているようだ。それに対し、かなよさんは店をやっている間、ケータイはロッカーの中にしまっているという。

そして、一番カメラを使わない空間も半公共空間である。しかし、半公共空間や屋内の公共の場所で撮る「実用画像」<sup>54</sup>の場合は、普段ケータイカメラを使ってはいけない空間でも、利用が

---

<sup>53</sup> 親しいといっても、あくまで社長であるため、社長にメールを送る時は絵文字を使わないという。

<sup>54</sup> 5.1 で論じるが、「実用画像」とはタスクを完遂するために撮った画像である。例えば、買い物と比較するための画像、メモ書きとしての画像、地図や時刻表の画像などである。



認められているようである。例えば、授業中はケータイカメラの利用は許容されていないが、松本さんが話したように、黒板に書いてある宿題をケータイで撮ることがある。すなわち、この利用は「楽しさ」との繋がりがなく、「勉強」として認められている。当然だが、基本的には、改まった空間であればあるほど、ケータイカメラは使いにくくなる。

公共空間の中では、電車で非常によくケータイが使われている。個人空間のみならず、電車もまた、ケータイを使うには非常に気楽な場所である。さおりさんが指摘するように、「（電車の中では）まわりに人がいるので電話はできませんが、メールやインターネットはひまつぶしになるので、電車の中ではちょうどいいです」。また、さおりさんは「（電車の中では）他の作業もなくゆっくり落ち着いてメールが出来る」と話した。まりこさんも「一人で電車に乗っているとき。特別やらなくてはいけないことはないのでおそらく一番時間がある」と語った。古澤さんも「帰りの電車の中で、仕事が終わリリラックスしている時間だから」ケータイを使うと話し、あつこさんも、「電車の中で集中できるから」メールを打つようだ。佐藤さんは電車の中だと「わざわざ時間を費やしている感じが無い」と話した。では、公共空間である電車の居心地がいい理由は、個人空間と同じく、「落ち着く、リラックスできる」などもあるが、「やらなくてはいけない事がない」、「暇つぶしだからいい」、「時間を費やしている感じが無い」といったコメントも多かった。この、時間に対する感覚はケータイと非常に関連している。

多くの社会においては、人々は「時間の奴隷」になっている。労働システムの中で、資本主義の寵児として働かなければならない。しかも、「働くのはいいことだ」というメッセージが盛んであり、われわれの感覚もそのように育てられてきた。また、仕事と関係のない時間でも、なまけることがよくないと考えられている。学校の夏休みでも、夏休み中にしっかり頑張ったかどうか聞かれ、そうすると「休み」の意味が分からなくなる。しかも、日本の場合では、挨拶さえ「頑張って下さい」となっている。「仕事ばかりがいいことではない。私達が奴隷になってしまっただけで、休むのは素晴らしいことだ」といくら思っているとしても、休んでしまうと悪いことをしている気がしてしまう。感覚や気持ちからは逃げられない。そこで、「遊び」、「楽しみ」、「暇つぶし」という概念と繋がっているケータイを、やることがない時に使うと、「時間を無駄にしている」安心感がある。メールの返信、メモ書き、スケジュール設定などは電車にいて、時間があるからやるのだが、逆に、電車でやることがないからケータイを適当にあつかうという行動もある。東京では「電車」という存在が大きく、電車についての話は毎日のように聞かれる。通勤や通学の時間が長く、遅く帰ると疲れも溜まるため、ケータイは現実逃避をしたり、時間を感じさせないための装置になるのである。

戸外の公共空間でのケータイの利用は一番自由に見える。東京の街を歩いていると、不思議な格好をしている人々を見かける。変な所にしゃがんでいる人、上を見ている人、道の真ん中に立ち止まっている人などをよく見る。近づいてみると、ケータイで写真を撮っていることが分かる。

戸外では割とどこでも写真を撮れるという感覚が一般であるようだ。特に親しい人と一緒にいる時や、1人である時に撮る。

公共空間でよくあるのが、ケータイをプライバシーや親密性がある空間で使いたいため、奥まった場所や片隅を探して使う光景だ。「片隅」が好きな人は非常に多い。ケータイを利用するときに限らず、電車の中でも、やはり人の間よりは角の方が選ばれる。カフェでもどこでも「片隅」だとプライバシーを感じ居心地がいい。ケータイ電話の場合、周りの目を避け、話を聞かれないように片隅を探して、電話をするという傾向がある。

さて、第3章で指摘したように、ケータイは二重の相互作用を構築する。すなわち、同じ空間にいる人々との相互作用と、ケータイ上で行なわれている相互作用が同時に行なわれていることを示した。公共空間にいる時には、その空間との相互作用を避けるために、ケータイを使う時がある。この点はなかなか興味深い。数ヶ月前友人と渋谷に行き、LOFTの小さい坂の所で、立ったまま喋っていた。私達の隣には、「渋谷っ子」の女性がいた。彼女は突然止まって、困った顔をしていた。すると、急に、鞆の中からケータイを取り出し触り始める。しかし、ボタンには触れず画面を見ていた。よく見てみるとどうしてかが分かった。彼女は非常に高いブーツを入れていたが、そのブーツの片方の靴底が外れてしまったため、歩けなくて困っていた。ケータイを触ってもしかたがない状態だが、ケータイに触れているだけで、その「特定状況」を避けられるという安心感を味わうことができる。1人である孤独感は耐えづらいことである。誰かと一緒にいる時にはまったく気づかないことが、1人であると非常に気になる。ちなみに、この渋谷の女性は5分かけて、ケータイというマスクを利用しつつ、自分の中を整理し、外れた靴底を引きずりつつコンビニへ向った。このように、ケータイはいつも利用者の都合のよいように付き合ってくれるため、孤独と向き合う難しさはケータイを通じて楽になる。ケータイはわれわれの感情的なコミュニケーション、用件なしのコミュニケーションを生み出すだけでなく、公共空間での振る舞いを助ける道具になる。レストランや、電車、待ち合わせ場所などでは周りの目がとまらないよう、ケータイが助けてくれる。ケータイを出すだけで、1人ではなくなり安心するのだ。

少しずつ明らかになってきているように、われわれは好きな時にケータイを使うというよりは、空間次第でケータイを利用している。Jenny Weight は時間とケータイについて分析し、次のことを示した。「ケータイ行動はしばしばわれわれが空間をつかの間通り越すことによって形作られている。変わり続ける状況に合わせて、時間は刻まれて、分割され、活動はデザインされる」(2007:162)。

孤独を避けるため、周りの雰囲気から逃げるためにケータイを使う時があるが、疲れをとるためにも使う。電車の中で観察をすると、朝にもケータイを使う人はいるものの、夜になると非常に増える。何もやりたくない、やることがない、時間が早く過ぎてほしい時は、よくケータイを使う。特に、「メールを送りたい」、「ゲームをしたい」などの用件もなく、適当にケータイをいじっている。Weight (2007) は時間を2つに分類している。張りつめた時間(tensed time)と

没頭時間(immersed time)の2つである。張りつめた時間とは過去から、現在、未来へと動く時間：バスや時刻表、旅行のような時間である。それに対し、没頭時間は張りつめた時間を忘れ、その現在という時間に集中しその経験に埋没する時間のことである。没頭時間にいる間、その空間と相互作用しつつケータイの世界にのめりこんで、即時満足するのは、ケータイが可能にした経験であると言えるだろう。

ここに、調査対象者の一日のケータイ利用パターンについて質問したものがあ。調査対象者には「一日のケータイ利用」を時間に沿って簡単に書いてもらった。またメールのやり取りを行なった場所と時間も書いてもらった結果、ケータイの利用がかなり限られていることが分かった。調査対象者の内、社会人が6名、アルバイトをしている人が2名、アルバイトと同時に勉強している人が2名、アルバイトをしている主婦が1名、専業主婦が<sup>55</sup>1名、アルバイトをしていない学生が3名である。

社会人やいくつかのアルバイトを掛け持ちしている人々の場合、平日のケータイ利用、主に朝昼夜という3回の利用が見られる。いくつかの例を紹介する。

表 9 マリさんの一日ケータイ利用 (社会人)

6:15	アラーム Yahoo でニュース メールをチェック 電話
12:30	メール Mixi をチェック
17:35	メールチェック 待ち合わせする友人から電話
21:00	メール ニュースをチェック
23:00	おやすみメール アラームセット ニュースをチェック

表 10 かなこさんの一日ケータイ利用 (OL)

6:30	目覚まし
8:25	写真を撮る
8:30-	友達にメール
9:40	メモ帳 写真 check
12:10	タイマー (お金おろす)
12:50	電卓
18:05	妹、母にメール

<sup>55</sup> かおりさんは専業主婦であるが、料理教室、父親の世話、犬の美容教室などに通っている。

22:00	メモ
3:00	友達へのメール作成、送信予約
3:05	目覚まし set

2人のケータイ利用を見てみると、アルバイトや仕事に合わせて利用しているのが明らかである。朝起きてから会社まで、昼休み中、仕事が終わってからの利用というパターンが見られた。朝の利用は「チェック」という行動が多く、天気予報、乗換え案内、ニュースのチェックが多い。恋人同士の場合、「モーニングコール」やおはようメールのやり取りも起こる。昼は簡単にメールチェック、電話、mixi チェックなどがなされる。夜はメールや電話をし、次の日の天気予報チェック、乗換え案内チェックを行ない、アラームを設定して寝る。（ここの改行を消しました）上記の表で分かるように、ケータイは融通のきく装置であるため、利用は人それぞれであるが、仕事、アルバイト、学校や様々な活動に合わせて利用されるモノなのである。

この1日3回のパターンに対し、仕事場や学校にいながら利用する人もいる。その時は、すでに述べたように、メールが侵入的ではない、つまり公共の邪魔にならないという感覚があるため、メール利用の方が多い。

表 11 あゆみさんの一日ケータイ利用（大学生）

7:00	目覚まし 天気予報 電話の時間をチェック
8:00- 9:40	友達とメール
10:00	友達とメール
12:00	友達とメール
12:30	大学の友達と電話
12:40	大学の友達と電話
12:45	大学の友達と電話
13:00	大学の友達と電話
13:44- 13:55	友達とメール
14:00	mixi をチェック
14:00～	友達メール
17:00	mixi をチェック
20:00	祖母と電話
21:00 21:30	お父さんと電話
23:15- 23:45	友達と電話

あゆみさんの大学では、誰でもいつでもメールをするのが「普通」というコンテキストがある。調査対象者の中では、仕事中ケータイをまったく使わないという人、メール程度はするという人、電話がかかってきたら席から離れて出るという人が多数であった。

「ゆっくりケータイをする」という行動よりは、普段のケータイの利用は二次的であるように見える。言い換えれば、ケータイを使うためにケータイを使うわけではない。その二次性は時間・空間と関連し、タスクの間にケータイを利用する場合は非常に多い。家から駅、また、駅から会社の間のように、移動する時や、タスクの間、時間が区切りの時によく使われるようだ。さおりさんの参与観察では、大学院生のゼミの授業に出た。その時、さおりさんは、机の上にケータイを置き、授業の雰囲気が寛いだ瞬間、体を動かして、ケータイで時計をチェックする。授業前、授業後、ケータイチェックをする。このように、時間の区切りに合わせてケータイを使う。

日常的な空間への適応に関しては、仕事や学校という基本的な活動に合わせてケータイを利用するため、ケータイ利用は限定され、時間の変わり目や、タスクの間にされることが多い。朝はケータイをチェックしてから家を出て、家に帰るまでは基本的には簡単な連絡やチェックを行なうのみである。家に帰って来てからは、ゆっくり電話をすることが可能になり、寝る前に最後のチェック（次の日の天気予報、ニュースなど）と、恋人同士の場合は、お休みメールや電話をして、アラーム設定で一日の利用は終了するというパターンが多い。上記に挙げた3つの利用表からも、午前よりは午後の方が活発に利用されることも明らかである。

#### 4.4 ケータイの置かれる場所

4.3 で説明した公共空間、半公共空間と個人空間によって、ケータイの置かれる場所は異なる。公共空間ではケータイを体の近くに持つ場合が極めて多い。空間の雑音でケータイのバイブが聞こえないため、身体で感じるように持つ。鞆の中にしまう場合も多いが、連絡を待っている時、いわゆる緊急の用事のある時は手で持つ。50代以降ぐらいの男性の場合だと、腰にケースをつけて持つ場合がある。また、ケータイをポケットなどに入れたまま、ヘッドホンで話している人もいる。その大体が男性である。このような人々は、1人で話しているように見えるので、違和感をおぼえるという人も多い。松本さんは長く喋りたい時、特に家では相手に「ちょっと待って」と言い、ヘッドホンを付けて話すという。ケータイを持ち続けるのは身体的には楽ではないため、長くなりそうな電話の場合もヘッドホンを付ける。子供に対してケータイは、コントロールの道具、または母親の安心感を満たす道具である。そのため、子供が好きでケータイを持ち、好きな持ち方をするというよりも、コントロールの手段として、無くさないように首からぶら下げることが多い。そして、公共空間の室内（例えばカフェ）で、特にその空間である程度の時間を過ごすようとしている時には、テーブルの上に置く場合がある。



図 15 公共空間・ケータイ置き場所（左から順に a. b. c. d. e. f. g. h. i. j.）

半公共空間ではケータイはよくテーブルの上に置かれ、またテーブルの上にある財布や他のアイテムの上に置かれることがしばしばあった。その場の「音」、雰囲気やマナーによって、人はケータイの適切な場所を決める。仕事中はケータイのディスプレイが適切ではないと感じ、まりこさんのように鞆の中にしまう人もいれば、さおりさんのように時計として使うために、テーブルの上に置く人もいる。静かな空間だと、テーブルの上に置く際、バイブがうるさくなってしまうので、周りの人を驚かせたり、迷惑をかけたりしないように、柔らかいものの上に置いたり、または座っている時に、足の間や足の下に置く女性も見られた。大学の教室では机の上にケータイを置くのが「普通」として取られている場合が多いが、ほとんどの小学校、中学校と高校ではケータイをしまわなければならない。大学や会社では時計としてケータイを使うことはメールチェックとは違い違反的な行動ではないとみなされて、気楽にテーブルの上に置くことができる。

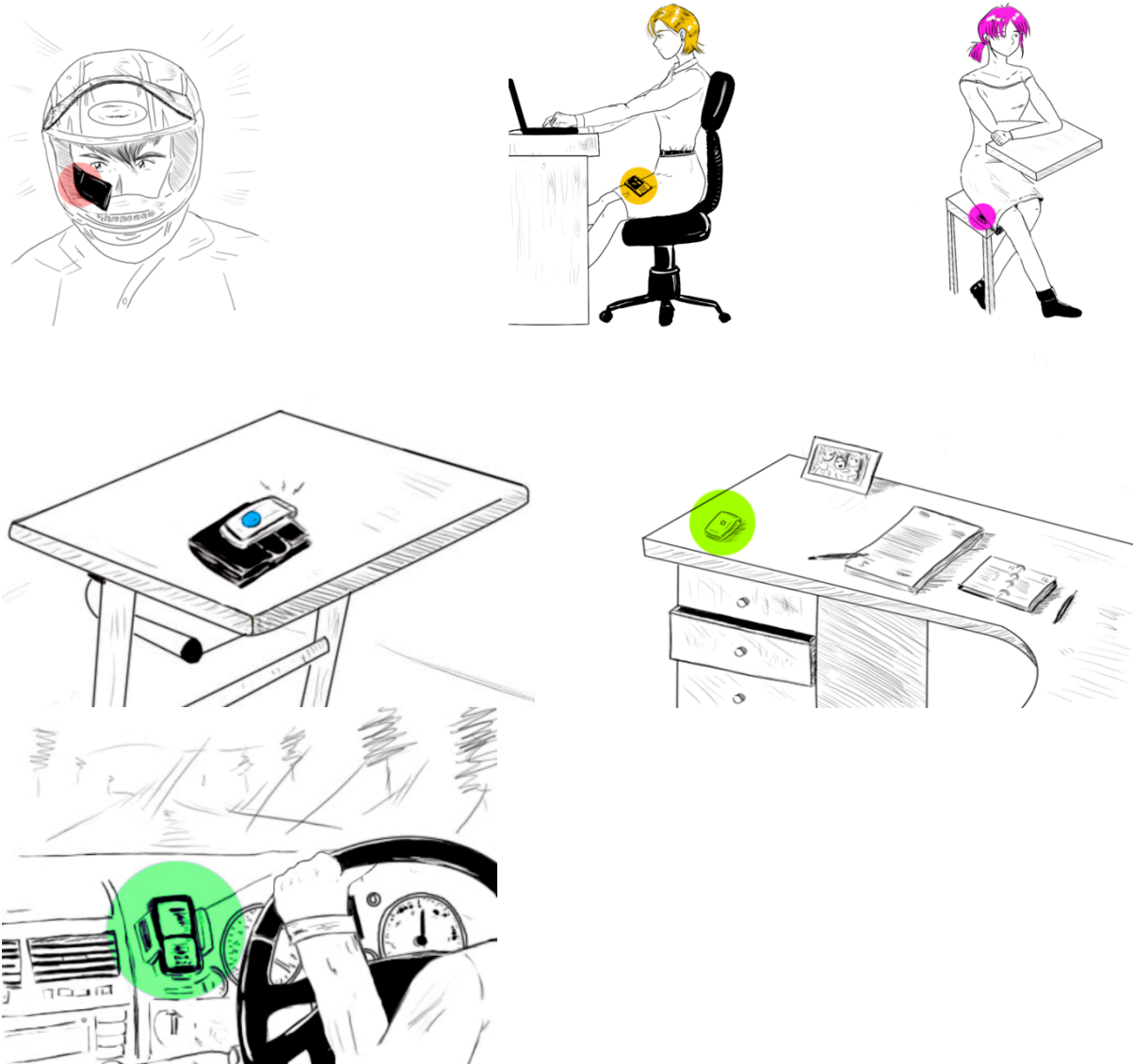


図 16 半公共空間・ケータイ置き場所（左から順に a. b. c. d. e. f.）

個人空間では、ケータイを必ずしも体の近くには持たず、むしろ、取りやすい場所、充電しやすい場所に置くことが多い。あつこさんは、家に帰って着替えたらずぐ部屋着のポケットに入れ、ケータイを手離さないという。また、あゆみさんのように、充電がよくなるため、家に帰ったらずぐにコンセントにつなぐという人もいる。夜はほとんどの人が電源をきらずに、充電をしつつ枕の近くに置いているようだ。かなこさんだけは床の見やすい所に置くようだが、よくなくすことがあるそうで、見つけた時は妹に電話をしてもらおうという。

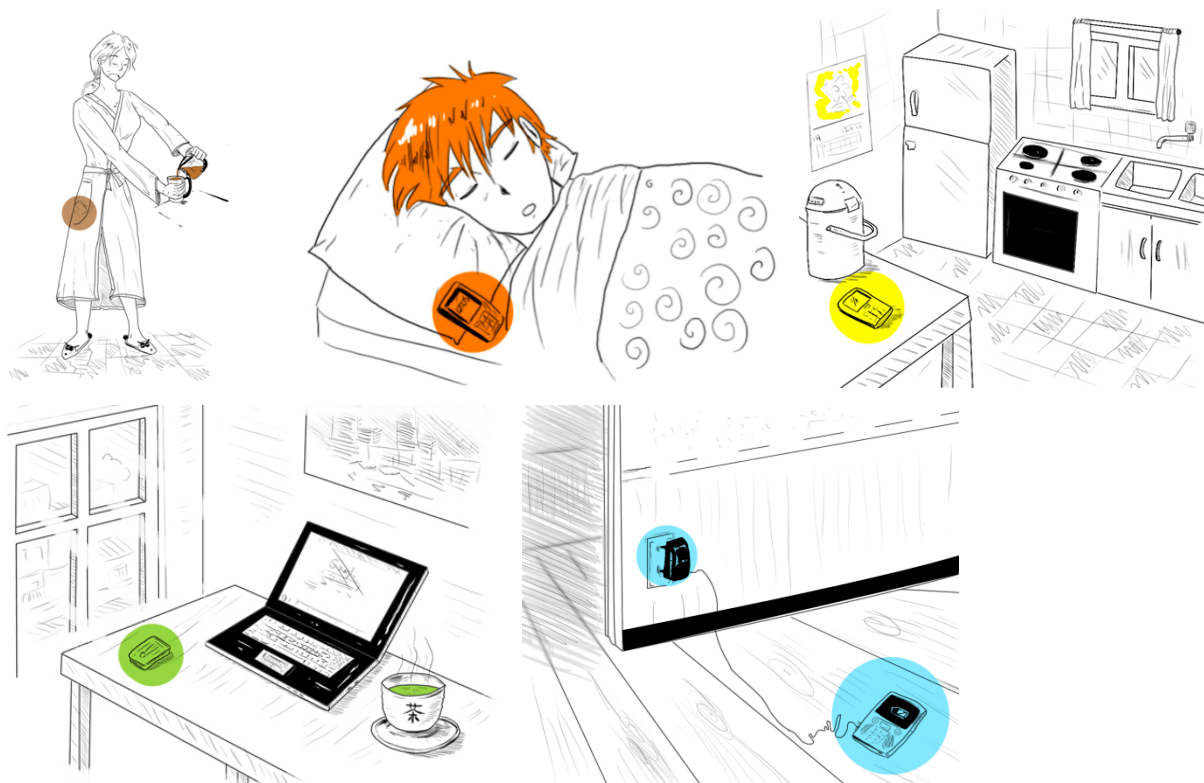


図 17 個人空間・ケータイ置き場所（左から順に a. b. c. d. e.）

#### 4.5 ケータイという空間

ここまではケータイと空間の関係性について述べた。プライベートとパブリックの境界線を区切るかどうかは、利用者が「特定状況」によって判断するというを示した。ケータイは「いつでもどこでも」利用できるという感覚があるが実際はそうではなく、空間により制限されると指摘した。そして、公共空間を規制の空間として取り上げ、そこで人間が公共空間における制限と距離をとりながらケータイを利用し、その利用に対する感覚は、空間と分けて考えることができないと述べた。そして、ケータイ利用の観点から、空間を個人空間、半公共空間と公共空間という3つの空間に分類し、各空間のケータイ利用を説明した。また、1日のケータイ利用のパターンを示し、タスクの区切りに合わせてケータイを使うことを指摘し、最後に、場所によりケータイの置き方や持ち方についても言及した。

先述のように、空間とは時間とセットになった社会現象の場である。空間は物理的な空間と非物理的な空間という2つに分けられる。物理的な空間は字義通り、ある物理的な場で起こる社会現象の場である。例えば、Goffman (1959) は、物理的な空間に基づく相互作用を分析した。それに対し、非物理的な空間とは物理的な空間ではない社会現象の場を指す。Meyrowitz が指摘したように、社会現象は物理的な空間と時間とに限られていない。彼の社会現象は、情報へのアクセスとして分析されていた。しかし、情報というどちらかという固定的なものへのアクセスにつ



いて考えるよりは、相互作用として参加できる社会現象、空間について考察する方が適切である  
と考える。

こういった物理的な空間を本論では、個人空間（住まい）、半公共空間（職業、学校）と公共  
空間（都市空間、戸外の空間）という3つの空間に分類した。「個人空間」、「半公共空間」と  
「公共空間」という言葉にした理由は、その空間における相互作用への参加を空間分類の基本に  
考えたからである。本章では、空間を物理的な空間と非物理的な空間という2つに分類し、物理  
的な空間の中では個人空間、半公共空間と公共空間があるとして分析を試みた。非物理的な空間  
とはケータイという空間である。ケータイというのは人間と一緒に移動する空間であり、順応性  
のある時間(flexible time)の中で個々の社会現象が起こっている空間であると言える。具体的  
には、ケータイという空間は人々が多様な形で（メール、電話など）コミュニケーションをする  
空間である。もちろん、ケータイ以外にも、非物理的な空間はたくさんある。そして、3章で述  
べたように、重要なのは非物理的な空間は必ず物理的な空間と関連しつつ、二重の相互作用  
(two-fold interaction)が行なわれている。すなわち、ケータイという空間でのコミュニケーシ  
ョンと物理的な空間とのコミュニケーションとは同時に起こっている。

ケータイという空間における時間は、単に時間に順応性があるというのではなく、時間という  
モノ自体もケータイ化されていると考えられる。言うまでもなく、時間という一つの意味や単位  
があるわけではなく、それは空間と「特定状況」によって異なるが、ケータイにおけるコミュニ  
ケーションは、混乱した時間枠＝ケータイ特有の空間交渉から成る「時間」の中で成立するもの  
なのである。

では、ケータイという空間と物理的な空間という二重相互作用における、自分の実在と不在、  
すなわち相互作用は交互に起こるのである。Callon (2004) が指摘したように、電車でケータイ  
をいじっている少年は、周りにいる人に自分はシャットアウトしているとケータイで示している。  
彼は遠い空間に同席＝実在しつつ、彼がいる物理的な空間では不在。メディアは主体の実在と不  
在を再分解するのである。

## 5. ケータイ画像における四角形の記憶・不滅の瞬間

これまで、ケータイカメラ利用に関する研究はいくつかなされてきた<sup>56</sup>。特に2004年前後、カメラの利用が始まったころに、ケータイカメラ利用に関するいくつかの論文が出版された。その時、ケータイカメラはケータイに付け加えられたものとして取り上げられた。カメラ付ケータイはまだ普及していなかったため、少数の人しか持っていなかった。日本では、Okabe (2004) が言うように、2000年にJ-phone<sup>57</sup>が最初のカメラハンドセットを販売開始した。その頃はまだ画像の質も悪く、他人と画像を交換するのが、費用の面でも時間の面でも、そこまで簡単ではなかった。しかしながら、現在の日本では、ケータイカメラは単にケータイに付け加えられた付属品というよりも、ケータイの定義そのものに含まれるようになってきた。ケータイにはカメラが付いているのが当たり前になった。ちなみに、「カメラ」と言っても、画像もビデオも撮影できる技術である。

ケータイ研究の中でも、カメラ利用の論文の中でも、実用的「functional」と情的「affective」という分類がよく見られる。例えば、Kindbergら(2004)は、情的(affective)、実用的(functional)、社会的(social)、個人的(individual)という4つの分類を軸に、分析を行った。そして、ケータイ付カメラの利用に関して、いくつかの結論を導いた。例えば、ケータイの画像は、個人的なヴィジュアル・アーカイブとしてとらえられている。公共空間がケータイの画像を通して個人化されるという分析もあり、親しい人の中ではニュース価値のある情報としても位置づけられてきた。それに対して、本論では、実用的な利用と情的な利用という分類に基づいて、詳細にケータイ画像を分析した上で、いつ、誰と、どのようにシェアするか、あるいはシェアをしないかを分析するだけではなく、本章で説明するように、ケータイ付カメラの利用を、身体的な行動として取り上げる。

### 5.1 実用画像

「ケータイのいいところは何ですか」と、調査対象者に聞くと、答えの中でよく「便利」という言葉がよく出てくる。また、ケータイに対する必要性が強く感じられているようである。ケータイが無ければ困る理由は、「人と連絡がとれないから」という答えが極めて多かったが、「今まで重要な連絡がありましたか」という質問に対しては、「ほとんどない」という場合が多い。すなわち、ケータイの重要性が、実用的な必要性よりは感情的な必要性に基づいているといえる。

ケータイカメラの場合も、実用的な利用よりは感情的な利用の方が多い。ただ、実用的な画像は、比較的少ないとはいえ、ほとんどの調査対象者が所有していた。ここから、いくつかの実

---

<sup>56</sup>Ito & Okabe (2003), Kindberg et al. (2004), Okabe (2004), 松田 (2004)、岡部・伊藤 (2006)、Villi (2007)。

<sup>57</sup>現在はVodafone.

用画像を紹介して、その営みの説明をしていく。

やすじろさんは、毎週ギターのレッスンを受けている。彼は、「ギターを教えてもらう時ムービーで手元をよく撮っています」、「私のケータイはビデオカメラみたいです。なぜなら電話よりメールよりムービー機能を一番よく使うからです」と話す。彼はレッスンを受ける際、机の上にケータイを置き、ギターの楽譜の特に難しい部分を先生に弾いてもらい、撮影するという。その後、ケータイのミニSDカードをパソコンに差し込み、大きい画面で観察し、毎日練習をするそうだ。

やすじろさんは例外的にビデオをたくさん撮る方であるが、ほとんどの人はビデオよりも画像の方を撮る。Kindbergら（2004）の論文では、調査対象者の34人中で9人しかビデオ機能付きのケータイを持っていなかったが、その9人が所有していた画像の数は、ビデオ映像の3倍であったという。本研究の調査対象者も、安藤さん以外は、ビデオより画像の方が圧倒的に多い。

実用画像の中で、地図、時刻表、買い物の画像はとても多かった。やすじろさんは紙から地図を映すのではなく、パソコンから地図を撮るという。イベントへ行くため、パソコン上の地図の写真をケータイで撮り、そのイベントへ向かっているとき、撮った画像を確認しながら歩くという。やすじろさんも、よくパソコンの画像をケータイで撮るという。持ち受け画面にしている画像も、ほとんどパソコンからケータイで撮った画像である。



図 18 実用画像（左から順に a. b. c. d.）

先行研究で紹介されている利用の事例として、例えば、バイトの情報、メモの写真（本のタイトルなど）などがあげられる。調査対象者の中でも、佐藤さんは授業の時刻表をケータイで撮っているという。松本さんは工学の授業で先生が黒板に書いた宿題をケータイで撮る時があるという。メモ書きの利用だけではなく、「買い物」に関する利用もよく見られる。Kindbergらの調査対象者達の間では、「買い物」の画像がよく撮られている。買いたいものを撮って利用しているようだ。例えば、贈り物を買う時に「これがいいかな」と思ったら、写真を撮り、撮った写真の中から選ぶ（Kindbergら、2004）。調査対象者の中でも、松本さんは、特に高い物や普段は買わない物を買うとき、比較をしたいため、いくつかの写真をケータイで撮るという。例えば、図 19 a の家具は松本さんが撮った画像である。松本さんは大きいテレビを購入したので、そのための家具が欲しかったという。いろいろ比較してから買ったため、気に入った物をケータイ

写真にしたという。今回は結局、いいものは上記の家具しかなく、比較せずにそれだけを撮った  
 そうだ。かおりさんは買いたいものを撮るのではなく、買い物を頼まれた時、相手にその写真を  
 撮ってもらうという。下の口紅は、かおりさんがハワイへ行く前に、友達に買ってくるように頼  
 まれたものである。



図 19 実用画像（左から順に a. b.）

また、同じくかおりさんが、持っている茶瓶とまったく同じものを買いたかった時、ケータイ  
 で茶瓶の形や茶瓶の下に書いてあったブランドをケータイで撮り、デパートに持っていったとい  
 う。店員にその写真を見せたおかげで、「同じ茶瓶を見つけることができたという。

一方、さおりさんの妹、あゆみさんは、洋服が大好きであり、よく洋服の写真を撮るとい  
 う。ただ、この場合は実用的でも感情的でもあると考えられる。あゆみさんは洋服を見る時、また試  
 着する時などによく姉と相談する。その相談は場合により、電話、メール、写メールという形に  
 なる。以下の例は、メールと電話で行なった洋服の相談である<sup>58</sup>。

### 事例 18 家族同士（あゆみ・さおり）

送信者	送信時間	送信場所	メール
あゆみ 1	13:56	電車	ベアトップで 胸らへんはパーカー生地で淡いピンク 黒いゴムが胸したについてて、その下のスカートはツ ルツルのサテン？生地で斜めに濃いピンクと紺色のラ インがはいってる❤️❤️
さおり 1	14:45	大学	はずかし💜💜 いいね～、かわいいじゃん👀また合コン…笑 欲しかったら買えば～👉
あゆみ 2	15:00	学校	なんか  水色と悩んでるっていったら  今日のあゆみの服装、  水色のと白のライン入ったやつわかる？

<sup>58</sup>上記の洋服の相談は、電話をしながらメールをしていたようだが、電話の録音がないため、メール  
 だけを載せた。

			<p>友達とかぶっちゃった千葉で買ったやつ👜 あれを紺色のジャケット（そで短いやつ）ときててさ👜</p> <p>水色もってるならピンクに挑戦したらどうですか？👄</p> <p>って店員さん（めっちゃキレイなお姉さん）にいわれてさ👜</p> <p>もえもえだったちゃ❤️笑</p> <p>なんでー…</p> <p>でも姉ちゃんに みーせーたーいー</p> <p>ほしい…でも金使いすぎだしさー…ほしい…でも金使いすぎだしさー…</p> <p>あゝー👄👄👄</p> <p>どうしよう…</p> <p>7000円はイタいかな？💔</p> <p>あゝーどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう</p>
あゆみ3	17:38	デパート	<p>買ったかった…笑</p> <p>ピンクです❤️</p> <p>すっきりしました💔</p> <p>これからあんまり遊んではいけなくなりますが</p> <p>土日はひきこもりですが</p> <p>なんも買えなくなりますが</p> <p>お昼は極力買いませんが</p> <p>ランドやシーいけません</p> <p>結局なんもできません</p> <p>今までどうりに生きていきます👜</p> <p>はらへった</p> <p>Mac いきたい👜</p>

さおり 2	17:40	カフェ	なんもすんな🙄やせるかもよ〜笑 帰ったらだらけそうだから、今駅のカフェで論文読んでる〜📖💡 今から帰ってくるとこ？
あゆみ 3	17:53	電車	確かに➡ 今(駅の名前)だからついたら連絡するよ📞

あゆみさんには姉からの支持が重要であり、話し合い、感じ合うのを大事にしているため、洋服の画像は単なる実用的な利用ではなく、実用的でも感情的でもあるといえる。

他の実用画像としては、佐藤さんが仕事用によく窓やドアの画像を撮るそうだ。「仕事で木製の建具の納まりを参考にするため、自分の事務所で実際に設定した現場の写真」を撮ることがあると、佐藤さんはいう。その他には、例えば駅で見かけた展覧会のポスターも撮るといふ。そして、古澤夫妻は、車が壊れた時、壊れた部品の写真を撮って、早くその部品を予約できるように修理会社へ送ったという。やすじろさんは小包を貰ったとき、送り主に対してお返しを送るため、その人の住所をケータイカメラで撮り、その後ケータイを見ながら書くという。

「特定状況」によって実用画像の撮影や利用の仕方は異なるが、実用的な画像やビデオは、主にタスクを遂行するために利用する。実用的な画像やビデオのほとんどは自分が利用するため、覚え書きが多く、他の人には見せない、シェアしない場合が多い。例えば、かなこさんは美容院に行った後の髪の毛の写真を撮り、写真に写っている髪型にあわせて、朝に髪のアレンジをしているという。ただ、他人に送る時もあるが、その人との親しさは関係なく、単にタスクを終わらせるために送る。

実用画像は、Kindbergら（2004）が指摘しているような、個人的なアーカイブとして撮られているようには見えない。むしろ、タスクを遂行した後で消す場合が多い。

## 5.2 感情画像

ケータイで撮るほとんどの画像は実用的ではなく、感情的である。ケータイカメラの感情的な利用はもっと日常的で、即興的である。また、実用画像と違って、感情画像は多様である。ここでは、感情的な画像を5つに分類する。伝統的な画像、瞬間画像、お気に入り画像、思い出画像、「できた！」画像という5つのグループである。

この5つのグループに当てはまらない画像もあるであろうが、観察した画像の中では、この5つの傾向が見られた。

### 【伝統的な画像】

ケータイカメラの伝統的な画像とは、通常カメラで撮るような写真のことである。伝統的なカメラの利用を、ケータイのカメラによってある程度代替している人が少なくない。まりこさんがのように、「ケータイの方が綺麗に取れるから、デジカメは使わない」という人もいる。この

グループの画像の中には、特別な機会の時、例えば、イベント、パーティー、誕生日祝い、観光のような時に撮る画像が含まれる。ケータイのカメラであるからこそ、「そのイベントがあるからカメラを持って行く」という行動がなく、逆に、観光に行かなくても、観光地の近くを偶然歩いていたら写真を撮ることもある。すなわち、普通のカメラの伝統的な利用に、移動性というケータイカメラの特徴を加えた利用がなされている。このグループの写真には、家族や友達がよく映っている。

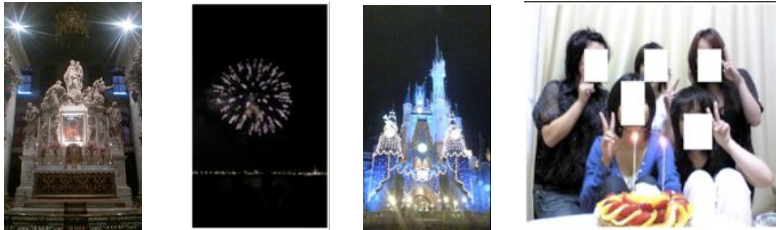


図 20 伝統的な画像（左から順に a. b. c. d.）

家族や友達の写真以外では、ディズニーランドの写真や花火の写真も多かった。また、海外旅行の写真も時々あった。例えば、松本さんは彼女のマリさんと一緒にイタリアに行った時、きれいな教会の写真撮ったそうだ。その画像はケータイの待ち受け画面にしているという。イタリアにはデジカメを持って行ったので、デジカメでも写真を撮ったが、いつでも見られるようにケータイでも写真を撮った。

誕生日会の画像も、しばしば見られた。図 20 写真は、あゆみさんの友人の誕生日会の画像である。あゆみさんは以下のように説明する。「これは〔実家の地名〕にいる地元の友達が東京に遊びに来てくれた時にその子の誕生日をお祝いしたときの写真です。みんなで会うのは久しぶりで〔実家の地名〕に帰らないと会えないので、会えて嬉しくて撮りました。大切な写真です。」

友人との時間や経験の記念として残る画像は、他の人とシェアすることも多い。撮った「その時」に、または少し後で、画像に映っている友達などに写メールで送ったり、他の人に見せたりする。だいたい写真を撮ってから一週間以内にシェアするが多い。この画像は、相手と会った時の記念として撮るが、家に帰って写真をシェアする時間は、会ったその時間の「延長」となり、友人関係は維持され、強化されるといえる。

### 【瞬間画像】

「瞬間画像」は、名前通り、ある瞬間に撮った画像である。ある空間において、楽しいモノ、レアなモノ、可笑しいモノなどを見つけたときに撮る画像である。この画像のほとんどは公共空間で撮られている。撮っている時には「誰かに見せたい、シェアしたい」という気持ちで撮っているようだが、写メールになる場合は少ない。Okabe (2004)が指摘するように、メールよりは画像の方が「押しつけがましく」感じるため、遠慮しがちである。



ただ、観察を行なってみると、ケータイを常に持ち歩いている人々は、ケータイを持っていることすらも意識せず、ケータイを使う行動自体が非常に当たり前であるため、その使い方はとてもいい加減であることが分かった。瞬間画像の場合、撮っているその瞬間は「シェアをしよう」と思っても、忘れることが多い。別の日にケータイにある画像を見れば、撮影したことを思い出す、その時にはすでにシェアするには遅い、またはシェアする気持ちがなくなっているため、メールにしないことが多い。しかし、アルバムとしてシェアすることは多い。ケータイのスクリーンを他人に見せながら話し合うというシェアの形である。

画像は確かにビジュアルなものであるが、見るためのものだけではなく、話し合うためのものである。アルバムとして画像を見せる時、写真を撮った人が、写真について説明したり、見ている方が質問したりするのは当然のことである。つまり、写真はビジュアルなメディアだけではなく、「座談メディア」であるといえる。ケータイをアルバムのようにシェアする時、ケータイを友達に見せたり、ケータイ自体を回覧したりする。アルバムを見せるという行為は非常に気楽である。実際の写真のアルバムの場合、特定の場に持って行って誰かに見せる場合が多いが、ケータイの場合はすでに持っているから、ふとしたことで撮った写真を思い出した時に、その場で見せることが多い。ただ、友人に見せるのが普通であるようで、距離のある人にはなかなか見せないようだ。

すでに言及したように、「瞬間画像」の中には、レアな、可笑しい、面白い写真が多い。以下、調査対象者が撮った「瞬間画像」の紹介をし、その時の「特定状況」を説明する。



図 21 瞬間画像（左から順に a. b. c. d.）

佐藤さんが道を歩いていたとき、兄と似ているポスターを見つけたので、写真を撮って、兄に写メールしたという（図 2 1 a）。かおりさんは、園芸農家で偶然ヤギと出会い、楽しかったので、写真を撮ってもらったという。画像では、ヤギはかおりさんのお尻に顔を近づけている。その他の画像としては、例えば、さおりさんは大学で一緒に学祭の準備をした友人達の画像を撮った。学祭が成功し、興奮したままファミレスで朝まで話して、明け方にみんな眠ってしまったときに撮った写真で、「この写真を見るとみんなで準備をした思い出がよみがえります」と話した。同じくさおりさんは、面白い「特定状況」を画像にし、以下のように説明している。「私の家で友達と鍋をしたときに撮った写真です。大根のぬいぐるみと同じ顔を、本物の大根に描いて、写真に撮りました！笑いすぎて、料理をはじめるとすごく時間がかかりました。待ち受け画面に



して、次の日大学で会ったほかの友達に見せたり、妹に送ったりしました。」ぬいぐるみの画像と、ぬいぐるみの顔にした本物の大根の画像は、2枚撮影したようだ。かなよさん、かなこさん、まりこさんの親子も、面白い「特定状況」を画像にした。かなこさんの父が居眠りしている時、かなこさんが写真を撮り、ケータイで加工したものを姉と母に送り、それぞれが親しい人に見せて楽しんだようだ。「笑ったのは父親の居眠りしている写真を姉が加工して送ってきたこと。かわいそうな父親です」とまりこさんは話し、母のかなよさんは「すごく怖くてすごく笑ってしまいました。夫の顔があんなになるなんて…かなこからもらったメールです。笑うより怖かったかも……」と語った。

かなこさんは、他の画像と違って、特別な画像を作成している（第19画像）。調査対象者の中で写真を編集しているのは、かなこさんだけである。この場合は、面白い経験、瞬間、モノを見つけて撮るだけではなく、ケータイを使って画像を面白くするというやりかたであるが、家族の間でのみシェアをするという。

他の瞬間画像として、例えば、佐藤さんは友人とお茶を飲んでいる時に虹がみえたので、画像を撮ったことがあるという。また、福岡でかなり大きい地震が起きた時、佐藤さん宛に、友人からごちゃごちゃになった家の画像が送られてきたという例もある。

瞬間画像を写メールにする時は、撮った瞬間のすぐ後に写メールにする場合が多い。写メールになった瞬間画像の一つの例を紹介する。



図 22 瞬間画像

松本さんは、授業中で彼女にメールの返事を送れなかったため、大学でバイクに乗る前に返事をすることにした。メールの返事をしようとしたら松本さんがかぶっているヘルメットに、ウグイスが飛んで来た。この画像は、次のメールに添付された。

### 事例 19 恋人同士（松本・マリ）

送信者	送信時間	送信場所	メール
松本 1	17:58	学校	授業終わった～👉 雨降らなくてよかったね😊 今日は早めに帰ってウチでレポートやりまーす🎵

			<p>なぜかターミネーターと Rookies のメンバーが混ざってる夢を見ました。🐱</p> <p>←Rookies も遂にハリウッド化か🤖笑</p> <p>テストヤバイよ～😓</p> <p>実験が普通にあるからめっちゃキツイと思う🤖</p> <p>まあこのラブラブな夏休みに向けて頑張ります🤖</p> <p>死ぬほど愛してます🐱</p> <p>てか今このメール打ってる時にもの凄いことが起きた!!!!!!!!!!!!!!</p> <p>なぜか「ウグイス」が俺のかぶったメットに体当たりしてきました🤖🤖🤖🤖</p> <p>あまりにもミラクルだったから写メしちゃった🐱</p>
マリ 1	20:28	家	<p>(前略)</p> <p>ウグイス可愛い!! 🐱</p> <p>しかもまあの大好きな緑色でちょー羨ましい🤖</p> <p>(後略)</p>

「瞬間画像」はしばしば保護され、写メールになる。あるいは、アルバムとしてシェアされる。このような行動には、日常の面白い独特な瞬間を撮っておきたい、シェアしたいという気持ちが強くみられる。

### 【お気に入り画像】

「お気に入り画像」というのは、ある空間の何かを見て、「かわいい」とか「気になる」と感じた時に撮る写真で、他の画像に比べてこだわりの写真が多い。この中では、食べ物、動物とペット、植物と景色と赤ちゃんなどの写真が多く見られた。その他に、モノの写真も時々ある。ここでは、「可愛さ」に重要な役割があるように思う。可愛いモノを見つけた時に、よく写真を撮

る。「可愛い」という言葉は、日本語ではよく使われるが、意味が薄くなってきているのではないだろうか。『大辞泉』によると、「可愛い」は、「①小さいもの、弱いものなどに心引かれる気持ちをいなくさま。②モノが小さくできていて、愛らしく見えるさま。」として定義されている。しかし、コップでもなんでも「可愛い」と言えるような感覚が強いと感じる。

調査対象者の間では、動物（特に犬と猫）の画像と食べ物の画像が一番よく見られた画像である。調査対象者の中では、松本さん、あつこさん、古澤さんと古澤かおりさんが犬を飼っている。かなよさん、まりこさんとかなこさんも長年犬を飼っていたが、数年前に亡くしている。やすじろさんはペットを飼ってないが、近所で彼になついている猫が非常に多い。調査対象者を募集したとき、ペットの有無については質問しなかったため、調査対象者と動物の関係は偶然である。

ペットを飼っている人は、ペットの写真をたくさん撮影している。ペットが眠っているところ、遊んでいるところなどの写真が多い。ペットを飼っている人達のケータイには、ペットが重要な役割を持つ。ペットの写真は必ず何枚かあり、よく持ち受け画面にする。ペットの写真は、他の「お気に入り画像」とちがって、個人空間で撮影される画像である。



図 23 お気に入り画像・ペット（左から順に a. b. c.）

調査対象者の中では、例えば古澤夫婦はよくペット（図 23 a）の画像を撮るようだ。かおりさんにとって、犬は極めて重要な存在である。犬の散歩をしてから、新しい友人がたくさんできたという。かおりさんは、こうした友人を「犬の仲間」と呼んでいる。そのうちの多くが近所で犬を飼っている人達であるようだ。かおりさんは、毎週日曜日「犬マナー教室」に通い、犬のマナーにはとても力を入れている。参与観察を行なった時も、犬に餌をあげるとき、かおりさんの「待て!」という支持に、犬はちゃんと従っていた。また、彼女が「はいどうぞ」と言うめで、犬は食べ始めなかった。また、この犬は美容コンテストにも参加してきたようで、最後のコンテストでは二位に入賞したという。古澤さおりさんは友人と一緒にペットを購入し、友人はさおりさんが飼っているペットの兄弟を飼っているので、ペットの誕生日には、誕生日おめでとうメールを互いに交換しているようだ。

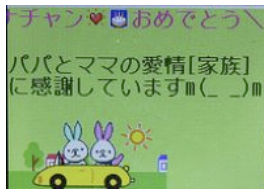


図 24 犬のお誕生日メール（左から順に a. b.）

その他に、松本さんもよくペットの画像を撮るそうで、やんちゃな犬の姿を「たまに見返して、ほほえましくなります」と話す。かなよさん、まりこさん、かなこさんの親子は、亡くなった犬の画像をたくさん集めていて、よく3人の間で写メールにしているようである。犬が小さかったころの写真は、まだケータイがなかった時代だったため、印刷したカメラの写真の写真をケータイで撮って保存しているという。

ペットでだけではなく、動物の画像も非常に多かった。調査対象者の中では、例えば、ギタリストのやすじろさんは猫に対して強い愛情を持っているようだ。彼は近所の猫に餌を与え、可愛がっていて、なついている猫が非常に多いようである。猫のおかしな姿や、集まっている猫も、すぐ撮りたくなるようである。その他に、かおりさんやかなこさんもよく動物の写真撮るようだった。

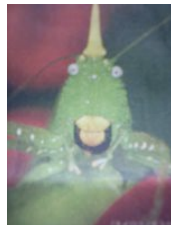
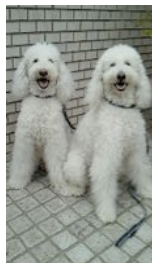
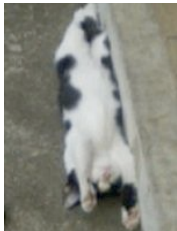


図 25 お気に入り画像・動物（左から順に a. b. c.）

動物の画像とともに、食べ物の画像も一番多い。特に、「可愛くて美味しい」画像は、女性と密接な関係があるように見える。「可愛い」場合、例えば動物や赤ちゃんなら、女性でも男性でも撮るが、「モノ」の場合は、女性の方が撮るようだ。東京では、パフェの店に行くと、若い女性が食べる前にケータイを出して、必ずパフェを撮るという姿を何回も見たことがある。また、30代の女性達の中には、そのような食べ物画像を撮ってブログにしている人もいる。このようなブログは盛んのようなのである<sup>59</sup>。画像を見てみると、女性と食べ物の関係は強いように見える。女

<sup>59</sup> 調査対象者の中で、佐藤さんだけはケータイからブログをしているが、友人に読んでもらうブログではなく、自分のためのブログである。ただし、甘いものをたくさん載せて語るタイプのブログではない。

性だけが美味しそうな食べ物をケータイで撮る論理的な理由はないが、社会的に構成された女性のイメージとして、「御飯を作っている」、「御飯を楽しんでいる」、「特に甘いものが好き」といったものがある。こうしたイメージは、東京に限られたものではないのであろうが、東京に住んでいる私はよく感じる。逆に、男性が、特に公共スペースでは、甘いものを食べてはいけないといった思い込みは何度も耳にしたことがある。

調査対象者の中で、食べ物の写真を撮っていたのは例外なくすべて女性であった。特に、かなこさん、さおりさんと佐藤さんは、よく食べ物の写真を撮るといった。



図 26 お気に入り画像・食べ物（左から順に a. b. c.）

さおりさんは次のように話す。「一番よく撮るのは、食べ物の写真です。見た目がきれいかわいなお菓子やケーキの写真を撮って、待ち受け画面にすることが多いです。なにかの記念日や誕生日に食べたものや、手作りのものを、思い出に撮ることもあります」。

さおりさんが撮った画像は、例えばハンバーガーとポテトの形のドーナツ、大学の卒業記念に友人とディズニーランドに行ったときに食べたケーキ、友人の大学院合格祝いに作ったケーキなどである。

その他の「お気に入り画像」として、自然、景色の写真も多かった。この場合も、調査対象者の中では女性の方が撮っているように見えた。しかし、東京の日常を観察していると、時々、例えば東京大学の秋のキャンパスを撮っている男性なども見かける。また、古澤さんも景色の画像を撮っていた。景色の写真は美しさに関連し、眺めで魅力を感じた時に撮る写真である。

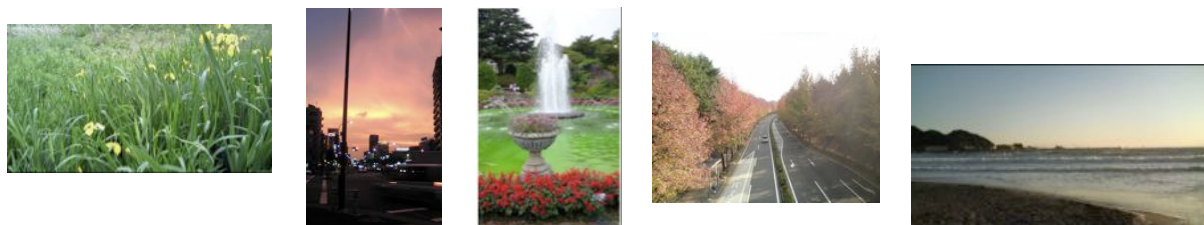


図 27 お気に入り画像・景色（左から順に a. b. c. d. e.）

かおりさんは花や植物をよく撮るといふ。かおりさんは、季節に合わせて待ち受け画面の画像

を変えるそうだ。あつこさんはデジカメを利用し、ケータイはあまり使わないようだが、第26画像に関しては次のように話している。「いつも見慣れた空が夕焼けでとてもきれいだったので撮った。とても感動したので、忘れたくないなと思い歩きながら撮った」。図27cは、マリさんが箱根で撮った画像である。マリさんは、「箱根のバラ公園で撮った写真です。とても綺麗に撮れたので今でも待ち受けにしています」と話す。かなよさんもよく景色を撮るそうだ。綺麗な景色をみた時、特別な場所に行った時や、家の前のいつでも見ることのできる風景でも撮る。最後の画像は古澤さんが撮った家の近くの景色である。

他のお気に入り画像として、例えば梅村さんがお台場に行った時、大きなガンダムの模型が展示されていたので、写真を撮って友達に見せたという。梅村さんは「かっこいいから撮った」と話していた。

### 【思い出画像】

「思い出画像」とは名前通り、思い出として撮る写真である。嬉しい時、満足した時、幸福な時に撮る写真である。貴重な特定の時間を思い出として撮影し、その後1人で繰り返し見ることが多い。

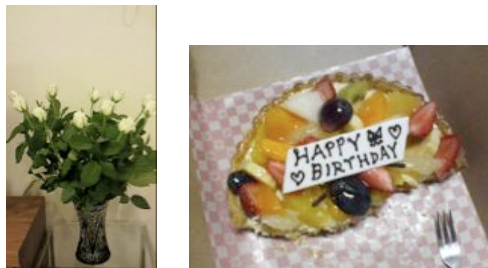


図 28 思い出画像（左から順に a. b.）

調査対象者の中では、例えば、かおりさんは、誕生日に夫にもらったバラを、思い出として撮ったという。また、佐藤さんは茶道を習っているが、佐藤さんの誕生日の時に、茶道の先生にもらったケーキの画像を思い出に撮ったという。「1人で食べていいよと言われて喜んで半分食べたところの写真」と佐藤さんは説明する。そして、さおりさんも、食べ物の画像を思い出に撮ることがあるという。特に記念日や誕生日に食べたものや、手作りのものを、思い出に撮ることが多いという。

### 【出来た！画像】

「出来た！画像」は何かが出来上がったとき、苦勞をした後に撮る写真である。写真を撮ると、ある程度その苦勞が具体化される。また、「できた」ことが信じにくいときでも、「本当にできた」という嬉しさが、写真にすると実感できる。この写真は普段シェアしない写真で、自分のた



めの画像である。

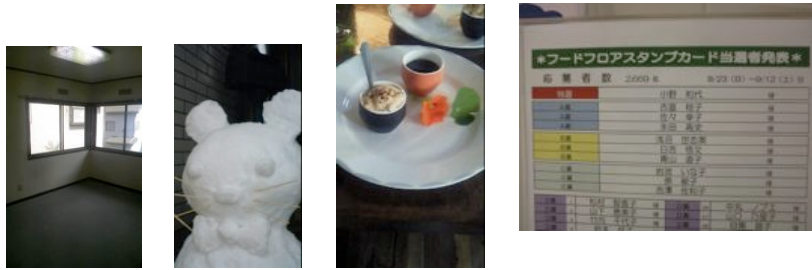


図 29 できた！画像（左から順に a. b. c. d.）

松本さんはきれい好きで、時々、彼の部屋の全ての家具を取り出し、掃除して、元に戻すという。その掃除が終わった後に写真を撮るといふ。また、あゆみさんは、姉のさおりさんと実家に帰ったときに、「雪がたくさんあるのが楽しくてふたりでねずみだるまを作った」ときの様子を写真にした。その他にも、佐藤さんは、富士山に登った時に画像を撮り、さおりさんは大学院の一次試験に受かったとき、掲示板に貼ってあった試験の結果を画像にした。さおりさんは、「試験が難しく、落ちていると思っていたので、ほんとうに嬉しかったです。二次試験の結果発表では、合格に驚いて写真も取り忘れました」と話す。かおりさんは、専業主婦であるが、たくさんの活動をしている。週に一回料理教室に通い、毎回料理が出来上がるとケータイで写真を撮るといふ。そして、図 29 d の画像は、かなよさんが撮った画像である。かなよさんは、福引きで 2669 人の応募者の中で、1 万円分の刺身が当たった時、2 人の娘と一緒に、ケータイで写真を撮ったという。画像が小さくて見にくいですが、赤い所に「特選」と書いてあり、かなよさんの名前が書いてある。

### 5.3 画像を撮る身体

本章では、ケータイでどのような写真が撮られているのかについて分析してきた。おおまかかに、写真のタイプは 2 つある。(1)「実用画像」と(2)「情的画像」である。実用画像は「便利」だから撮られている写真であり、タスクを遂行するために撮る写真である。その中では、地図と時刻表が多かった。また、買い物、メモ書きの利用もよく見られ、その他もっと個人的な利用も見られた。実用画像の場合、ほとんど自分で利用するための画像であり、シェアしない。

「実用画像」に対し、「情的画像」は表現的な画像であり、「キレイ」、「かわいい」、「おもしろい」、「感動した」などの理由で撮られている画像である。「情的画像」は 5 つのカテゴリーに分けられる：伝統的な画像、瞬間画像、お気に入り画像、思い出画像、出来た！画像というカテゴリーである。伝統的な画像は、デジカメでの写真の代替として撮られている写真である。すなわち、特別なイベント、観光、お祝いのような時に撮る写真である。瞬間画像はある瞬間に見たことや起こったことの写真である。おかしい物、レアな物や状況の写真が多い。瞬間画像は

ケータイがあるからこそ撮れる画像である。お気に入り画像はその通りで、好きなものや、こだわりのあるもの画像である。ここでは、女性の場合、食べ物をたくさん撮る傾向が見られた。そして、ペットを飼っている人々は、よく自分のペットの写真を撮り、待ち受け画面にする。「思い出画像」は記念や特別な時思い出に撮る写真である。最後に、出来た！画像とは、ある行動を完遂した時に撮る画像である。また、運がよくて何かが当たった時や、難しいことが出来た時に撮る写真である。

さて、写真の分析をしつつ、シェアするかどうかの説明も多少してきたが、もう少し「シェア」という行動について考えてみたい。調査対象者の行動を観察した限り、写真をシェアする形はいくつかあった：写メールで、PC メールで、人と一緒にいる時写真アルバムのように、ケータイ画面から、ケータイを回覧しながらのシェア、ブログにアップロード、そして最後にシェアしないという行動があげられる。Okabe (2004) と岡部・伊藤 (2006) が指摘するように、画像はメールより押しつけがましく感じられているようである。人を撮る場合、その画像に写っている人々に、すなわち、撮影の経験を共有した人々に、その「特定状況」を延長する意味で写メールを送るが、そうでなければなかなか送らない場合が多い。写真は友人や家族の間でシェアする場合が非常に多い。一方で、実用的な写真に関しては、タスクを遂行する目的で撮られている画像であるため、親しくない人とでもシェアする場合がある。そのため、送り手と受け手の親密度は二次的な要素となる。

画像の一つの特徴は「原始性」である。特に「お気に入り画像」の中には、自然、食べ物と動物が多かった。人間はなぜか原始的な様子を撮る場合が多い。その一つの理由は欲望であると考えられる。原始的なレベルで単に「気持ちいい」というのは、食べること、自然を見ることなのであろう。その意味で、動物、人間、植物、景色、食べ物はすべて有機体であり、感覚的に写真を撮りたくなるようである。それはケータイがあるからこそ気づいたことであらう。矛盾적이かもしれないが、ケータイという装置は、われわれの有機体へのこだわりを意識させているのではないだろうか。

実用画像以外では、情的なケータイ画像が撮られる。自分の人生の経験、人とのつながり、お気に入りの景色、食事などが、画像として残されることによって、その一瞬一瞬は、不滅のものとなる。

ケータイととても関連している画像の1つは、プリクラである。プリクラは、ケータイで撮っている画像ではないため、画像の分析の方に入れてないがプリクラとケータイの繋がりをはっきりしているように思う。多くの調査対象者は、中学時代や高校時代、ケータイにプリクラのステッカーを貼っていたという。プリクラ<sup>60</sup>の画像は友人同士を結びつけ、友情の絆を具体化する。

---

<sup>60</sup> Okabe, Ito, Chipchase, & Shimizu (2006)はプリクラの分析を行なった。彼らによると、プリクラは女性が行なうプラクティスであり、ケータイカメラと違って、人だけを撮影する。友達やカップルのつながりを撮り、画像はしばしばケータイやパソコンに送られるという。



数年前から、プリクラの機械で撮った画像をケータイに送信できるようになったため、現在、ケータイにプリクラを貼るだけでなく、写真として保存し、何回も繰り返し見たり、待ち受け画面にしたりすることも可能である。調査対象者の中でも、片岡さんが、つい最近まで中学時代の友人とのプリクラを待ち受け画面にしていたという。

先行研究では、ケータイカメラ利用はどちらかというと視覚的な経験として取り上げられている。確かに視覚的な経験ではあるが、ケータイカメラの経験は非常に触覚的でもある。ケータイカメラで画像を撮るという経験は、身体的な経験である。ある「特定状況」において、身体が空間と時間、ときには他者と相互作用をしながら生じる現象である。

本章では、調査対象者が撮った画像の分析をし、いくつかのカテゴリーの説明をしたが、画像には言葉で説明できない部分、カテゴリーにできないところが、どうしても出てくる。調査対象者に画像に関して尋ねると、上手く表現できない場合が多い。写真を撮った理由として、「撮りたかったから」、「キレイだったから」、「可愛かったから」、「感動したから」などがあげられるが、「別に」、「あんまり意味がない」といった発言も多い。このような発言は、ケータイカメラに限らず、メールの場合でもある。また、例えば、かなこさんがいうように、「ある理由で写真を撮るよりは何でも撮る」という人もいる。画像を撮る理由を上手く語れない、また、シェアのために撮ったかどうかをはっきり言えないのは、自然に、自発的に写真を撮っているからである。われわれは自分達の身体を動かすのと同じように、ケータイカメラを出して写真を撮る。歩く時に、足を一歩ずつ前に出して歩いている意識がないのと同じように、感覚的には、ケータイカメラを通して写真を撮る時も、その行動を意識していない場合が多い。カメラは身体の一部のようなもので、人々は知覚的に写真を撮っている。ケータイカメラの経験は視覚的だけではなく、触覚的でもあると指摘したい理由は、ここにある。

ここで、Cooley (2004) の概念である「フィット」を紹介したい。フィットとは「手とケータイ画面の特有な関係を出来事として定義している言葉である。その出来事は、手がケータイ画面を形作り、ケータイ画面が手に入り込む瞬間に起こる。従って、フィットとは、状態や特徴ではなく、むしろ行為の瞬間であり、ダイナミックな、相互の連動の可能性があらわになる瞬間である。手とケータイ画面はむすびつくと手の平とケータイ画面は互いを形成し、互いに貫通しあい、手と装置は一つになる」(2004 : 137)。

本章で示したように、ケータイでの画像は多様である。「伝統的な画像」は、普通のカメラで撮る写真の延長上に位置づけることができる。しかし、「実用画像」、「瞬間画像」、「お気に入り画像」、「思い出画像」、そして「出来た！画像」は、すでに身体の一部となったケータイが可能にした、新しい写真撮影の仕方であり、空間、時間、人間の間で生じる知覚的な出来事である。

ケータイは、人、場所、モノの関係を強化し、写真の新しいシェアのしかたを形成し、「画像」の意味自体を再構築するだけでなく、われわれに自らの知覚を意識させる。

画像を撮るという行動は身体的な行動であり、感覚と関わる行動である。ただ、この行動を内省的に振り返ってみると、何が面白いのか、何が美しいのか、何が気になるのか、どのような時間、記念、思い出が重要なのか、なぜ笑うのか、なぜ気持ちいいのか、といったことに気づかされる。そして、画像をとおしてわれわれの経験は不滅のものとなる。画像を撮るという行為を通して、何が記憶に残るのか、何が残らないのかを決めるのである。

われわれの世界での在り方、世界の見方は新しく形成される。われわれは、ケータイの5x4程度の画面から空間を観察し、5x4の四角形に切りとる。そして、それが記憶になる。ケータイは記憶を形にし、気晴らしの画像時間を可能にし、気晴らし画像時間でよく懐かしさを感じさせる。ケータイは記憶を形にし、保存する。これは、気晴らしに過去の画像を眺める行為を可能にし、ケータイの利用者は画像を眺めて懐かしい思い出にひたることもできる。その意味で、ある特定の時間に、特定の場所に身体的にいても、ケータイを持っているかぎり、さまざまな過去の時間、場所と状況に対して、内省的になることが可能になった。

つまり、ケータイで画像を撮る際、公共空間を私的にするとか、画像のアーカイブを作るというよりは、身体を動かして、感覚的に、気軽に画像を撮る。撮った画像は記憶になり、不滅のものとなる。ポケットに自分の人生がつまったアルバムを持つように、ケータイが記憶の集合になるといえるだろう。

## 6 ケータイと身体

社会学の中では、身体が様々な側面から分析されてきた。Shilling (2005, 2007) が指摘しているように身体に関する研究の大きな流れは5つあると考えられる。1つ目は消費文化における身体に関する研究である。すなわち、消費としての身体は自分のアイデンティティに強く関わる。2つ目はフェミニストの観点からの身体だ。女性の身体だから差別されるという構造は自然ではなく、ここでの女性の身体とは家父長制社会に定義されたものである。3つ目は統治に関わる身体である。身体は多様なコントロール、公的・法的にもコントロールされる対象であるという研究が含まれる。4つ目はテクノロジーの進化による身体の研究だ。そこでは、人間はサイボーグとして取り上げられる。

Marcel Mauss が指摘したように、身体技法は、各文化や社会の伝統によって異なる。身体は自然な動き方がなく、人間になるには身体技法を習得しなければならない(Mauss, 1971)。身体には特徴や動きは周囲の人や文化によって形成されているが、モノによっても形成されている。人はモノに合わせて体を動かすが、同じモノでも文化によって違った持ち方をする場合も多い。そこでは、ケータイが身体をどのように動かすのか、身体がどのように適合しているのかについて考えたい。

本章ではケータイというテクノロジーと身体について分析していく。最終的にはサイボーグという概念を考察したいが、その前に、第4章で説明したように物理的な空間でケータイがどのように身体を動かすのかについて具体的なレベルで述べる。そして、表情をアフォードする身体について述べてから、身体の動きがどのようにケータイに提起されるのかについて語る。最後に、ケータイと身体の融合に関して、前述したサイボーグの概念から考察を試みる。

### 6.1 ケータイをめぐる身体の動作

第4章では物理的な空間を、公共空間、半公共空間と個人空間の3つに分けた。これらの空間によって、ケータイ身体の行動は異なる。本章では、これらの空間ではケータイによって身体の動きがどのように変化するのかについて説明する。個人空間と半公共空間で観察するのは難しかったため、公共空間を中心に身体の動きを観察した。身体所作の分析をするため、今までの調査対象者ではなく、渋谷でケータイを使っている人達をビデオで撮影したデータを中心に分析した。

個人空間では、周りの目がない限り、寛いだ身体の行動が多い。恋人同士の夜の長電話は、よくベッドの中やソファの上で寛いだ時に行なわれる。また、松本さんは、部屋で長電話をするとき、楽に話すためにヘッドホンを付けるという。個人空間は、身体が一番慣れているスペースである。そして、自分のスペースであるため、同時に沢山のことができる。パソコンのチェック、部屋の整理、食事の準備などである。個人空間の場合はよくケータイを利用しながら、ケータイのアフォーダンスであるモビリティを通じて他の行動を同時に行なう場合が多い。つまり、個人

空間は身体が一番落ち着く空間であり、ケータイの利用をしつつマルチタスクをこなす場合が多い。

半公共空間ではしばしばケータイの利用が認められていないため、身体を丸くしつつ、ケータイの利用を身体的に隠すことが多い。例えば、机の下にケータイを持ち、メールを打つといった行動が見られる。また、あつこさんのように、仕事中に電話がかかってくると、椅子から離れ、手を口の前に置き、多少プライバシーのあるスペースで話す。半公共空間では、恥ずかしさや「悪いことをしている」という気持ちを身体的に表現する。身体の動きや移動によって、利用者はある種のプライベートスペース（端っこに移動して話す、机の下にケータイを隠すなど）を構築する。半公共空間は、一番身体が落ち着かないスペースであり、自由度の少ないケータイ利用が身体的に表現される。

公共空間では戸外と室内により身体の動きが異なる。戸外ではケータイが身体を動かすパターンをいくつか観察した。特に通話の場合は、よくケータイが身体を動かす。動きの例の一つは、身体的にいるスペースの片側から反対側の方に直線に4メートルくらい歩き、戻るといったものだ。その歩き方をしながら、ケータイに集中するために、立ち止まる時もある。

待ち合わせ場所で、相手がその場にいるかどうかの確認をしつつケータイをいじる時や電話で話す時は、どこへ行けばいいのかがよく分からないため、身体で円を描くように歩き、また、目は場所を探すため、きょろきょろといくつかの違う方向を向く。また、急に身体の方向を変える時もある。中には、ケータイで相手とコミュニケーションを取っているのではなく、ケータイ電話で地図を見ている人もいる。その時は、ある程度の長い時間立ち止まって、地図をしっかりと確認してから歩き出すという行動を何回か繰り返す場合が多い。

そして、戸外の公共空間では、しゃがんだままケータイを使う姿もよく見かけた。若者の場合は、暇つぶしの様相でしゃがんでケータイをいじっている。また、公共空間でケータイで話した内容を紙にメモする場合なども、しゃがみこむことが多い。酔っ払いもよくしゃがんだままケータイを使う。また、聞きにくい時はしゃがみながら、あいている耳を手でふさぐ時もある。

最後に、ケータイカメラを利用する際は、撮りたい対象に合わせて、身体を非常に創造的に動かすということは5章で指摘した通りである。

公共空間の室内でケータイを使って通話をする際は、雑音を防ぐために、口を手でカバーする場合が多い。そして、静かな室内では身体を丸くするなどしながらプライベートなスペースを作ってから、ケータイをいじったり、話したり、あるいは、しゃがんだままケータイで話すといった行動が見られた。室内公共空間では、座ったままケータイをいじったりや通話をしたりする時の、ケータイに対する身体の動きが限られているように見えた。

ここまで、3つの空間におけるケータイ利用によって引き起こされる身体の動きの説明をしてきた。空間によって、ケータイは多様な形で身体を動かすことができる。前述の回転的な動きや

短い距離を後ろに戻る行動は Lasen(2004)が指摘した、じっと立っている行動と歩く行動の間であると考えられる。

ケータイが身体に起こす一つの大きな変化は身体の動きのスピードに関する変化である。ケータイを使うと、ケータイを使っていない時の身体的な動作のスピードと違って、そのスピードは落ち、または戸惑ったような動きが多い。そして、行動のリズムも異なる。われわれは物理的な空間である行動を行ないながらケータイを使うため、おのこの動作のリズムは一定ではない。手でケータイを持ちながら多様な行動を行ない、その行動の間にケータイ利用を挟み込むため、行動のリズムが通常の動きよりもとぎれとぎれになる。

こういった身体の動きやとぎれとぎれのリズムは、ケータイに夢中になってしまったことから、無意識のうちに生じるものである。

## 6.2 ケータイによってアフォードされる表情

第4章で述べたように、人間を中心に考えると、空間は2つに分類できる。一つは人間が身体的に存在している物理的な空間である。もう一つは非物理的な空間である。物理的な空間を本論では個人空間、半公共空間と公共空間という分類をした。それらの空間にいつつ、非物理的な空間にいる場合が多い。それは、ケータイを使っている場合に限らず、例えば寝ている時、本を読んでいる時、何かを考えている時、想像をしている時に、精神は物理的な空間にはない。この2つの空間は常に主体の中で混在しており、そこで人々が生き、相互作用をしているのである。身体がいる物理的な空間は公共空間の場合もあれば、個人空間、あるいは半公共空間の場合もある。また、非物理的な空間もまた、プライベートな時もある、そうではない時もある。パブリックな場でも、ケータイの場合は画面にステッカーを貼ったままメールを送ればプライベートな行動にもなりえ、また一緒にいる人達の間で写真帳としてケータイを回し、そこに居合わせた人達にもその画像の話が聞こえてしまうというパブリックな瞬間もある。プライベートとパブリックの問題より、より重要なのは、物理的な空間と非物理的な空間の間におこる相互作用の問題である。ここでは、身体が公共空間や半公共空間にいながらも、精神はケータイという空間にいる時、身体がその2つの空間の間でどのように対峙するのかについて述べていく。

顔の表情は、空間とも精神ともにつよく繋がっている。何かがある何かを感じさせる時に、表情が表れる。そして、社会的パフォーマンスとしての表情も、われわれはマスクのように付けている。そのマスクは、特に半公共空間と公共空間で付けられるものである。そのマスクがまるで自分の一部ようになってしまい、マスクなしの自分が存在しないように感じてしまうこともある。そのマスクを付けている時は、空間やその空間にいる人々に対して、パフォーマンスのマスクをしているといえる。人と話す際、その人の見た目、会話の内容、また物理的な空間に合わせて、表情を作る。

電話の特徴は相手の表情が見えないことである。しかし、この特徴は、アフォードされるか否かということよりは「問題」として受けとられている場合が多い。例えば、山崎（2006）が指摘しているように、「電話だけで物の組み立て方や機器の使い方を伝えるのが難しいということは、多くの人が経験済みであろう。そして、それは相手の様子が見えないからと想像する人も多いであろう」（2006:206）。確かに相手が見えないとコミュニケーションの形態が異なり、「理解」も異なるが、ここでは、相手が見えないことをアフォードの一因として取り上げたい。相手が見えない、また、相手に見られていない＝マスクがいない状態では、表情と身体は落ち着くことができる。そして、口で言っている内容と表情は一致しなくてもよい。例えば、嬉しい声で「面白いですね」と言いつつ、早く電話を切りたくてイライラした表情をうかべていても、相手に見えない。これは、ケータイに限らず、手紙や固定電話の場合でも、同様に空間からアフォードされる表情がある。しかし、ケータイの場合は、身体的に公共空間や半公共空間にいる時に、ケータイにおけるコミュニケーションに対応する表情と、自分自身がいる空間に対する表情とを加味して見せなければならない。その交渉は利用者が決めるものであり、人それぞれである。ケータイコミュニケーションの方に対して表情的にも応答したい時には、身体をまげ、物理的な空間の方には表情を隠しながら応答する時があれば、表情の感情の程度を制限する時もある。また、身体的にいる空間の周りの目を気にせず、自由に顔つきで表情を表現する人もいる。

そして、第3章で紹介した調整メール、つまり待ち合わせ連絡の場合は、対面で会う目的で生じる連絡であり、会う時間が近づけば近づくほど、コミュニケーションが直接的になる傾向がある。例えば、メールから電話になる。その時はケータイにおけるコミュニケーションの空間と、物理的な空間が融合するため、身体はケータイにも物理的な空間にも応答し、目も、身体もケータイの画面と物理的な空間を左右される。例えば、新宿が混雑する土曜日の18時、新宿の定番の待ち合わせ場所であるALTAの下に行くと、ほとんどの人が手にケータイを持ち、人を待ちながら、ALTAにいる人々の確認をしつつ、ケータイ画面を確認している。または、ALTAの下にいる2人が電話で話しながら、もっと具体的に相手がどこにいるかを確認して会う様子が見られる。その時の身体的な応答は、ケータイと物理的な空間の間を行き来しつつ決定されるものである。



図 30 ケータイと身体







つまり、ケータイにおけるコミュニケーションの内容と表情のギャップが、遠隔コミュニケーションにおいてアフォードされるものの一つであり、ケータイにおける内容とその内容に対する



表情はマッチしなくても良い。そして、そのアフォードされた感情を利用しながら、公共空間や半公共空間に対する表情的なパフォーマンスと、ケータイにおけるコミュニケーションへのパフォーマンスへの対応を決めるのである。身体はその2つの空間、すなわち、物理的な空間とケータイの空間に返答しつつ行為する。前述した、待ち合わせ場所という物理的な空間における身体の交渉は、その代表的な例である。


### 6.3 ケータイの中の身体

身体とケータイとの間の一つの面白い現象は、絵文字と身体の関係である。3章では絵文字について語り、相手が見えないことを補うために絵文字が使われていると指摘した。ケータイ会社が決めた絵文字は、われわれの表情や身体の実現になり、ある種のケータイ上に技術化された身体といえる。

ケータイの会社によって絵文字は異なり、各会社にはそれぞれのスタイルがある。例えば、ドコモは比較的シンプルな絵文字のスタイルである。絵文字の表情や表現、動きは決められていて、利用者はその絵文字の中から適切な絵文字を選択しつつ文章を書く。ケータイにより、絵文字の選択の方法は異なる。かならずしも絵文字を探してから選択するのではなく、文章を書いている時に絵文字が画面に出てくるため、あえて探さなくても絵文字を選択できる機種もある。また、いくつかの文章と絵文字がセットになって登録されているケータイもある。例えば、「宜しくお願ひします」と書き始めると、おじぎの絵文字とセットで変換され、選択すると、絵文字と一緒に文章が表示される。このような例では、ケータイに自分の身体をゆだね、身体的な表現の選択をケータイに任せているといえるだろう。例えば、調査対象者の古澤さんは、恥ずかしくて絵文字を使わないというが、彼のケータイでは文章と絵文字がセットになっているため、使いたくなくても使ってしまう場合が多いという。

絵文字を使うことによって、簡単な言葉でも、表情が文章に加わり自分の意図が明らかになるため、誤解が生じる可能性が減り、相手が見えないことも補うことができるとも言える。絵文字を使うと、言葉で表すことができない身体表現を加えることができる。その絵文字で表される身体が、もともと自分が物理的な空間で行う身体の動きや表情を表す時もあるが、自分が実際にしない動きも表現することがある。例えば、おじぎの絵文字の場合は、対面的に話す時によくする身体の動きであるから、文章だけで言葉が足りないと思うときには、おじぎの絵文字を加える。一方、身体的には実際に行なわれていない動きが、ケータイの絵文字にあるという理由から使うこともある。例えば、の絵文字の場合は、実際に手を握ってその形にする場面は、観察したかぎり少ない。しかし、ケータイでは「了解」のような内容をメールで送るとき、の絵文字を加えることが非常に多い。このような絵文字は他にもいくつかあるが、よく使われているのは、ウインク 、困った顔 、泣き顔 と 人差し指などである。

ケータイメールの中で生きている「身体」は実際の「身体」と異なる。ケータイでは実際に行なわない身体の動きを行ない、自分のアイデンティティに関わる別の身体表現が構成されていく。調査対象者はいつも同じ絵文字を利用し、その絵文字には固有の、ケータイ上での決まった表情や身体の動きがあり、それらが利用者自身を表すと思われる。そして、ポピュラーカルチャーで人気になった表情も絵文字になり、自分の身体に楽しさを加えることもできる。例えば、の絵文字は、よく「恥ずかしさ」や「困惑」を表すが、その表情には面白さにもじんでいる。実際には、対面的に恥ずかしい時や困っている時は、言うまでもなく、汗の1滴も降りてくることはないのに、ケータイの中ではこの汗の表現が選択されるのである。また、よく使われているの絵文字は、身体にスピードを上げることを表現しているが、これもまた実際には走り出すことはない。

ケータイ上における身体にはドラマティズム、つまり、大げさな表情をつかうという特徴がある。例えば、悲しさを表したい時は悲しい顔だけではなく、泣き顔を使うことが多い。そして、ドラマタイズされた新しい身体が構築されているだけではなく、3章で指摘したように、アバターのように、自分がある絵文字になる時もある。例えば、まりさんはという絵文字で自分を表す。

つまり、ケータイにはわれわれの物理的空間とは異なる他の身体があり、それらは自分のアイデンティティとかかわりつつある。相手が見えないことを絵文字で補うだけではなく、人々のアバターの身体はケータイ空間の中で新たに構築されているのである。

## 6.4 ケータイと身体の融合という行為

前章では、身体的に映像を撮影するという行為について「フィット」という概念を用い、ケータイと手と一緒にいるという現象を説明した。ここでは、目、画面、手が、一つのユニットとして行動をすることについて一考したい。ケータイは、それを持つ手だけではなく、身体全体の動きに影響する。頭、耳や肩にも、聴覚と視覚にも影響する。手は、ケータイの形に合わせてケータイを包み、ケータイで行なう動作に沿って、手を動かす。折りたたみのケータイの場合は、ふたを早く開けたり閉めしたり、時間を確認するために何かのボタンを押したり、メールを書くために指を早く動かしたりする。ケータイを購入したばかりの時は、身体とケータイがフィットしていないため、所作に戸惑う。サーファーがはじめて新しいボードに乗った時と同様である。ボードとサーファーははじめは一つになっていないが、サーファーとボードが相互作用することで、やがてフィットするようになる。ケータイの場合も同じで、手がケータイの形に慣れ、指がキーボードに慣れてくると、指のスピードは加速する。「親指族」という言葉まで出て来た。

メールを打っている時はケータイは手とフィットするが、ケータイで話したり、聞いたりする時は、耳、頭、肩とフィットし、多様な形でケータイを持つことになる。そして、身体とともに、聴覚と視覚という感覚とケータイも、相互に適応する。向き合って話すという時の聴覚の能力と、



電話で話す時の聴覚の能力は異なる。個人空間の固定電話の場合は、話に集中できるように周りに「静かにしなさい」と言うことがある。また、半公共空間の電話の場合は、ある程度静かな場所でかけることが多いためそこまでは聞きとりにくい。しかし、ケータイの場合は周囲に知らない人がいて、雑音の多い雰囲気であっても、周囲に静かになるよう求めることはできない。その雑音の中で相手の声が聞こえるように集中する過程で、身体が反応しどんどん聴覚能力が鋭くなっていく。そして、ケータイから出ているいろいろな音に慣れていく。バイブだけで起きる鳥海さん、目覚ましのメロディーが大好きなかなよさんなど、その音に慣れ、電話やアラームなど何の音かが感覚的に分かるようになる。

視覚の場合も、5x4の画面、またその画面にあるフォルダー、情報の体裁、文字サイズに慣れ、メールを早く読めるようになり、たくさんのフォルダーの中から素早く情報を出せるようになる。利用の頻度と年齢によって、画面からキーボードに目を上下に早く動かす時に、目ではなく、顔全体を上下に動かすなどの使い方が変わってくる。利用の頻度が高い、または年齢が低いほど、面々からキーボードに素早く目を上下に動かすことができる。しかし、逆に利用の頻度が低く、年齢が高い層の人ほど、目ではなく、顔全体を上下に動かすようだ。



図 31 頭を動かせるメール

そして、人は、身体の全体的なレベルで、ケータイに対するアンテナを付けたまま生きているといえる。バイブに気づくためには、聴覚によってではなく、触覚的にケータイに気づく必要がある。バイブが聞こえない場合でも、バイブしているケータイが身体と接触し、それを通して身体がケータイに応じる。

つまり、身体自体が多感覚なメディアなのである。視覚的に画面に応答し、聴覚によって多様な音に気づき、またバイブは触覚を喚起し、ケータイ自体をいつも身体の近くに置くことで触覚的に知覚する。Richardson(2007)が指摘したように、ケータイは単なる画面ではない。画面はケータイのメインでもない。ケータイは身体という組織に視覚的、触覚的、聴覚的に侵入し、多様な身体的なかかわりあいを要求する。

ここで注意したいのは、ケータイと身体の関係が相互的であるという点である。人間はケータイから多様なことを習い、ケータイもまた人間に習う。その習得は、体験の習得である。Despret(2004)は、人間と Hans という馬の実験についてエスノメソドロジーを用いた論文を書いている。人間が馬に質問し、馬が「はい」の場合は右足を二回動かし、「いいえ」の場合は

右足を三回動かす。そして、馬はいろいろな質問に正しく答えられたのである。論文の問題は、「馬はなぜ正しく答えられたか」であった。Despret 達は様々な研究をした上で、問題を解決した。馬は人間を満足させたいため、人間を精密に観察し、人間が無意識に行なう微細な動きを読み取って、反応するという。足を動かし続けることを期待した人間の表情に対しては、馬は足を動かし、人間が落ち着いた表情に移ると馬の足が止まる。そういう訳で、馬は質問に正しく答えられたのである。

つまり、馬が人間の表情を読み取っていたわけだが、人間にそのような表情や体の動きをさせたのは、馬から人間への作用だということができる。すなわち Hans は、人間自身に表情や体の動きを作らせる装置になったわけである。このように分析してはじめて、人間は自分の表情や体の動きを意識するようになった。人間と馬の両方に、相手の動きの原因と結果がある。両方が互い相手に影響を及ぼしたり、影響を受けたりしている。

Hans と同じように、ケータイそのものが人間を動かし、人間を感じさせる装置になる。われわれはケータイをカスタマイズする。好きな飾りやストラップを付け、待ち受け画面を決め、映像を撮って保存し、アドレス帳をフォルダー分けして、連絡先を入れ、マナーモードやアラーム音や、歌を選択し、メモを書き、カレンダーに予定を書き込むとともに、われわれの身体はケータイに適応していく。ケータイをめぐる行動によって、われわれの表情は変化する。ケータイにある情報が見つからないと、困った顔をする。おめでとうメールを貰うと、ニコニコする。ケータイを持つために、頭、肩、手、腕のたくさんの動きがでてくる。そして、われわれの聴覚と視覚はケータイに非常に敏感で、ずっとアンテナを張っているかのような状態にあるため、ケータイがバイブしていなくても、しているように感じてしまい、また、メール着信のときに光るライトが光っていなくても、光っているように見えてしまう。

ケータイというモノは身体の構成と進化に影響するのではないだろうか。その身体への影響は「人間」の意味に関わるものだ。人間の聴覚は鋭くなるだろう。もしかすると、親指も長くなるかもしれない。また、われわれの身体的なコーディネーションやマルチタスクの行動をどんどん習得し、上達する。人間が行なう行動や行動に対する集中力は散乱し、身体のリズムがケータイ化される。

ケータイと身体の関係の説明するには、Knorr-Cettina(1997)の理論が非常に面白い。彼女が指摘したように、モノは人間を結びつけ、人間の感情的な世界を構成する。彼女は knowledge object という概念を紹介している。Knowledge object とはいつも変わっていくモノとしての特性が広がり続ける(unfolding character)モノである。Knowledge object は、完成したモノというより、どんどん変わっていく、構成されていくモノである。本論では、ケータイを knowledge object として取り上げたい。ケータイは、誰からも利用されないかぎり、「ケータイ」として定義されない。ケータイは、人間と相互作用を行なうことで、意味を持ち、定義されている。ケータイでできることは多様にあり、人によって、ケータイの定義は変わる。メールの道具、通話

の道具、スケジュールを作る道具など、調査対象者のケータイの利用は様々であった。Knorr-Cettina は Knowledge object に関して次のことを言った。

「後略 I suggested a form of mutuality that can serve as a dimension or basis of an object-centred sociality and that rested on a particular conception of knowledge objects as a sequence of lacks. This form of sociality entails reflexivity: it occurs when the self as a structure of wanting is looping its desire through the object and back. In this movement, the self is endorsed and extended by the object which provides for (the continuation of) the structure of wanting through its lack in being, completeness and object-ivity. Sociality here consists in the phenomenon that the subject takes over the object's wants -as a structure of wanting, the subject becomes defined by the object. Conversely, the articulation of the object is looped through the subject: as a 'structure of lacks', of the question it poses or the things that 'it' needs to become materially defined, the object receives the kind of extension that the subject determines (perspectivalism provides an analysis of this situation). The formula of a 'mutual providing' of self and object through the interweaving of wants and lacks specifies a kind of backbone of reciprocity for an object-centred sociality. (...) A mutuality of wants and lacks does not simply occur or turn up. Rather, it is usually laboriously and even fictitiously produced. Most of what is interesting happens during this labour (後略)」 (1997:16)。

こういった関係は、親密な関係である。ケータイと人間は単なる相互作用をしているだけでなく、相関的に構成され、互いに結びつきあう。親密な関係であるからこそ、人間はケータイをいつも身体の近くに持ち、すぐケータイと相互作用できるように、使わなくても手に持つことが多い。

人間とケータイはユニットである。そのユニットはしばしば「サイボーグ」と呼ばれる。サイボーグは機械と人間の組み合わせであり、サイバーパンクや空想科学のようなイメージが強い。しかし、人間はテクノロジーを使うかぎり、サイボーグである。サイボーグの概念は、自然と人工の融合に帰結する。現代において、われわれの身体はテクノロジーの進化につれて機械化されていると考えられるが、実は身体は原始のころから機械化されていたといえる。ケータイにしても一本の棒にしても、テクノロジーであることに変わりはない。しかも、Fortunati (2003)が指摘するように、身体自体もまた機械である。「われわれになる機会 (=Machines that become us) (2003)」という著書で、Katz が指摘するように、3つのレベルで機械はわれわれそのものに

なる。1つ目は距離があってもわれわれの表理になる。2つ目は「自分」というコンセプトの重要な一部分になる。そして、3つ目はコミュニケーションにおける自己表現の装具になる。

つまり、ケータイという機械、メディアは身体を動かせるだけでなく、身体の感覚を再構成している。ケータイを持った身体は世界における存在（Merleau-Ponty、1945）と関連する。ケータイと身体の関係は相関的、親密的であり、ケータイと身体は相互作用しあい、相関的に身体的な技法の習得を重ねるにつれて、サイボーグになる。しかしそのサイボーグは、ケータイが登場してから生まれたのではなく、人間は、テクノロジーを扱い始めてから常にサイボーグであり続けたのである。

## 7. 結論

### 7.1 人間のユニットを壊すケータイ

本論文ではケータイというモノを中心に議論を進めてきた。1つのモノとしてのケータイにおける社会性、つまり、人間関係とそのコミュニケーション、空間との関係性、そこにおける画像撮影という身体的な行為について考察し、最後にケータイと身体の融合に関する議論をした。

本章では、フィールドワークに基づいた詳細なデータの分析をまとめつつ、一步踏み込んだ議論にしたい。最終的には、本論の第1章で述べた、ケータイと自分が一体になるというプロセスについて考察する。

「人間とは何か?」という問いは、とても難しい問いでありつつ、多様なレベルで答えを求めたくなる問いでもある。「人間」は、イメージ的には、ひとかたまりになった意味のあるユニットである。その「人間」というユニットのイメージは、身体の境界線によって縁取られている。しかし、Geertz は以下のように指摘している。「The conception of the person as a bounded, unique, more or less integrated motivational and cognitive universe, a dynamic centre of awareness, emotion, judgement and action, organized into a distinctive whole and set contrastively against other such wholes and? against a social and natural background, is, however incorrigible it may seem to us, a rather peculiar idea within the context of the world' s culture」(1979:229)。

人間とは何か。人間は、どのようにして人間になるのか。人間は、常に変化し続けているダイナミックな関係性の集合体である。人間のすべてを理解することはできない。人間はユニットではなく、身体の境界線にも限定されていない。この集合体は、ユニットとしてとらえるのではなく、関係性の集合としてとらえるしかない。なぜかという、人間それ自体が、1つのユニットとして存在していないからである。例えば、アイデンティティを分析しようとしても、状況、コンテキスト、具体的な関係性などの分析になり、普遍的なものとして分析することができない。すなわち、人間は、宇宙のようなものである。宇宙は巨大であり、宇宙が含むすべてを理解し、分析することは、不可能である。同様に、人間をユニットとして分析や理解をしようとせず、具体的な関係性から考察することを本論では試みてきた。ケータイというモノを議論の中心に位置づけ、そこにおける人間の関係性を、そのコンテキストや「特定状況」と共に分析してきた。さらに、人間同士の関係だけに限らず、ケータイというモノとの関係性も含めて、ケータイによってフォルダー化される人間、儀礼的にストラップされる人間関係、そして、通話コミュニケーションと、愉快性あふれるメールコミュニケーション、遊びとしての絵文字コミュニケーションなどの分析を試みた。以上のように、人々のアイデンティティを構築する多様で意味深い関係性について考察してから、ケータイと空間との関係性、また、その空間における画像撮影という身体

的な行動、最後にケータイと身体との融合の関係性について述べた。こうしたケータイとの関係性、または、人がケータイをめぐる空間や他者と取り結ぶ関係性は、さまざまな「特定状況」やコンテキストに基づいた関係性であり、非常に具体的で、一過性のものである。

人間 (subject) は多様な状況、人、モノなどに従属 (subject to) しているからこそ、人間 (subject) になる。アイデンティティは、人、モノ、状況などとの関係性によって構築されている。このような関係性は永続的なものではなく、一時的な関係性である。ある「特定状況」における関係性、つまり、ある場所、時間、空間との関係性という、ダイナミックな関係性が、アイデンティティを構築している。もちろん、同じ人との関係、同じ場所との関係を、繰り返し経験すればするほど、アイデンティティにより強く、直接的にはたらきかけ、その関係性に基づいたアイデンティティが構築されるだろう。その意味で、ケータイが可能にした用件のない楽しいメールコミュニケーションは、同じ人々の間で頻繁に起こり、同じ人々の関係性の中で繰り返されるため、ケータイが人間関係を強化し、維持するといえる。また、重要なのは、実際行なわれているコミュニケーションだけではなく、ケータイそのものが自分と一体化し、常に身体に持つからこそ、コミュニケーションが行なわれていないときにも、他者との結びつきを感じ、他者と常につながっているように感じる。

調査対象者にケータイについて質問した時に、特に男性の場合、電卓、メールソフト、ビデオカメラなど、実用的な利用の例を挙げる人が多かった。しかし、自分のケータイを他のものに例えてもらおうと、興味深い答えが返ってきた<sup>61</sup>。例えば、「私のケータイは相棒みたいです。なぜならいつも一緒にいるからです」と答えた人がいた。また、「私のケータイは秘書みたいです。なぜなら私の知り合いの連絡先をすべて知っていて、街中で困った時には各種情報を与えてくれ、目覚まし時計の様に起こしてくれたりもするからです」という答えも見られた。かなこさんは「私のケータイは空気みたいです。なぜならいつもあるのが当然の様に使い、ないと改めてありがたみを感じるからです」と答え、母のかなよさんは、「私の携帯はペットみたいです。なぜなら心がとても、いやされるからです」と話した。かおりさんは「私のケータイは体の一部みたいです。なぜならいつも一緒だからです」と発言した。「私のケータイは現金みたいです。なぜなら持ってないと落ち着かないからです」との答えもあった。「私のケータイは日記みたいです。なぜなら、写真やメール、通話記録は思い出のようなもので、後で読み返すとおもしろいからです」と話した人もいれば、かなこさんと同様に、「私にとってケータイは空気みたいなものです。なぜならそこにあって当然のものだからです」と答えた人もいる。松本さんは、「私のケータイは魔法使いみたいです。なぜなら携帯を持ってからはとても便利になり、遠くの友達も身近に感じられるからです。」と答えた。

---

<sup>61</sup> 調査対象者には、「私のケータイは〇〇みたいです。なぜなら〇〇だからです」という文をつくってもらった。

調査対象者の発言を読んで分かるように、ケータイを自分と乖離したモノとして感じていない場合が多く、自分と非常に関連の強いモノとしてとらえているようである。多くの人にとって、ケータイそのモノとの強い関係性こそ、人間が従属（subject）するものであり、人間を構築するものである。

調査対象者はケータイがなければ、「困る」し、「なくてはならない」ものだという。ケータイがなくなったら、自分の重要な一部（つまり、さおりさんの言葉に置き換えれば、思い出のようなもの、人生の日記）も、なくなってしまうのである。ポケットに、ケータイという形で、人生が入っているわけだ。矛盾のように聞こえるかもしれないが、ケータイで重要な連絡があったか否かについて調査対象者に聞くと、ほとんどの場合「ない」と答える。重要な連絡が届いたことのないケータイが、なくてはならないモノとされている。つまり、重要なのは、ケータイに届く情報の内容ではなく、人生そのものが詰め込まれたケータイなのである。

前述したように、Knorr Cettina（1997）は、人間とモノは相互に関係し、相互に構築し合っていると指摘した。人間はさまざまなモノに頼り、従属（subject）している。だからこそ、身体という境界線で区切られたユニットとして、人間をとらえることはできない。人間の人生が集約されたケータイというモノも、その人間のユニットとしてのイメージを壊す。また、ケータイは「触手」のように人を結びつけ、人との頻繁なコミュニケーションを可能にし、常に他者とのつながりを感じさせるだけではなく、前章で指摘したように身体と融合しているため、身体の境界線は無化される。

人間がユニットであるというイメージがあるだけではなく、こうした人間のユニットの間で、相互作用が生じるというイメージもある。しかし、本論で論じたように、相互作用は人間の間だけではなく、モノと人間の間にも生じる。ケータイを持ってない人はほとんどいない。ケータイだけではなく、モノを持たない人間は存在しない。むしろ、存在できないだろう。ケータイは、調査対象者のかおりさんの言葉を借りるなら、「体の一部」と感じるほどに、自分と一体化したモノである。

ケータイは、自分と一体になったモノであり、常に持ち歩くため、人と頻繁に連絡をとれるようになる。すでに述べたように、連絡をすること自体が重要なのであり、電話やメールの場合でも、画像撮影の場合でも、用件を伝えるというよりは、感情的な利用の方が非常に多い。重要なのは、内容ではなく、連絡をとることそのものである。例えば、第3章で分析したメールコミュニケーションは、毎日のように交わされる。ケータイを持っているからこそ、こうした頻繁なコミュニケーションが可能になった。そして頻繁なコミュニケーションが可能になったからこそ、ケータイが人間関係を構築し、維持するようになり、人間はケータイに従属（subject）するようになったのである。

## 7.2 ケータイにおけるシンプルなコミュニケーション

本論で明らかになったように、ケータイにおけるコミュニケーションは多様である。用件なしのコミュニケーションが可能になり、頻繁になったため、コミュニケーションは複雑化したように見える。Strum & Latour (1992) は、複雑 (complex) と煩雑 (complicated) という用語を用いて、社会関係を再考察した。Strum & Latour は、ヒヒの社会と人間社会を比較し、ヒヒ社会は複雑 (complex) であり、不定形で不安定な社会であることに對し、人間社会は煩雑 (complicated) な社会で、安定した社会であるとした。なぜかという、人間社会では、モノがあるからこそ、関係性を維持しやすくなるためだ。彼らによると、複雑 (complex) とは同時にたくさんのモノを扱うことである。それに対し、煩雑 (complicated) とは、シンプルな動作の連続で行なわれる行動である。「Baboon-like society (中略) is complex but not complicated because individuals are unable to organize others on a large scale. The intensity of their social negotiation reflects their relative powerlessness to enforce their version of society on others, or to make it stick as a stable, lasting version」(1999 : 121)。それに対し、「the skills in an industrial society are those of simplification making social tasks less complex rather than making them more complex by comparison with other human and animal societies. By holding a variety of factors constantly and consequently negotiating one variable at a time, a stable complicated structure is created. Through extra-somatic resources employed in the process of social complication, units like multinational corporations, states and nations can be constituted」(1999 : 121)。

よって、ケータイは社会的な関係性を「複雑」にしているのではなく、「煩雑」にしているといえる。ケータイがあるからこそ、関係性がシンプルになる。人間は連絡をとりやすくなり、例えば、調整メールによって、人々の計画やものごとの準備はより簡単になった。人々が対外的にケータイというモノを使うことによって、人間関係は繰り返され、それ故に維持されている。

「社会」という言葉を、漢字の意味から考えてみると、「社」は結合の象徴であり、「会」には、会うという意味もあれば、会った時にできる集合体の意味もある。ケータイというモノは、「社会」をつくっている。すなわち、ケータイがあるからこそ、(非物理的にはあるが) 人は会いやすく、集合しやすくなり、ケータイはある意味社会を構築しているといえる。そして、ケータイによって、実際に人が会いやすくなるだけではなく、人との関係性を体験的に感じるようになった。



### 7.3 ケータイと人間が感じ合う

「感じる」という行動をとおして、人々はケータイとの関係を体験する。ケータイと自分の融合の在り方の基本は、感じることである。ケータイが自分と一体になったように感じ、ケータイに対する愛着 (attachment) も感情的であるからこそ、ケータイがないと「物足りない」、「落ち着かない」、「困る」と調査対象者も述べているのであろう。だからこそ、調査対象者の多くが、ケータイについて語る時に、単なるモノとしてではなく、擬人化してケータイを扱っている。例えば、マリさんは「ケータイと一緒に寝る」という発言をした。「心が癒される」とか、「街中で困った時には各種情報を与えてくれ、目覚まし時計の様に起こしてくれたりもする」という表現をした人々もいた。ケータイを、まるでいいものばかりの集まりであるようにとらえる調査対象者もいた。例えば鳥海さんとあつこさんの間で起こるメールの遊び（食べ物で言葉を作る、中国人のふりをして漢字でメール交換など）や、カレンダーには楽しい予定しか入れてないというまりこさんの行為は、ケータイに対する気持ちをよく表している。Jane Vincent (2005) は、ケータイに対する必要性について次のように述べた。

「(前略) it is emotion and emotional terms that are used to articulate the behaviours, but it's the need for social connectivity that creates the vehicle for the emotional content in the first place. In considering just how dependent people are on their mobiles one can start to unpack the layers of emotion to find that it is not just how people talk about mobile phones but how mobiles have become embedded in our daily lives to such an extent that for many people they cannot imagine life without one. One can surmise from this that people have a distinct and essentially emotional relationship with their mobile phone and all that it engenders (2005: 99)」。

つまり、モノと人間は相互的な関係性だけではなく、感情的な関係も持つ。だからこそ、寝ている時でも電源を消さないし、マリさんが指摘したようにケータイと一緒に寝る (4.4 図 17b を参照)。そして、このような感情的な関係が、実際の行動（メールを送る、画像を撮るなど）だけではなく、欲望の構造としての人間が、ケータイの鳴る音を期待する感情ともつながっている。ケータイが鳴るとき、チェックしないと分からないことが多い。音の種類によって、電話、メール、アラームのどれなのかは分かるだろうが、「何を」とか「どんな」という内容が分からないからこそ、期待感が強いのである。

### 7.4 object と subject の分類の無化

本論の前半では、生得型（身体、言葉など）のメディアと付属型（モノ）のメディアという分類について論じた。分析する際には、カテゴリーを作成し、分類することによって、分析がしやすくなる。生得型メディアと付属型メディアという分類が理解できる理由は、身体が人間の境界

線になるからである。前述したように、人間はユニットではない。ここで論じてきたように、人間の存在やアイデンティティは、身体の境界線に限られるものではない。社会における関係性は、モノと人間が1つになった関係性である。モノなしの人間関係は存在しない。また、人間なしのモノの関係性も存在しない。社会が成り立つためには、モノと人間が1つになるということが前提となる。

本論で明らかになったように、社会的な関係性において、われわれは生得型メディアと付属型メディアを併用し、それぞれのメディアは相互に作用している。われわれは、ケータイを利用しつつ、表情も構築しているのだ。このような点をふまえると、人間 (subject) はモノ (object) との関係性を含めた分析が必要なのではないだろうか。

Subject と object の問題は、社会学においても、哲学においても、昔から議論されてきた問題である。すなわち、人間は、世界にある対象を、解釈的に理解しているかどうかという問題である。すなわち、世界にはたくさんの対象 (object) が存在するという前提の上で、人間はそれらの対象とどのように関係を結んでいるのか、という問題である。一般的な観点からは、人間を中心に据え、対象を二次的なものとして解釈するような、一方的な理解がなされがちである。しかし、本論で指摘したように、モノも人間を構築し、社会関係を構成している。人間とモノ、つまり、subject と object の分類を無化することを前提に議論をすれば、より深く社会を理解できるのではないだろうか。

## おわりに

本研究の調査対象者は、どちらかといえば幸せな人々だった。彼らにとって、ケータイはポジティブなモノ・経験であった。遊び心いっぱいのケータイ、楽しい連絡、画面の形に切り取られた記憶としての画像など、ポジティブな経験ばかりであった。私は、いろいろな人のケータイの中に入りこんで、フィールドワークを行ないながら、「不思議の国のアリス」のように、たくさんの新しい経験をし、面白い瞬間、人、言葉と出会った。調査対象者と一緒に時間を過ごすことで、いろいろな生き方を味わいつつ、その人々の人生と、ケータイに移って具体的な形にされた人生を、少しでも知ることができて、非常に幸福に思っている。

しかし、調査対象者が困難な状況に置かれていない人間だったからこそ、ケータイがそこまで幸せなモノであったのだろう。残念ながら、その幸福感の裏側には、経済的なもくろみがある。われわれのケータイ化された人とのコミュニケーション、デコメールのような誕生日メールの新しい儀礼的な習慣は、資本主義に裏付けられていて、人々がケータイで遊ぶことで、多大な利益を得ている会社があるのだ。親しい人と感情的なコミュニケーションをとるという行為は、製品の消費とイコールになった。

また、ケータイを持つことで、われわれのプライベートな情報が監視されていることもまた確かである。われわれがどこにいるのか、何をしているのかなどが、情報として残っていて、それを利用した新たなサービスが出来上がる。その場合、われわれには個人情報を守る権利がないようである。

そして、もっとも深刻な問題は、ケータイにおけるいじめの問題であろう。ケータイを通じて「死ね」というメールをたくさん送信して、いじめられている子供はたくさんいる。学校の「裏サイト」、つまり、学校が運営しているサイトではなく、生徒達が立ち上げた掲示板形式のケータイサイトにコメントを書き込んで、特定の生徒をいじめるケースもある。

また、親の安心感のため、利用が制限されているケータイを子供に持たせるという行動に関しても、問題はあつた。子供の権利について、もっと考える必要があるのではないだろうか。

こうした問題は、本論での調査対象者にとっては身近なものではなく、分析していない。だが、このような問題の分析と考察は、重要であるに違いない。

本論文の執筆にあたって、数えきれないぐらい、たくさんの人々の力を借りた。ここで改めて謝意を表したい。

本研究は、(株)KDDI 研究所の研究支援に基づいて実施された。KDDI のみなさんのお力添えのおかげで、無事フィールドワークを終えることができました。改めて感謝いたします。

誰よりも、東京大学学際情報学府の水越伸教授に心からお礼を申し上げます。研究生の頃から現在まで、多様なプロジェクトや研究の体験をさせていただき、本当に感謝しております。そして、水越研究室の先輩方、仲間のみなさん、本当にありがとうございました。特に、謎の日本語

をチェックして下さった伊藤夏湖さんに心から感謝をしています。大変お疲れさまでした。そして、その協力をして下さった阿部純さんも、本当にありがとうございました。

その他にも、北田暁大先生のご指導と、北田研究室の先輩の方々の鋭いコメントは、非常に参考になりました。長くお邪魔をしてしまいましたが、本当にありがとうございました。また、インタビューに関してご指導いただいた岡田朋之先生にもお礼を申し上げます。来日してから大変お世話になった池田謙一先生にも、深く感謝いたします。

第4章の絵を描いて下さった Jordi Viñals、そして、フィールドワークの協力をして下さったたくさんの方々、親切に協力をして下さった調査対象者のみなさま、心より感謝しております。

その他、東京大学の留学生センターの日本語の先生方、文学部の寺田徳子先生、プライベートも含めてすべての方々に、深くお礼申し上げます。何となく、東京で3年以上過ごしてきた私は、日本語で修士論文を仕上げることができたみたいです。みなさまへ心から感謝しております。本当にありがとうございました。

## 参考文献（筆者名 ABC 順）

- Berry, C., Martin, F., & Yue, A. (2003) *Mobile Cultures: New Media in Queer Asia*. North Carolina, United States of America: Duke University Press.
- Cooley, H. R. (2004) It's all about the Fit: The Hand, the Mobile Screening Device and Tactile Vision. *Journal of Visual Culture* , 3 (2), 133-155.
- Despret, V. (2004) The Body We Care For: Figures of Anthro-zoo-genesis. *Body and Society* , X (2-3), 111-134.
- Fortunati, L. (2003) The Human Body: Natural and Artificial Tehcnology. In J. E. Katz, *Machines that Become Us: The Social Context of Personal Communication Tehnology* (pp. 71-87). New Brunswick: Transaction Publishers.
- Geertz, C. (1989) *El antropólogo como autor*. Barcelona: Paidós.
- Geertz, C. (1979) From native's point of view. On the nature of anthropological understanding. In P. Rabinow, & W. M. Sullivan, *Interpretive Social Science* (pp. 127-151). Berkeley: University of California Press.
- Giddens, A. (1992) *The Transformation of Intimacy. Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*. Stanford: Standford University Press.
- Goffman, E. (1959) *The Presentation of Self in Everday Life*. New York: Anchor Books.
- Goggin, G. (2006) *Cell Phone Culture: Mobile Technology in Everyday Life*. New York: Routledge.
- Goggin, G., & Hjorth, L. (2007) Mobile Media 2007. Proceedings of an International Conference on Social and Cultural Aspects of Mobile Phones, Media and Wireless Technologies. Sidney: University of Sidney.
- Gottlieb, N., & McLelland, M. (2003) *Japanese Cybercultures*. (N. Gottlieb, & M. McLelland, Eds.) New York: Routledge.
- Green, N. (2003) Outwardly Mobile: Yound People and Mobile Technologies. In J. E. Katz, *Machines that Become Us: The Social Context of Personal Communication Tehnology* (pp. 201-218). New Brunswick and London: Transaction Publishers.
- Grinter, R.E, & Eldrige, M. (2001) 'y do tngrs luv 2 txt msg?'. In W. Prinz, M. Jarke, Y. Rogers, K. Schmidt, & V. Wulf (Ed.), *Proceedings of the Seventh European Conference on Computer Supported Cooperative Work ECSCCE '01* (pp. 219-238). Dordrecht, Netherlands: Kluwer Academic Publishers.

- Habuchi, I. (2005) Accelerating Reflexivity. In M. Ito, D. Okabe, & M. Matsuda, *Personal, Portable, Pedestrian. Mobile Phones in Japanese Life* (pp. 165-182). Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Hamill, L., & Lasen, A. (2005) *Mobile World: Past, Present and Future*. (L. Hamill, & A. Lasen, Eds.) London: Springer-Verlag.
- Hine, C. (2000) *Virtual Ethnography*. London: Sage.
- Hjorth, L. (2005) Outdoors of Mobility: Mobile Phones and Japanese Cute Culture in the Asia-Pacific. *Journal of Intercultural Studies*, XXVI (1-2), 39-55.
- Hjorth, L. (2008) Waiting for Immediacy. The Convergent Inertia between Mobility and Immobility. *Towards a Philosophy of Telecommunications* (ed) K. Nyíri (Vienna: Passagen Verlag), 189-196.
- Holliday, A. (2007) *Doing and Writing Qualitative Research* (2nd Edition ed.). Los Angeles, London, New Dehli, Singapore: Sage Publications.
- Hochschild, A. R. (1983) *The Managed Heart. Commercialization of Human Feeling*. Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press.
- Ito, M. (2003) Mobile Phones, Japanese Youth, and the Replacement of Social Contact. In R. P. Ling (Ed.), *Proceedings of Frontstage-Backstage: Mobile Communication and the Renegotiation of Public Sphere*. Norway: Telenor.
- Ito, M., & Okabe, D. (2005) Technosocial Situations: Emergent Structuring of Mobile E-mail Use. In M. Ito, D. Okabe, & M. Matsuda, *Personal, Portable, Pedestrian. Mobile Phones in Japanese Life* (pp. 257-273). Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Ito, M., Okabe, D., & Matsuda, M. (2005) *Personal, Portable, Pedestrian: Mobile Phones in Japanese Life*. Cambridge: MIT Press.
- Jamieson, L. (1998) *Intimacy. Personal Relationships in Modern Societies*. Oxford: Polity Press.
- Katz, J. (2003) *Machines that Become Us: The Social Context of Personal Communication Technology*. New Brunswick & New Jersey: Transaction Publishers.
- Katz, J., & Aakhus, M. (2002) *Perpetual Contact: Mobile Communication, Private Talk, Public Performance*. (J. Katz, & M. Aakhus, Eds.) Cambridge: Cambridge University Press.
- Kindberg, T., Spasojevic, M., Fleck, R., & Sellen, A. (2004) *How and Why People Use Camera Phones*. University of Sussex. Sussex: Hewlett-Packard Company.
- 今和次郎 (1987) 『考現学入門』筑摩書房.

- Knorr Cetina, K. (1997) Sociality with objects. relations in Postsocial Knowledge Societies. *Theory, Culture and Society*, XIV (4), 1-30.
- 是永論 (2007) 「プランが「見える」こと-配管工事現場における携帯電話利用を事例に-」『応用社会学研究』(49), 29-51.
- Lasen, A. (2004) Affective Mobile Phones. An Insight into How Mobile Phones Mediate Emotions based on Fieldwork carried out in London, Madrid and Paris. *Digital Word Research Centre (DWRC)*. Surrey: University of Surrey.
- Latour, B. (2007) Can We Get our Materialism Back, Please? *Isis*, XCVIII, 138-142.
- Latour, B. (2002) Morality and Technology. The end of the means. *Theory, Culture and Society*, XIX (5/6), 247-260.
- Latour, B. (2005) *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*. Oxford: Oxford University Press.
- Ling, R. (2001). It is "in". It doesn't matter if you need it or not, just that you have it. Fashion and domestication of the mobile telephone among teens in Norway. *Il corpo umano tra tecnologie, comunicazione e moda (The human body between technologies, communication and fashion)*. Milano.
- Ling, R. (2005) *The Mobile Connection: The Cell Phone's Impact on Society*. San Francisco: Morgan Kaufmann.
- Ling, R., & Yttri, B. (2002) Hypercoordination via Mobile Phones in Norway. In J. Katz, & M. Aakhus, *Perpetual Contact: Mobile Communication, Private Talk, Public Performance* (pp. 139-169). Cambridge: Cambridge Press.
- McLuhan, M. (1964). *Understanding Media*. London and New York: Routledge Classics.
- March, W., & Fleuriot, C. (2006) Girls, Technology and Privacy: "Is my mother listening?". *CHI* (pp. 107-110). Montréal, Québec: ACM Press.
- Matsuda, M. (2005) Mobile Communication and Selective Sociality. In M. Ito, D. Okabe, & M. Matsuda, *Personal, Portable, Pedestrian. Mobile Phones in Japanese Life* (pp. 123-142). Cambridge, Massachusetts: The MIT Press. (=松田美佐 (2005) 「ケータイをめぐる言説」『ケータイのある風景。テクノロジーの日常化を考える』松田美佐・岡部大介・伊藤瑞子 (編) (pp. 1-24) 北大路書房)
- 松田美佐 (2004) 「カメラ付きケータイと監視社会」『バイオメカニズム学会誌』XVIII (3), 129-135.
- 松永真理 (2000) 『i-mode 事件』角川文庫.
- Mauss, M. (1950) *The Gift: the Form and Reason for Exchange in Archaic Societies*. London: Routledge.

- Merleau-Ponty, M. (1945) *Phenomenology of Perception*. London and New York: Routledge Classics. (=メルローポンティ, M. (1982) 『知覚の現象学』法政大学出版社) .
- Meyrowitz, J. (1985) *No Sense of Place. The Impact of Electronic Media on Social Behavior*. New York, Oxford: Oxford University Press.
- Miller, D., & Slater, D. (2000) *The Internet: An Ethnographic Approach*. Oxford: Berg.
- 宮台真司 (2000) 『まぼろしの郊外-成熟社会を生きる若者たちの行方』朝日文庫.
- Miyake, K. (2007) How Young Japanese Express Their Emotions Visually in Mobile Phone Messages: A Sociolinguistic Analysis. *Japanese Studies* , 27 (1), 53-72.
- Miyaki, Y. (2005) Keitai Use among Japanese Elementary and Junior High School Students. In M. Ito, D. Okabe, & M. Matsuda, *Personal, Portable, Pedestrian. Mobile Phones in Japanese Life* (pp. 277-299). Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- 水越伸 (2007) 『コミユナルなケータイ-モバイル・メディア社会を編みかえる』岩波書店.
- 水越伸 (2005) 『メディア・ビオトープ-メディアの生態系をデザインする』紀伊國屋書店.
- Okabe, D. (2004) Emergent Social Practices, Situations and Relations through Everyday Camera Phone Use. *Mobile communication and Social Change*. Seoul.
- Okabe, D., & Ito, M. (2003) Camera Phones Changing the Definition of Picture-Worthy. *Japan Media Review* . (<http://www.ojr.org/japan/wireless/1062208524.php>)
- 岡部大介・伊藤瑞子 (2006) 「携帯電話を用いたヴィジュアルコミュニケーションの可能性に関する実証的研究」 『電気通信普及財団研究調査報告書』, (21), 49-55. ([http://www.taf.or.jp/publication/kjosei\\_21/pdf/p049.pdf](http://www.taf.or.jp/publication/kjosei_21/pdf/p049.pdf))
- Okabe, D., Ito, M., Chipchase, J., & Shimizu, A. (2006) The Social Uses of Purikura: Photographing, Modding, Archiving, and Sharing. *Pervasive Image Capture and Sharing* . Irvine: Ubicomp.
- 岡部大介・伊藤瑞子 (2008) 「『モバイルキット』に媒介された都市空間のパーソナライゼーション」 『情報文化学会』, XV (1), 28-36.
- 岡田朋之 (2002) 「メディア変容へのアプローチ-ポケベルからケータイへ」 『ケータイ学入門』 岡田朋之・松田美佐 (編) (pp. 23-46) 有斐閣.
- Okada, T. (2005) Youth Culture and the Shaping of Japanese Mobile Media: Personalization and the Keitai Internet as Multimedia. In M. Ito, D. Okabe, & M. Matsuda, *Personal, Portable, Pedestrian. Mobile Phones in Japanese Life* (pp. 41-60). Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- 岡田朋之・松田美佐編 (2002) 『ケータイ学入門』 有斐閣.



- Rechter, S. (2001) The Originating Breaks Up: Merleau-Ponty, Ontology, and Culture. *Thesis Eleven* , 27-43.
- Reid, D. J., & Reid, F. J. (2005) Textmates and Text Circles: Insights into the Social Ecology of SMS Text Messaging. In L. Hamill, & A. Lasen, *Mobile World. Past, Present and Future* (pp. 105-118). London: Springer-Verlag.
- Rettie, R. (2007) Texters not Talkers: Phone Call Aversion among Mobile Phone Users. *PsychNology Journal* , 5 (1), 33-57.
- Richardson, I. (2007) Pocket Technospaces: the Bodily Incorporation of Mobile Media. *Continuum: Journal of Media & Cultural Studies* , 21 (2), 205-215.
- Shilling, C. (2005) *The Body in Culture, Technology and Society*. London: SAGE Publications Ltd.
- Shilling, C. (2007) Sociology and the body: classical traditions and new agendas. *The Sociological Review* , 1-18.
- Strum, S., & Latour, B. (1999) Redefining the Social Link: From Baboons to Humans. In D. MacKenzie, W. Judith, D. MacKenzie, & W. Judith (Eds.), *The Social Shaping of Technology* (pp. 116-125). Buckingham: Open University.
- Suchman, L. (2005) Affiliative Objects. *Organization* , 12 (3), 379-399.
- Suchman, L., Bloomberg, J., Oor, J., & Trigg, R. (1999) Reconstructing Technologies as Social Practice. *American Behavioral Scientists* , XLIII (3), 392-408.
- Suchman, L., Trigg, R., & Blomber, J. (2002) Working Artifacts: Ethnomethods of the Prototype. *British Journal of Sociology* , LIII (2), 163-179.
- Taylor, A., & Harper, R. (2002) Age-Old Practices in the 'New World': A Study of Gift-Giving between Teenage Mobile Phone Users. *CHI 2002 Proceedings* (pp. 120-144). New York: New York ACM Press.
- Thiel Stern, S. (2007) *Instant Identity. Adolescent Girls and the World of Instant Messaging*. New York: Peter Lang Publishing.
- 富田英典 (2002) 「都市空間とケータイ」 『ケータイ学入門』 岡田朋之・松田美佐 (編) (47-73) 有斐閣.
- 富田 英典 (2009) 『インティメイト・ストレンジャー—「匿名性」と「親密性」をめぐる文化社会学的研究』 関西大学出版部.
- Villi, M. (2007) Mobile Visual Communication. Photo Messages and Camera Phone Photography. *Nordicom Review* , 49-62.

- Vincent, J. (2005) Emotional Attachment to Mobile Phones: An Extraordinary Relationship. In L. Hamill, & A. Lasen, *Mobile World. Past, Present and Future* (pp. 95-104). London: Springer-Verlag.
- Weight, J. (2007) Living in the moment: Transience, Identity and the Mobile Device. *Mobile Media 2007* (pp. 161-168). Sydney: Goggin, Gerard; Hjorth, Larissa.
- 山崎敬一 (編) (2006) 『モバイルコミュニケーション。携帯電話の会話分析』大修館書店.
- 吉田謙吉 (1986) 『考現学の誕生』筑摩書房.
- 吉見俊哉 (1987) 『都市のドラマトルギー：東京・盛り場の社会史』河出書房新社.
- Yoshimi, S. (2001) Japan: America in Japan/Japan in Disneyfication: The Disney Image and the Transformation of 'America' in Contemporary Japan. In J. Wasko, M. Phillips, & E. R. Meehan, *Dazzled by Disney? The Global Disney Audiences Project* (pp. 160-181). London and New York: Leicester University Press.
- 吉見 俊哉・若林 幹夫・水越 伸 (1992) 『メディアとしての電話』弘文堂.